

JAPAN FLORA 2000

「国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000」 (淡路花博)」開催に学ぶこと シンポジウム 記録集

主催：(公社)日本造園学会関西支部

協賛：(一財)淡路島くにうみ協会、(公財)兵庫県園芸・公園協会、(公財)神戸市公園緑化協会、(一社)兵庫県造園建設業協会、(一社)神戸市造園協力会、(一社)日本造園建設業協会兵庫県支部、(一財)日本造園修景協会兵庫県支部、(一社)日本造園組合連合会兵庫県支部、(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部、公園管理運営士会関西支部

後援：兵庫県、神戸市、兵庫県都市公園整備促進協議会、兵庫県花卉協会

|| 日 時 || 平成 27 年 8 月 1 日(土) 13:30 ~ 17:00
|| 場 所 || 神戸芸術センター 会議場

「国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000」 (淡路花博)」開催に学ぶこと シンポジウム

目次

1. 開催概要	1
2. 講演者・コーディネータープロフィール	3
3. 開催記録	9
(1) 淡路花博当時の関係者による講演	10
① 橘 俊光 氏 「淡路花博の基本的な考え方、経緯等について」	10
② 近藤公夫 氏 「淡路花博の基本構想の考え方等について」	16
③ 辻本智子 氏 「奇跡の星の植物館と淡路花博について」	21
④ 石原憲一郎氏 「淡路花博と淡路夢舞台、淡路景観園芸学校等 地域プロジェクト等について」	30
(2) 対談 / 総括	36
4. 配布資料	59
(1) 開催概要等	60
(2) 会場写真・会場基本計画図	65
(3) 近藤公夫氏資料	67
(4) 辻本智子氏資料	68
(5) 石原憲一郎氏資料	70
(6) 橘俊光氏資料	74

1. 開催概要

(1) 開催日時・場所

日 時：平成 27 年 8 月 1 日（土） 13：30 ～ 17：00

場 所：神戸芸術センター 会議場

(2) 講演会プログラム

13：00 受付開始

13：30 開会あいさつ／全体の趣旨

13：40 淡路花博の当時の関係者による講演

「淡路花博の基本的な考え方、経緯等について」

橘 俊光 氏（公益財団法人兵庫県園芸・公園協会理事

兼国営明石海峡公園管理センター長）

「淡路花博の基本構想の考え方等について」

近藤公夫 氏（奈良女子大学名誉教授、前神戸芸術工科大学教授）

「奇跡の星の植物館と淡路花博について」

辻本智子 氏（淡路夢舞台奇跡の星の植物館総合プロデューサー）

「淡路花博と淡路夢舞台、

淡路景観園芸学校等地域プロジェクト等について」

石原憲一郎氏（兵庫県参与、公益財団法人兵庫県園芸・公園協会

花と緑のまちづくりセンター長）

15：00 休憩

15：15 対談／総括

パネリスト：講演者 4 名

コーディネーター：中瀬 勲氏（兵庫県立大学名誉教授、兵庫県立

人と自然の博物館館長）

16：39 閉会

2. 講演者・コーディネータープロフィール

(1) 講演者プロフィール

近藤 公夫 (こんどう きみお)

奈良女子大学名誉教授、京都大学農学博士
日本造園学会名誉会員
公益財団法人兵庫県園芸・公園協会評議員



■略歴

- 1929年 京都府生まれ
- 1953年 京都大学農学部（林学科）卒業
- 1958年 京都大学大学院農学研究科博士課程修了、同年、京都大学助手
- 1962年 パキスタン共和国首都開発庁出向、首都中央公園基本計画など策定。
- 1965年 奈良女子大学助教授
- 1974年 奈良女子大学教授
- 1989年 神戸芸術工科大学教授

特別史跡五稜郭跡保存整備委員など現職のほか、元奈良県古都風致審議会会長、兵庫県文化財保護審議会会長、神戸市公園緑地審議会会長をはじめ、各種審議会委員を歴任し、全国の公園緑地の計画や緑化、史跡保全の計画・整備等を指導

代表作品に、須磨離宮公園整形形式庭園部分基本計画（1957年）、白川公園（名古屋市）計画懸賞公募一等当選案（1958年）から、アウグスブルグ日本庭園（1985年）、ベルギー日本庭園（1992年）など多数

【著書】「環境修景論」（地球社、1973、日本都市学会奥井賞受賞）、「英文作庭記」（日本造園学会、1975）、「造園技術大成」（共著、養賢堂、1978）、「造園ハンドブック」（共著、日本造園学会編、技報堂、1978）など

【受賞】日本造園学会論文賞、日本造園学会上原敬二賞、日本公園緑地協会北村賞、日本公園緑地協会佐藤国際交流賞、兵庫県・大阪府功労者表彰、兵庫県文化賞、地域文化功労者文部大臣表彰、地域環境保全功労者環境大臣表彰など
瑞宝中綬章の叙勲（2009年）

■淡路花博当時の関わり

1. 国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000 日本委員会」委員として、淡路花博の企画、計画策定等に関与
2. 国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000 日本委員会」専門委員会委員長として、基本構想案と推進方策の作成を指導
3. 基本理念の作成に続き、阪神・淡路大震災に伴う見直しのための基本構想再検討も指導
4. 屋内展示施設「緑と都市の館」のプロデューサー、展示内容を検討する“人と緑のコミュニケーション展企画委員会”委員長など併任

辻本 智子（つじもと ともこ）

兵庫県立淡路夢舞台温室「奇跡の星の植物館」
総合プロデューサー
公益財団法人兵庫県園芸・公園協会評議員
大阪府立大学経済学部、京都教育大学教育学部、
兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科
非常勤講師



■略歴

- 1952年 大阪府生まれ
1976年 大阪府立大学農学部園芸農学課卒業、同年、カナダ・ナイアガラ公園協会へ国際交流研修学生として留学
1981年 大阪府立大学大学院農学研究科緑地計画学修士課程修了
1982年 カリフォルニア大学バークレー校環境計画学部ランドスケープ学科大学院留学
1985年 (株)APP入社、都市プランニングを中心としたプロジェクトを手がける
1988年 松下電器産業労働組合ユニットピアささやま花の植物館館長就任
“自然と人間”をテーマに、プランニングからプロデュースまで行う
1995年 (株)辻本智子環境デザイン研究所設立
1999年より現職

代表作品に、花の植物館－松下電器労働組合ユニットピアささやま（兵庫県篠山市）、花の地球館（岐阜県可児市）、K 邸“丘の上のボーダーガーデン”（兵庫県芦屋市）、奇跡の星の植物館（兵庫県淡路市）、国際花の交流館主催者展示プロデュース・設計“循環の庭”植栽デザイン（浜名湖花博）など多数

【著書】「奇跡の星の植物館からのメッセージ」（グリーン情報、2007）など

【受賞】日本造園修景協会下山奨励賞、日本造園学会賞（技術部門）、
日本公園緑地協会佐藤国際交流賞など

■淡路花博当時の関わり

1. 淡路花博では、兵庫県の出展館として位置づけられた、奇跡の星の植物館の企画、計画段階から携わり、コンセプト、展示計画、整備を担当
2. コンセプト、ゾーニング、展示計画から整備まで、総合プロデューサーとして担当

石原 憲一郎 (いしはら けんいちろう)

兵庫県参与、公益財団法人兵庫県園芸・公園協会
花と緑のまちづくりセンター長
神戸ビエンナーレ 2015 企画委員・
エグゼクティブディレクター
東京農業大学客員教授
技術士（建設部門）



■略歴

- 1947年 兵庫県生まれ
- 1970年 東京農業大学農学部造園学科卒業
- 1970年 建設省入省。以後、建設省宅地開発課、同公園緑地課、国土庁筑波研究学園都市推進室、地域振興整備公団、建設省国営備北丘陵公園事務所長、総理府沖縄開発庁国営沖縄記念公園事務所長、神奈川県都市計画課専任技幹、国際花と緑の博覧会協建設課長、建設省公園緑地課建設専門官、同都市計画課建設専門官を歴任
- 1993年 兵庫県都市住宅部参事（国営公園担当）
- 1999年 兵庫県立淡路景観園芸学校副学校長
- 2002年 兵庫県県土整備部参事（公園・小野長寿の郷担当）
- 2004年 兵庫県立淡路景観園芸学校校長
- 2007年 兵庫県立淡路景観園芸学校校長（兵庫県参事）
・（財）兵庫県園芸・公園協会理事兼花と緑のまちづくりセンター長
- 2008年 兵庫県立淡路景観園芸学校校長兼（財）兵庫県園芸・公園協会理事兼花と緑のまちづくりセンター長
- 2009年 （財）兵庫県園芸・公園協会理事兼花と緑のまちづくりセンター長兼明石海峡公園管理センター長
- 2013年より現職

【著書】「自然環境復元の技術」（共著、朝倉書店、1992）、「フラワーランドスケーピング」（共著、講談社、1992）、「景観園芸入門」（共著、ビオシティ、2005）「成熟型ランドスケープの創出ー緑環境景観マネジメント」（共著、ソフトサイエンス社、2009）など

【受賞】日本公園緑地協会北村賞など

■淡路花博当時の関わり

1. 兵庫県都市住宅部参事として着任以来、国営明石海峡公園の計画、整備等とともに、淡路花博の誘致、建設省との協議調整等を担当
2. 淡路夢舞台の斜面地緑化推進のための「緑化アクションプログラム策定委員会」座長として、アクションプログラムをまとめ、事業推進を担当
3. 兵庫県立淡路景観園芸学校の構想立案、計画、建設、運営を一貫して総括的立場で担当
4. 国際コンテスト・クラス審査員（造園）を担当

橘 俊光（たちばな としみつ）

公益財団法人兵庫県園芸・公園協会理事

兼国営明石海峡公園管理センター長
一般財団法人日本造園修景協会評議員・兵庫県支部長
兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科
非常勤講師

博士（農学）・北海道大学

技術士（建設部門、環境部門、総合技術監理部門）



■略歴

- 1952年 北海道生まれ
- 1976年 北海道大学農学部農学科卒業、同年、兵庫県入庁
- 1983年 建設省都市局公園緑地課都市緑地対策室 緑地対策係長
- 1993年 兵庫県企画部企画参事付係長（財夢の架け橋記念事業協会祭典企画推進本部祭典企画部課長）
- 1996年 兵庫県都市住宅部公園緑地課課長補佐
- 2002年 兵庫県県土整備部まちづくり局公園緑地課主幹
- 2006年 兵庫県県土整備部まちづくり局公園緑地課長
- 2010年 兵庫県県土整備部参事兼 21世紀の森室長
- 2011年 兵庫県県土整備部参事兼 21世紀の森室長兼（財）兵庫県園芸・公園協会技術参事
- 2012年 兵庫県県土整備部参事兼兵庫県広域防災センター次長・防災公園管理部長（公財）兵庫県園芸・公園協会技術参事兼三木総合防災公園管理事務所長
- 2013年より現職

【著書】「これからの政策評価システムー評価手法の理論と実際」（共著、中央経済社、1999）、
「環境都市計画事典」（共著、朝倉書店、2005）、「公共政策のための政策評価手法」（共著、中央経済社、2009）

【受賞】日本造園学会賞（研究論文部門）など

■淡路花博当時の関わり

1. 淡路花博の誘致に向け、オランダで開催されていた「フロリアード '92」等を視察、調査し国際園芸博覧会のしくみ、内容等を調査、報告
2. 1993年、国際園芸博覧会を主催する（財）夢の架け橋記念事業協会に出向。国際園芸博覧会の誘致、内容の企画を担当。国際園芸家協会（AIPH）の我が国代表である日本造園建設業協会、及び所管の建設省との調整等を担当
3. 淡路花博開催時には、県の立場から、建設省、日本造園建設業協会等関係省庁・団体等との調整を担当

(2) コーディネータープロフィール

中瀬 勲 (なかせ いさお)

兵庫県立人と自然の博物館館長、兵庫県立大学名誉教授
農学博士



■略歴

1948年 大阪府生まれ
1972年 大阪府立大学大学院農学研究科修士課程修了
1972年 大阪府立大学農学部助手
1986年 大阪府立大学農学部助教授
1992年 兵庫県立人と自然の博物館環境計画部長、兵庫県立姫路工業大学
自然・環境科学研究所教授
2000年 兵庫県立人と自然の博物館副館長
2004年 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所教授
2005年 兵庫県立丹波の森公苑長 兼務
2009年 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科長
兵庫県立淡路景観園芸学校校長
2013年より現職

【著書】「アメリカン・ランドスケープの思想」(共著、鹿島出版会、1991)、
「もり・人・まちづくり」(編、共著、学芸出版社、1993)、「みどりのコミュニティ
デザイン」(編、共著、学芸出版社、2002)、「パークマネジメント」(編、共著、学
芸出版社、2011) など多数

【受賞】日本造園学会賞、兵庫県科学賞、兵庫県功労者表彰、兵庫県教育功労者表彰、
日本公園緑地協会北村賞、日本博物館協会顕彰など

■淡路花博当時の関わり

1. 淡路地域における各種の地域構想、花と緑に係る計画づくり等に委員等で参画
2. 屋内展示施設である「緑と都市の館」の世界の庭園・シナリオ検討委員会委員、及び国際コンテスト・クラス審査員(造園)を担当
3. 兵庫県立人と自然の博物館として、「緑と都市の館」の“共生の森・熱帯雨林展”等の展示等を担当

3. 開催記録

(1) 淡路花博当時の関係者による講演

講演①

「淡路花博の基本的な考え方、経緯等について」

橘 俊光 氏（公益財団法人兵庫県園芸・公園協会理事
兼国営明石海峡公園管理センター長）

（司会）

それでは、講演会に移らせていただきたいと思います。配布資料1ページ目に、今日のプログラムを載せております。2ページ以降に、ご講演いただきます先生方のプロフィールを掲載させていただいておりますので、あわせてご覧いただきたいと思います。

最初に、「淡路花博の基本的な考え方、経緯等について」、公益財団法人兵庫県園芸・公園協会の理事であり、国営明石海峡公園管理センター長でいらっしゃいます橘さんにご講演を賜りたいと思います。橘さんのプロフィールは資料の5ページに掲載しております。淡路花博の誘致に向けて、オランダで開催されました「フロリアード」の視察を踏まえて、県の立場から調整をされて、この一連の運営にご尽力された方でいらっしゃいます。

橘さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

（橘）

ご紹介いただきました橘でございます。「ジャパンフローラ2000」の基本的な考え方、経緯等をお話したいと思います。

そもそも「ジャパンフローラ」なんですけれども、ご存じのように明石海峡大橋が戦

前から、淡路と本土を結ぶという「夢の架け橋」と言われていたわけですが、昭和63年に着工が決まりまして、本州四国連絡道路のルートが決まりました。これが世界最長の吊り橋ということで、着工以来完成に向けて、どういう形で、地元でそれを祝っていくかということがありました。明石海峡大橋の完成記念事業ということで、そのときにいろんな人たちの幅広い議論があったんですが、一つ出てきたのが「コミュニケーション文明の祭典」という提案でした。細かい話は抜きにさせていただきますが、そういうときに、何をやるかという話になったときに、日仏友好のモニュメントというものと国際園芸博というものが具体に出てきたのが発端です。

また石原さんが説明されると思いますが、もともと旧淡路町、東浦町で現在の淡路市になるわけですが、明石海峡大橋を渡った



橘氏の講演の様子

すぐの灘山というところの 120ヘクタールほどの土地、灘山というぐらいますから山があったんですが、その土取跡地をどうするかという話が話題にはなっていました。直接的に明石海峡大橋と関係あるわけではないんですが、昭和30年代から30年間で1億立方メートルと言われているのですが、高いところは 160メートルぐらいの高さの山が海岸にせり出していたところが、こういう形になりました。

実は、これは民間の土地でしたので、どうするかということは、昭和60年代に入って土取りが終息するというときに、ちょうどその当時、昭和61～62年ぐらいは、リゾート法が社会的に話題になっていたときで、民間事業者はここにゴルフ場とホテルというような構想立案がされていました。どっちかという、それではまずいだろうといって、手を突っ込んだのが県ということなんです。

もっと積極的な土地利用を考えていく必要があるんじゃないのといって出てきたのが淡路島国際公園都市構想です。そこの面的な整備を、理屈はいろいろあるんでしょうけれども、関西とか大阪湾ベイエリアの21世紀の先導拠点というようなこと、それからあとで加わっているんですけども、阪神・淡路大震災の震災復興のシンボルプロジェクトという位置づけのもとで、「コミュニケーション都市の形成」ということで、この構想ができあがったのが、平成4年ぐらいに土地利用について出ています。場所的にはこういうことになるんです。

場所は、土取地ですが、もともと隣接に淡路島公園ということで、県で県立公園を整備していた場所があるわけです。そこに本

四道路のルートが決まって、S AとI Cがくるということで、このへん全体を、すでにそれぞれ計画のあったトータルで約350ヘクタールぐらいの複合的な面的開発の土地といえます。土地があって、あとでいろいろ理屈つけてという感じになるんですけれども、そこでこういう形のものを最終的にはつくるといって絵が描かれたわけです。

ちょっと申し上げた中の日仏友好のモニュメントというのが、この場所につくるといって、これは全然関係ないとは思いますが、フランスが自由の女神を独立100年でアメリカに贈ったので、その100年後、アジアとの交流というフランスの民間の立ち上がりの中で、場所はアジアで、日本に、なおかつ淡路島にと、こちら側の働きかけもあったようなんですが、そういう形の中でモニュメントの話が出てきました。それとセットだったんですけども、残念ながらこれはちょうど阪神・淡路大震災で休止になり、現在も休止状態のままなんです。そういうことの中で、モニュメントはちょっと結果的には止まったんですが、並行しながら、そこで花博という話になってきました。

本当は90年に大阪花博があり、この淡路花博の発想は大阪花博ではなくて、実は92年にオランダで「フロリアード '92」がありまして、それを当時の貝原知事がご覧になって、これが本当の花博かと感じられ、フロリアードを淡路でできないかというのが大きな発端になっているというのが、淡路花博の最初の原点かなと思っています。

すぐわれわれ職員に、フロリアード調査団ということで、1992（平成4）年9月、20名ほどでフロリアードと、次の年、ドイ

ツで I G A があるというので調査にいきました。花博というのは国際園芸家協会 (A I P H) が承認する博覧会、国は大阪花博から建設省と農林水産省が担当。それから日本造園建設業協会が日本の窓口、そういうことがわかったものですから、そのへん、A I P H も含めて、知事が最初にご覧になってから3カ月後ぐらいには現地に調査に行ったということで、帰ってきてから、その当時、「ジャパンフローラひょうご'98」という提案を職員でしたという状況です。

それで、じゃあ、それを始めようという話になって、兵庫県から A I P H の日本の会員である日造協に表明して、ぜひやりたいという話をして話が進んだということです。県のほうは、「コミュニケーション文明の祭典」から始まっていますので、まだ「コミュニケーション文明の祭典」をやる、すなわち明石海峡大橋の完成記念ということで、花博をやる協会も花博協会ではなく、夢の架け橋記念事業協会で、次の年、1993年5月に発足して、そこが事務局になるということで動いてきました。1993 (平成5) 年9月、ドイツの I G A の会場で A I P H の総会があるということで、そこに申請して、知事以下みんなで乗り込んで、プレゼンして、決定していただきました。

基本計画をつくるときに、どういう体制をしたかという、事務局は夢の架け橋記念事業協会なんです、「ジャパンフローラ日本委員会」という名前の大きな組織を、それなりに経済界とか関係のところの代表の方にも入っていただいて、全国的な組織という形にして内容検討に入ったということです。

地方でやる、兵庫県でやる、だけれども国

際博。国際博をやる推進母体としてはやっぱり日本委員会、これぐらいじゃないとだめだろうということで、1994 (平成6) 年12月、日本委員会が設立され、スタートしました。そういうことで計画を進めたわけですが、次の年、1995 (平成7) 年1月に阪神・淡路大震災が発生して、結局はジャパンフローラ '98が「ジャパンフローラ2000」ということで、その年の A I P H 総会に申請しまして、2年延期で「ジャパンフローラ2000」となったということです。

ちょっと内輪話なんです、国際博をやるとき、「大阪花博でやったんで、10年後に A 1 ができるから、2000年にやってはどうですか」というのを、担当者としてはチラッと行ったんですが、注目もされませんでした。でも結局は大阪花博の10年後、「ジャパンフローラ2000」になったということなんです。

そもそも I G A を開催しているドイツとフロリアードを開催しているオランダは、10年ごとに A 1 というクラスの国際園芸造園博を、同一国で10年に1回しかできない国際博をずっとやってきているということです。ドイツは都市緑化とかまちづくり系で取り組んでいる。オランダは完全に花卉産業というか花の産業振興でやっているということで、これはかつて村瀬さんがかいている考え方を示した図です。ちょっとニュアンスは違いますが、それまでオランダは西暦2のつく年、ドイツは3のつく年、10年ごとにやっているのがこの花博で、それが A 1 というやつです。同一国で10年に1回で、これは B I E という国際博覧会協会、ここの条約を承認して、この条約国が万博をやるわけですが、A I P H でやる

花博の10年に1回はB I Eの承認というか、追認を受けながら、ここの万博と同じクラスということでやっています。それ以外は国際園芸家協会独自でやる博覧会として分類があります。大阪花博はA 1になるわけです。

「ジャパンフローラ」の当時のパンフレットのコピーを入れております。半分は国営明石海峡公園の整備中の区域を借り、半分は国営公園の整備前の土地をお借りして会場整備をやるという、どちらかという、最大限に生かすようにさせていただいているということです。当時の会場の様子です。

大阪花博とちょっと違うところが、博覧会の性格で、大阪花博はA 1ですが、淡路花博はA類2とB類1という博覧会です。そういう博覧会はそれまでなかった。それを、A I P Hにこういうことでできませんかといったのが兵庫県なんですけれども、そういうやり方は今までやったことがない。そういうやり方があるんだと向こうの人が驚きまして、できませんかって言ったら、いいんじゃないって言ってくれて実現したのが、こういうタイプの博覧会です。

「ジャパンフローラ」の場合は、実は安藤さんの建物の温室も含めて約490億円、あとで石原さんにお話しいただく新たにつくった斜面地緑化。国営公園としての整備は国がしてくれている。それに花博会場としてやった周辺整備ということで、大体850億円ぐらいかかってやっております。

博覧会としては、収入と支出ということで、それなりにコンパクトな博覧会じゃなかったかなと思うのですが、結果的には500万人の予想のところ、700万人来ていただいて、22億円の利益を得たということ

です。これに県からの8億円をプラスした30億円を基金にして、2001（平成13）年に淡路花博記念事業協会という協会をつくりました。

最終的に、これは公式記録に載っている成果ですが、自然の回復やら、700万人の来場やら、阪神・淡路大震災からの復興ということ、また、当初、基本理念を近藤先生に書いていただいたやつを、2年延期ということで近藤先生にまた見直していただいたわけですが、そういうアピールとか。結果的に大きな経済効果とか、ボランティアの参加とか、事故もなく円滑な運営ができたとか、あとは県内の園芸産業にいろいろ経済効果があったというようなことで括っています。ただし、まだいろいろ話があるかなと思うんですが、一番下のところなんかは、私としては、園芸・造園の産業に対してどうかというのは甚だ疑問なところがあると思っています。

特徴は、さっき申し上げたA 2、B 1というクラスの組み合わせの博覧会であったということ。A 2というのは3週間ほどしかできないわけですが、B 1は半年できる、海外参加を求めた国内博なわけです。厳密に言うと、3週間しか国際博じゃないじゃないかということなんです、そういう名前のもとでB 1という国内博をやることで、全期間国際博というふうにするやり方を編み出したというところで、これがその後の前例になりまして、静岡の2004年、それから台湾、中国、タイ（チェンマイ）、韓国もそうなんです、この形式でやっている。今後も中国中心にこの形式が定着したということで、兵庫県がそういうやり方を提案して定着させたというところがあるかなと

思います。

そもそも、会場計画を見ていただくとわかるんですが、大阪花博と決定的に違うのは、パビリオンとか建物系がほとんどないというか、少ないところかなと思います。貝原知事もその当時、フロリアード、フロリアードと。大阪花博じゃないという言い方をしていました。それから土取地全体への取り組みですね。それ以前からカナダの「ブッチャートガーデン」をご覧になって、ここだというのがあったんで、精神、目標としてこのへんのところを目指している。それから施設の有効利用。夢舞台、奇跡の星の植物館、ホテル等があるんですが、永久物として使うわけですけれども、その完成と今後の利活用。国営公園を徹底的に利用させていただいたということかなと思います。

それをリーダーシップ取っていただいた貝原さんなんですが、本当はこの会にお呼びして、そのへんのところをお聞きしたいと思っていて、企画書を持って話に行こうとした矢先に不慮の事故で亡くなられたということで、今の時期にこういうメンバーで始まったんですが、私にしたら、はっきり言えるのは貝原さんのリーダーシップと信念があったと。当時の貝原知事には理論武装して話しにいかないところばんにやられる。それからご本人の強い思いみたいのがあったかなと。知事は日本造園学会賞特別賞を、「ジャパンフローラ」開催時の造園学会全国大会のときにもらわれているんですが、この賞は、学者・研究者あるいはコンサルとか、造園関係者以外でもらった人はいなくて、全国の首長でもらったのは貝原さんだけです。

全体の流れとしてはこういう流れの中で、あとで話しがあると思いますが、園芸学校のこととか、もともとあった淡路島公園とか、国営公園とか、これらが収斂する形で一つのでき方が花博かなと。「ひょうごフローラフェスタ」という花と緑のイベントを花博後にも県内の県立公園で継続してやったり、タイ・チェンマイのラーチャプルック2006では大阪、京都、兵庫の3府県でしたが、その他の海外の園芸博覧会などにも県独自で取り組んできています。それから淡路花博後の10周年、15周年にも花緑フェアをやってきています。

この図は、淡路花博10周年をやるときに、貝原さんに説明に行くのにつくった図です。私、15周年だけ勝手に入れてきたんですけど、果たしてこの先あるかな（笑）。貝原さんの思いは、継続的にやるという思いがどうしてもあって、それを10周年やるときに一生懸命説明したわけです。それを説明するための図をつくって、まず「ジャパンフローラ2000」の精神がありまして、それを継続していくという気持ちを強調して。ことし15周年やったんですが、その精神を本当に引き継いでいるかどうかというのは、ちょっとまた別な話であるかなと。

最後なんですが、日造協の副会長でAIPHの副会長でもある和田さんが、中国とかほかのアジアの動向は、従来のいわゆるヨーロッパのやつは園芸・造園博としての、先ほどの村瀬さんの絵がありましたけれども、そういうものからもっと地域開発とか観光開発とか経済活性化とかにシフトしており、まさに中国はそうだという指摘をしています。それから、大規模イベント開催への意欲みたいなものがあって、やってい

ると。A 1にこだわらず、A 2、B 1でもど
んどんやるという方向だということです。

これはまた後の議論で出てくると思うん
ですけど、東京はオリンピック・パラリン
ピックと言っていると、関西はどうなんだ
ろうということもありますし、もうちょっ
と長い先を見て、花博か、これからの博覧
会か。私が思ったのは一番下のところ、本
来の園芸博とか造園博というところをも
うちょっと真剣に考えることが必要、そし
てそれをやるのもいいのではないかなと思
っています。

私の話は以上でございます。ありがとう
ございました。(拍手)

(司会)

橘さん、どうもありがとうございました。

前例のない、初めての試みであった博覧
会の立ち上げからその後の展開まで、一貫
した政策の推進についてご説明をいただき
ました。ありがとうございました。

講演②

「淡路花博の基本構想の考え方等について」

近藤 公夫 氏（奈良女子大学名誉教授、前神戸芸術工科大学教授）

（司会）

次にお話しいただきますのは、橘さんのご講演の中でもご紹介いただきました近藤先生でございます。近藤先生は、この「ジャパンフローラ2000日本委員会」の委員、それから専門委員会委員長として、基本構想の立案、推進方策の作成についてご指導されました。その後、基本理念の作成に続きまして、阪神・淡路大震災に伴う見直しの基本構想の再検討の際にも指導をされております。

それでは近藤先生、ご講演をよろしくお願いたします。

（近藤）

ご紹介いただきました近藤と申します。造園学会のほうはかなりご無沙汰しております。というのは、以前、IFLAとICOMOSの日本代表をやりまして、それが終わったのが1995年ぐらいで、20年余り公式の造園学会の場へ顔を出しておりません。

若い方は、「えらい年寄りが出てきよったな」とまごついておられると思いますけれども、このフロリアードとの関連は、先ほど橘さんが言っていたので、一応納得していただけたのかなと思います。

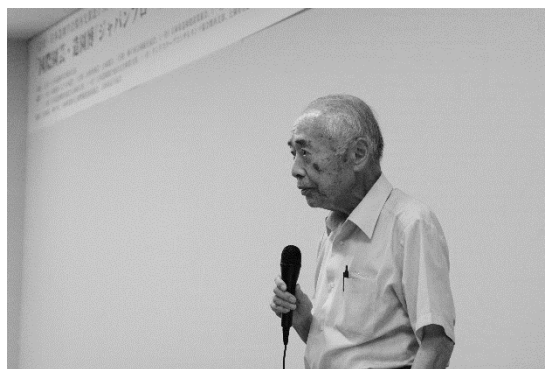
もう一つ申しますと、肩書きのところは奈良女子大云々となっております、「何で女子大の先生が、こんなところでしゃべりよんねん」というのもまた素朴な疑問、ある

いは絶対的な疑問かもしれませんが、本来、私は京大で造園をやっておりました。

地元に対するリップサービスとしまして、ちょっと加えますと、神戸に須磨離宮公園がございますね。あの基本構想をつくり出したのが、60年前の私でございます。

ということで、ここにお出でになる方の大抵の人たちより20年以上の年寄りが、ここで話をさせていただくと、恐らく一生のおしゃべり納めをするようになるんじゃないかな。ここから座らせていただきますが、背の低い男が座ってしまいましたんで、余計見にくいと思いますから、後ろの方には失礼ですが。

14ページに資料がございます。ほかの方はびっちり書いておられますけれども、私は1、2、3、4と、これだけのことを書いてだけで、誰でもこれは書けるではないかと思いますが、私が講義のときに使う、学生に配っておりました資料とはこういうもので、寝ているやつは絶対試験とかが通



近藤氏の講演の様子

らない。あるいはこの頃ですと、指先で、機械で遊んでいる人も、落ちるわけですね。

ちゃんと聞いてメモしたやつ、耳と手で覚えたやつが、おれの試験は通るということで、今日、こんなこと言いますとあまりにも押しつけがましいですけども、何か内容があるかもしれないと思いの方は、この隙間、隙間に、メモを書いていたきましたらというのが、この資料のプリンシプルでございます。

一番はじめに、1990年の「国際花と緑の博覧会」云々と書いておりました、実は先ほど少し申しましたように、私自身が日本誘致に絡んで1985年に日本で I F L A の世界大会がございました。このときに私は関西地区の総務を勤めましたので、造園プロパーのほうで国際的な関連のある男はあいつだろうと、この国際博の基本構想委員ということになりました。

単なる構想委員、これは小松左京だとかあんな連中。と言うと「あいつ、えらい横柄なことを言う」と思われるでしょうが、小松左京は私の三高の同期生で、別に偉い先生でも何でもないとその頃は思っておりました。そのあとで、彼のほうが偉くなって、こっちはあんまり偉くなれなかったというだけの違いでございます。

基本構想の委員の中で3人の起草委員が設定されまして、私はその一人で、ということで、つくった構想に責任を持てと、構想のPRにアメリカだとかイタリーだとか、実はイタリーのほうは自費で行ったんですけども、海外へもいろんなコネを使いまして、花博が実際に海外からの知名度を高めるように努力したことが、実はこの下敷きでございます。

フローラの話が出たときに、今、地元にはあのとき大阪でやとった近藤という奴がおるじゃないかと、橘さんが言ったのか誰が言ったのか知りませんが、当時、神戸芸術工科大学の教授をやっておりましたから、こちらの起草構想委員になったというのが、先ほど橘さんから言っていただきましたことの発端でございます。

フローラの理念につきましては、書き直しから何からずっとやりまして、もう少し、次の構想から計画にかけても関係させてもらえるかなと思いましたが、実はそこまで、その後はあまり関係がなくなっていました。

その点は、私が非常に遺憾とするところですが、国際花博の場合は、建設省が出席しました砂防ランドの担当委員長という形で、最後の設計から運営まで、ずっと関係していたのにくらべて残念でした。

計画の実施段階では、先ほど橘さんのお話にありましたように、総経費 850億円の内、大体、安藤忠雄さん関係に 500億円取られてしまったということはお存じの通りなのですが、私としては、5億円とは言わないが、せめてもう1億円ぐらい造園プロパーのほうに上積みをしていたら。

それが運営レベルのほうで問題となって出てきましたのが、夏のシーズンでした。

この国際花博はそれまで集客は抜群でございました。当時、まだ奈良で非常勤講師などをやっておりましたから、ホテルで昼飯食おうと思いますと、がらがらなんですね。「えらい、今日、すいてんなあ」と、そんな話をしますと、「観光客が全部淡路島のほうへ行ってしもうて、困ってまんねん」とか。

淡路にとっては、春はよかったのですが、夏場になりますと、あの会場は暑かったですね。記憶のある方は多いと思います。私がもう1億円を上積みして、もう少し水に関係のある施設、そして日陰のできるような工夫、それをやるべきだと提案しました。

実は、そのメモを書いて当局のほうへ出したことがあるのですが、「ここまでうまくいっておるんですから、近藤先生、別に心配せんでもええ」と、お茶を濁されてしまいました。

先ほど500万人の予想が700万人も集まったというお話がありましたが、今から考えますと、夏の2カ月間六十余日、1日1万人ずつ増えても、700万人のものが800万人弱までいけた。こうなりますと、先ほどかなりの黒字が出たというお話がありましたが、もっと膨らんだのではないでしょう。

これを活用すれば、フロリアードが今日までもっと存在価値を発揮できたというのが、私なりの心残りでございます。

せめてお金を使わないで、もっと夏のお客さんを集めるための工夫がないかと、私なりに考え、これも関係者に言ったことあるのですが、あの会場は夏の夕方が涼しかったですね。日が西に沈みますから。

午後の4時頃になりますと、日陰がずっと増え、海から風が通ります。そのため、もう少しイブニングショー的な意味合いを入れまして、花が夜どんなふうに見えるのか。

昼間の太陽の下の花と照明をつけた場合の花と、照明も工夫されていたわけですから、そういうような状況も入れて、フロリアードの魅力をもっとアピールできたと、今でも考えております。

それからもう一つ、なぜこれが注目されなかったのかなと思いますのは、神戸からの海上ルートですね。あれ、すばらしかったですね。特に夜は。

フロラでは港をつくっておりましたから、帰りは電車もバスも混むので、船で帰るということにしていたのですが、会期中、責任者の一人といたしまして何回も参りましたが、夜、船が岸を離れまして、会場の夜景を見ながらずっと走っていく。

会場が見えなくなってきましたと、今度は神戸の夜景が見えてくる。これは、その気になってやれば、神戸、あるいは兵庫、会場、それぞれの魅力をアピールして、神戸市民の方々、兵庫県民が、海から見る我が郷土というものを体感してくれたんじゃないか。それは後々まで続く郷土にもつながったのではないのかと今でも考えております。

余分なことをいろいろと申しますが、構想の中で私なりには、大阪の場合と違っていて、この会場は海と山とが一体になってランドスケープがすばらしかったですね。それをもっとアピールできなかったのか。

確かに夏の暑いとき公園の会場の高みへ登るのは大変だったのですけれども、そのための輸送なら、たとえばリフトなんか、1億円もかけずにできたんですね。それをもう少し工夫さえすれば、もっと会場の公園を、あるいはフロリアードの魅力を高めたでしょう。

あの会場ならではのランドスケープの条件があったのにもったいないなど、今でも考えております。

それで、あとへ残したものについて考えてみますと、先ほど橘さんが、地場産業との関係で言葉尻を濁されましたが、そもそ

もコミュニティーシティという発想がありました。

私が最初に花博会場の予定地を見に行った時に感じたのは、私自身がハンブルグ大学で日本庭園をつくったときに、あの町にしばらく滞在した際の体験でした。

ハンブルグの町は住宅街が湖水を挟んでビジネス街と向かい合っていて、陸上ルートもありますけれど、毎朝、出勤する人は船に乗って自分のオフィスへ行くことができたイメージがあります。

そうしますと、コミュニティーシティとしての淡路では、今からでも遅くないですから、ちょっと考えると、淡路島は景色がよくて、空気がよくて、魚がおいしくて。そういうところに家族たちは生活してくれて、自分も夜はそこに暮らして、朝は船に乗って出勤して、というパターンがあれば、これは兵庫と神戸と淡路の売りになるはずですよ。

そんなことを、先ほどのコミュニティーシティというものを通じても考えることができるのではないかと。

そのコミュニケーションとは、ただ単に人と人とのコミュニケーションではなく、そういう環境との間とのコミュニケーション、いい空気とのコミュニケーション、水辺とのコミュニケーション、海とのコミュニケーション、そういうものができるようなポテンシャルがまだ今も淡路にあるのではないのでしょうか。

これを将来に向かってどう生かすべきかが、レジュメに記入した3のお話のまとめになります。

将来への課題と書いてありますが、ここでしゃべってしましますと、あとでパネル

ディスカッションのタネがなくなりますのでヒントだけ。

実は、フロリアードでやり残したことでしましては、神戸あるいは兵庫県が持っておりますボランティアスピリットを、もっとフロリアードに活用できなかったのかな。もっとボランティアが活躍できるようなサイトをあの中に設定して、「市民が行うフロリアードなんだ」、「県民のフロリアードなんだ」ということをアピールできたら、先ほど橘さんが、2010年はこうやって、15年はこうで、20年はこうやってということも、これからの課題としてもっと生きてくるのではないのでしょうか。

橘さんも県を定年ですけれども、私よりも二十才そこそこ若いのですから、私の年まで頑張ってくださいなら、2040年かそこらへんまではいくはずですから。

それから、先程もちょっと触れられましたが、会場となった淡路島とその周辺は明石海峡の公園群や、いくつもの公園があちこちに点在しており、景観園芸学校まで含んで「みどり」の拠点となっているところです。

それをもっと有機的に結びつけて連帯させて、トータルした魅力をアピールする。

一番それを感じたのは、個人的な体験ですけれども、この2月に沖縄に行きまして、ちょうど春節があったものですから、中国の方がたくさん来られていました。

われわれ日本人は隅っこのほうになっていた印象もありますけれども、今、東アジアの人たちが日本へやって来ています。

日本が戦争の反省をしないと行って、言われてもおりますけれども、これだけ平和でリッチな国がつくれるのは、われわれが

戦争を反省した結果である。その方向でお互いに協力しましょうということをアピールする。

そういうアピールを体験したい人たちにもっと来てもらって、と考えれば、あれだけのフロリアードはパーク、グリーンアリー、それに伴ういろいろなノウハウ、そのものが一体としてネットワークできるはずの機会です。

それをアジアの人たちにもっと学んでもらう場所がここにできるのではないのでしょうか。ただ単に学ぶのではなくて、それを楽しんでもらって身につけてもらったらいんですね。そういうことが今後の課題に浮かび上がってくるのではないかな。

それを学会としても、大いに頭を使っていただくよう、これからの課題にしてほしいと思っています。

以上でこの4つのレジユメのテーマは一応ここまでにしておきます。

どうも病後の喉でしゃべりにくいところ、お聞き苦しい話を、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（司会）

近藤先生、どうもありがとうございました。

近藤先生のお話の中で、大阪花博のお話もございました。先ほど、若い学生さんもいらっしゃったので、少しお聞きしてみましたら、「子どもの頃だったので、このジャパンフローラは覚えていない」というような方も、今日はお見えになっています。そういう中で、これまでの歴史的なお話を頂戴いたしまして、ありがとうございました。

講演③

「奇跡の星の植物館と淡路花博について」

辻本 智子 氏（淡路夢舞台奇跡の星の植物館総合プロデューサー）

（司会）

それでは、「奇跡の星の植物館と淡路花博について」ということで、淡路夢舞台「奇跡の星の植物館」の総合プロデューサーでいらっしゃいます辻本さんにご講演をお願いしたいと思います。よろしくお願いします

（辻本）

資料のほうはA4の紙を見ていただいて、「奇跡の星の植物館」のリーフレットもご覧ください。大体私はいつも話が長くなるので、資料の最後の方については、後のディスカッションに残したほうがいいのかもかもしれません。

私も、先程お話のあった大阪の花博の際には、花博が国際博として開催できるかどうか、また、企業にご協力いただけるかどうか、というようなことを、1985年からシンクタンクでお仕事をしておりました。大阪の花博の際は、後のほうでまた話したらいいのですが、はじめは大阪市が市制100年ということで、鶴見緑地周辺の地域を振興するために行われる計画でした。それが、国の一つの大きなイベントになって、私としては、国のイベントとなった途端におもしろくなくなったという感じがしました。

そのあと、自分がデザインした植物館の館長になりましたので、少し離れておりました。1988年から篠山のユニトピアささやまという、松下電器の労働組合が管理して

いる施設の花の植物館の館長をしていたのですが、その時に当時の兵庫県知事である貝原さんが、1989年だったと思いますが、「丹波の森構想」を挙げられました。当時、私のところにナイアガラ園芸学校を卒業したスタッフが2人来ておりまして、私も研修学生で行っていて、京大の女の子も一人ナイアガラに行っておりましたが、そういうナイアガラネットワークで取り組んだ植物館です。そこへ貝原さんが来られたときに、「海外の植物園とか公園にはちゃんと園芸学校とか研究機関がある。日本もそういうふうにならなきゃいけないんじゃないですか」という話をして、大阪の花博でも跡地利用案として園芸学校、宝塚での仕事でも園芸学校というように、何をやっても園芸学校というのを提案していました。すると貝原さんから「2年後に実現するよ」と言われたのでびっくりしました。当時、宝塚の仕事で国土交通省の担当者だった女性が、私の報告書を見て、宝塚でやりたいと



辻本氏の講演の様子

いう気になっていた時なのですが、「淡路でやるからごめんなさい」という感じでした。そして、淡路の景観園芸学校が設立されることになりました。

実は、1994年に篠山の植物館に行っていた時から、奇跡の星の植物館に関わらせていただいていた。お手元の資料にもあると思いますが、1995年から仕事していたのですが、仕事をもらっているいろんなことを考えたときに、「やっぱり淡路島を公園島にしたい」という貝原さんのお話がありました。これについて、1995年に私がこの企画書を書いた中でどういうふう考えたかという、大阪ベイエリアにどんな施設ができてくるかということです。その頃はWHOもまだ来ていませんでした。WHOができるのか、地球環境国際研究所や中国の医療関係の施設が来るというような話があり、私の中では「花と緑の公園島」というより、「花と緑の健康島」、環境の健康、心の健康、もともと淡路島に健康道場もありましたし、リタイアした人たちの家もあったので、健康島にしていったらいいのでは、と考えていました。大阪ベイエリアの観光というものもありますが、景観園芸学校と国営公園と植物館が中心になってネットワークしながら、景観園芸学校は後継者育成や公園をマネジメントできるような人を育てていくということ、また、植物館は新しい共生のライフスタイルをどんどん発信していくところ、国営公園の役割についてはちょっと難しいところがあるのですが、最初の段階では管理は国が昔の公園管理財団としておりましたので、とにかく3つが1つにならなきゃいけないということでつくられました。人間が破壊したものを再生する、

破壊した里山を人間自らの力で再生しようということが目的でつくられたところです。その基幹施設として、この3つということになったのです。

今から植物館の宣伝みたいなことが続きます。ここまでお話したような中で、私がつくった植物館はどういうことを目指しているかと言いますと、ここにも書いておりますように、植物館の中で「ガーデンルネサンス」という言い方を始めたのは2、3年あとのことなのですが、この植物館の中では、自然と人間の共生ということをテーマにしながら、夢舞台は、自然が破壊された屋外の緑再生の実験の場ですから、私は何となくここを、人間の再生のところだと思いました。私たち人間がいろいろな緑のライフスタイルを失ってきている、それを再生するところだということで、「共生のライフスタイルを継承する植物館」、「花と緑の感動空間創造型植物館」、「実験情報発信型植物館」を目指そうということにしました。「ガーデンルネサンス」というのは何かと言うと、自然の美しさやすばらしさを五感に訴えるとともに、自然とともに生きてきた先人の暮らしのあり方や、その暮らしが生んだ花文化のすばらしさに学び、さまざまな分野の人々とコラボレーションしながら、地域性、伝統性を継承する花緑空間、21世紀の都市緑化を提案していくということです。

それを具体的にしようと思ったら、五感をまず磨かなきゃいけない。植物館で五感を磨こうということと、共生のライフスタイルを生み出した花文化の継承ということで、まずはそれを知らなきゃいけない。日本では伝統園芸もあります。2番目は地域

コンテクストを踏まえた花緑空間の具体的な提案、3番目は植物だけでなく、日本の花文化というのは食とか音楽とかアートと一緒にいる、もともとそういうものであるということを伝えよう。さらに、海外の花文化についても伝えていきます。

それから、新たな花緑空間の実験研究の情報発信をするということで、ただ緑の分野の人だけではなく、アートの人たちとコラボレーションする、植物館の中だけではなく、企業とのコラボレーションもしているということにも取り組んでいます。民間でつくりあげるといふところは、サポーター組織ということで、先ほど近藤先生が言われた住民参加ということなのですが、淡路での住民参加は、公園の周りに住民がいませんので、特に夢舞台ではなかなか大変でした。またあとでお話しますが、初めは公園内でやっているだけということで、地域住民の方々だけではなくサポーターさんも大阪や神戸から来られる方もいらっしゃいましたが、最後になって淡路島はお金がかかりすぎるという問題がありました。そういうこともあるのですが、そういうサポーター組織という進め方をしていました。

植物館は、先ほどの五感に訴えるということ、まず五感を磨こうということから、展示方法も他とは違うと自分では思っています。植物の、例えば形を活かして、植物の形を読み取ってもらおうということで、アートギャラリーみたいにして、植物を展示物のようにしてみる。何でこんな変なことしたのかなど、まず気づいてもらう。この部屋の展示について気づかない人に対して、私はいつも「鈍いなあ」とか判断をしていますね。最初、石原さんはすごくほめてく

れました。「こんなすばらしいの」と言われ、「あっ、いけるじゃないの、石原さん」という感じでした。ここに来る人は建築が結構好きな人が多いのですが、気づかない建築家がいたら、「こいつはだめやな」と、そういう判断をする部屋です。みんなに気づいていただこうと思っています。この部屋はもともと色で展示しようとして、大阪ベイエリアの暑い夏でも咲くような花とか、そういう色で展示していたのですが、ラン展を始めるようになってから、香りも形も色もこの部屋で展示しています。

最後にショースペースというのは、花文化をやるところで、春はここで人形浄瑠璃をやったりしています。これはローズガーデン、これはヨーロッパの花文化を伝えるため、ジョセフィーヌのことをテーマにした子どもミュージカルをやったりしています。これはドイツのときで、オペラをやっています。これはクリスマスで、このようなことをやりながら、ラン展もあります。ラン展のときは、この中でランをテーマにしながら晩餐会やお食事をしたりする会を開いています。先ほどの貝原さんにはいつも来ていただいていたのです。

もう一つの軸は、共生軸、花と緑のある暮らしを伝えるところです。ここの中では、淡路は瓦、それから土壁が特産ですが、その理由は、淡路島には断層がたくさんありますよね、その断層によって土の色がいろいろあるわけです。左官屋さんたちも土の色を読んでいて、優秀な左官さんが多いです。瓦の土もそうです。これは壁面緑化をしているところです。こういうことを部屋の中で、古いものを持ってきて、こういう地域独特のことをやりましょうという空

間のつくり方を植物館の中で提案していません。

これが2004年ぐらいにラスベガスでうちのスタッフがラスベガスに行って、瓦屋さんと一緒にこういうパンフレットをつくりました。このような感じで、瓦を使っていきながらやっています。

日本にも伝統園芸というものがあります。江戸時代の文化ですが、各藩によって飾り方があります。これは細川藩、熊本の飾り方。こっち側は伊勢の飾り方。それぞれ花の形も違う。これを見るとわかることが、それぞれの文化のところで花を飾る際に漆器があることとか陶器を使うとか、飾ることがエクステリアですね。そういうものも文化としてというより、産業に影響を与えてきたということです。これは私の大好きな篠山のお苗菊。篠山は小学校の子が、今これを継承しています。すばらしいです。これを海外にデビューさせるのが私の夢なんです。江戸菊ですが、くるっとまわっているうちに時間ごとに花の形が変わります。

これは瓦を使ったレリーフ、私がつくってみました。

これは兵庫県の五国を土壁でつくろうという壁面緑化です。これは久住さんという左官屋さんにつくってもらった土壁緑化です。こういうふうにアートとして空中に設置しました。ともかく都市においては驚いてもらわなければ、何も感動してもらえない。ただの壁面緑化をやってもどうにもなりません。最近は楽しい壁面緑化が増えていっているのですけれども、今までの壁面緑化といったら、ただアイビーであるとかそんなものです。私のところの場合、アートを取り入れているのは、一つはコス

ト、お金がない。緑はすべて効能ばかり言ってきましたよね。そうではなくて、緑を「きれいな」とか「もっと増やそう」ということを感じてもらわなければ全体量が増えない。感動させるとか変化を与えるということで、何かアートと組ませたらどうかと考えています。

このところに壁面緑化やっているのですが、これは繊維業の廃材を使った石です。小松精練さんからいただいて、こういう緑化に使うのを実験したりします。これも中に使っているスポンジは、ブリジストンの実験をやるのに私たちがお手伝いしてやっています。このように、アートと組み合わせさせてやっています。

植物館の中には、いろいろなサポーターがいる中には、子どもたちもいます。子どもたちは自然の大切さを伝えるミュージカルを年に2回、ゴールデンウィークとクリスマスに、今年は夏もやるようになりますが、こういうふうにやっています。

これは京都市立芸大の音楽科の子たちですが、先生がいつもオペラに来てくれています。先生も年を取ってきまして、結構ギャラの高い人になっていく反面、生徒さんでも優秀な子は優秀ですから、学生の子たちが来て、私が企画しました。最近はそのやるオペラは、私が与えたテーマで彼らが企画してやってくれているということで、植物だけではなくインキュベーターになっているのではないかなと思います。

国際交流としては、ニューヨークのブルックリン植物園が2004年か2005年に実施したのですが、3回ぐらい2年ごとに来てくれていたのです。真ん中にいらっしゃるエリザベスさんという名誉園長さんが、

これだけの人を全部連れてくるのです。ブルックリン植物園はサポーターがおり、ニューヨークが破綻したときに、企業とくっついてお金をつくっていくということが出来ませんが、ここは本当にボランティアとか、市のいろんな仕事を受けながら支えていて、先生たちもこのおばあちゃん園長さんもほかの職員さんも週に3日は働いて、2日はボランティアで働いています。ここに来られている人たちはカナダの人とかいろんな人たちがいて、その人たちは資金を植物園に出していつているという、すばらしいことですし、これから日本が学ばなきゃいけないシステムだと思います。

これは I G C A といって、世界中のガーデンセンターの社長さんたちが日本へ植物館を見に来ているときに、うちのスタッフたちが瓦でつくる庭を教えているところです。このように、結構海外の人たちがやってきてくれるようになってきています。

こういう活動をしているのですが、世界にも発信するようになったよ、という話もします。夢舞台は私が関わり始めて20年も経っています。しかし、私の理想とするものはまだできていません。やっと何かちょっと動いたかなという感じはするのですが、下がまた何か違うなというところがあります。

オープンしてから継続的に15年間やってきた中で一番の問題点は、ミッションが共有化されているかという話ですよ。私は初めからつくっているのだからわかるのですが、自然を再生して里山を再生するというのに、お金がなくなってくると、人が来てもらうことばかりを考え始めてしまいます。そうすると、たくさんお金を持ってい

る花博協会がどんどん花緑の花壇ばかりつくってしまいます。それだけならまだいいのですが、違うことで人を集めようとすると、やればやるほどコンセプトがずれていって、何をしているのかわからなくなってしまいます。

先程、460億円と聞いたときにびっくりしました。私の植物館には、60億円もかかってないですよ。私のつくる今までの植物館だったら、6,700平方メートルであれば67億円かからないといけないんですよ。でも、あれはたぶん60億円かかってないと思います。50何億円です。それ以外は全部建築のほうにいったということですが、そういう管理をしている。今日は企業庁の方は来ていませんかね(笑)。同じ場所でやっている人間同士のミッションが、どんどん何のためにやっているのかということがずれてくる、ということです。

それともう一つ問題のところは、もともとは景観園芸学校と植物館をやっていたけれども、私は今、景観園芸学校では後期に集中講義を持たせていただいていますけれども、もともと研修をしようじゃないかと考えていたところに、必ずしも学校だけの問題ではなくて、私の問題でもあったと思います。植物館と一緒にできていなかったということです。

それから、いいことなのか悪いことなのかわかりませんが、今、本当に経済状態が悪くて、私は現在のところ、あとでお話ししますが、夢舞台の全体をみるようになったんですね。今、全体をみて県から出されているお金というのは、植物館だけを対象としていた時の半分ぐらいの額で公園全体をみなさいとされているので、お金

儲けするしかないんですね。地震なんか起こるとどうもできないという状況になっています。だから、これのほうが本当はおもしろい。これからお金がないのをどうお金をつくっていくか、どうやって協力してもらえようにするかというのが、ここの運営をしている中で、非常に思うことが、日本の公園とか植物館がやらなきゃいけない、海外ではやられているようなお金儲けをどうするかということです。

牧野植物園の小山鐵夫先生がハワイに戻られるというので、この間講演会がありました。「ニューヨークの植物園では管理運営費の7%程度しかニューヨーク市からもらっていない。アメリカはそれが普通です」という話がありました。入館料だけで補えるなんてなかなかできませんが、植物園はもともと経営を考える、儲けることを考えるということになっているのです。私も「自分は頑張っているな」と思いましたけど、反省させられました。

そういう課題をすごく抱えていて、本当は2012年から全体をみていいよという話になったのです。でも、いいよと言われても、それは夢舞台が言っているだけです。夢舞台のコンペのときに私が提案したのですが、「コンペのとき言ったでしょ」と言っても、みんな何か全然覚えてない。本当にこの人たち、内容で選んでいるのだろうかと思うぐらい、悲しい思いになるのです。

ともかく、全体をやることになりました。全体をやるきっかけは、先ほどの2010年の「花みどりフェア」でした。「花みどりフェア」も実は「もう、危ないな」と思っていました。いくらやっても姿の見えない植物館で入館者数は20何万人、最高でいって

23万人ぐらいまで上げたのですが、これ以上は絶対上げることができません。今後は必ず兵庫県は貧乏になる。それを考えると、5年に1度どころか、2年に1度ぐらいイベントやらないとどうもならないと思っていました。いろいろなことをしながら、橘さんのご協力というかお力もあって、2005年にイベントができたわけです。

そのときに、私はランドスケープの人間なのにもかかわらず、安藤さんの領域には一歩たりとも出てはいけないと言われました。あなたは植物館のプロデューサーだけど、出てはいけないということがあって、ちょっと出たら、「先生、ここは出ています」などと言われて、「何でこんな目に会わなきゃいけないの」という思いはずっとあったのですが、2010年にローズガーデンをつくることになりました。ローズガーデンが切り口になって、安藤事務所は、あれは一時的なものだと思っていらっしゃいましたが、これが切り口になって外をやれるようになりました。

この2010年も、安藤事務所のほうに、「壁にどんどん緑化していいですか」とか言ったら、「どうぞどうぞ」と言われたので、壁に、緑化だけじゃないですね、絵も貼ったり、土壁をつくったりしました。その後、何か言うてきてはりますけれども、安藤さん自身からは、「新しいことをどんどんやってくれてありがとう」という手紙をもらっているのです。何かあったら「このご紋が見えないか」とやってやろうと思うんですけど、新しい試みを始めていっています。

これが全体です。今までは植物館の中に、本当に箱入り娘のように入れられて、そこから出たくて出たくてしょうがなくやって

いましたが、全体を一応みてみました。お金がなくなったら任せてくれはるという感じですね。今までプロムナードガーデンというのは、花壇をつくったり、景観園芸学校の人たちも参加したコンペをしたり、もともと里山の再生というのにどんどん変化しているので、私は里山の再生ということで、里山ガーデンというのをつくり始めています。それから、人間と植物のかかわっている、染めの植物をやるとか、果樹園をやるとかといったことも考えています。

もう一つは、百段苑のところですよ。その計画をされた方に怒られるかもわかりませんが、半分以上は野菜にしております。野菜をやりながら、野菜の文化ということで、この頃、ナスとか毎日新しいメニューを考えて料理をしています。こんな中でもそういう教室もやっております。花文化のゾーンではローズガーデン。百段苑は今まで菊で花文化ということ言っていました。菊ばかりやると忌地になりますので、今は野菜とか、それからお花もしています。

一番はこれです。安藤さんの空間ですが、廃墟になりつつあるところをグリーンアートミュージアムにしました。実はオープンしたときに、咲くやこの花館の方が「いずれこんなに人来えへんようになるで」と言われていたのです。「全部、あんたが使える場所になんて」と言われました。その通り、だんだんとお店が、夢舞台が経営しなきゃいけないようになってきて、「このままどうするの」という事態になってきました。夢舞台の社長が頑張っていることはやっではいるのですが、今回、ここをグリーンアートミュージアムにしようということになりました。やるかぎりはお金取らなけれ

ばいけないので、特別展をやるときは、私がお金を取る場所にして、ここにアーティストたちが集まって来てくれて、いろんなことを試みてくれる場所になっていったらいいなと思っています。

他の公園や植物館を見ても、ホテルにコンベンションセンターがあるようなところってないですよ。世界の中でも類がないと思います。それを何も生かしてないということはちょっとおかしいと思います。もともと持っている施設は、近藤先生が言われたように港まで持っている。なぜあの港が使われてないのか、私も理解できません。

それから、山と海という素晴らしい環境がある。私も百段苑には行かしてもらえない感じで、行ってなかったのですが、グリーンアートミュージアムや百段苑を始めてからは、「夢舞台ってすごいええとこやな」というのを実感しました。実は淡路島も、「淡路島がええとこ」って気づいたのは、2004年ぐらいに高松でジャパンフラワーフェスティバルの仕事をした際、毎日高速道路で四国へ行ったときでした。「淡路島って緑豊かやねん」と感じました。入口が自然破壊されているので、丹波にいた人間からしたら、淡路島は自然豊かとはちっとも思えなかったのです、恥ずかしいこと。でもだんだん気づいてきました。

それで、今、先生も言われていたTRIADというのをやっております。植物館にきたロングウッドガーデンの人から「技術交流しようよ」と言われたことから始まり、フィデリティという証券会社の会長さんが全面お金出していただき、全体を合わせると年間4,000万円ぐらいになると思います。はじめはもうちょっと少なかったけど、「こ

のお金が必要です、あのお金が必要です」
と言っている間に、たぶんそれぐらいのお金をいただいて、嬉しいことに園芸学校と一緒にやるようになりました。このことによって、イギリス、アメリカとの交流が始まったということです。

TRIADがあったということと、お客さんの的には、安藤さんが世界の安藤だということもあります。植物館にも、インバウンドとして結構な数の海外の方に来ていただいています。年間1割ぐらいしかいないですけれども、インバウンドが来ていただいているということです。

今後の方向としては、花博の意味と今後の淡路島の展開ということですね。15年間もやってきましたが、一番の問題はお金がなくなってきて、それからいろいろなことを試みて、企業ともコラボレーションするようになりましたが、それを商品化していったりするのには企業のほうです。しかし、植物館の方で「そのお金ちょうだい」とか、そんなふうには言うことはできませんよね。

それから、淡路島は瀬戸内海に入るはじめのところなのに、淡路島で瀬戸内海ってちっとも感じてないのではないかと思います。私は、試みとして4年ぐらい前から、実際に福良の町へ行って、福良のまちづくりなどをするようになりました。なぜかといえば、長い間淡路島にいますが、今日いらっしやっている晴海ヶ丘は違いますが、淡路のほかのところはなかなかセンスがアップしない。これはいけないことだと。北から南へ行くのは車でも1時間近くかかるのです。それでも、「ちょっとかわってもらわないと困るな」ということで、福良とか、最近洲本にも行ってまちづくりを始めまし

た。

こういうことをやろうと思う時に、私たちは、プロデューサーですが指定管理者にさせられる。TRIADもやったけど、私たちは指定管理者として、来年、再来年になって切られたら、私がいなかったらTRIAD続くのかどうかなんて、ちょっとわかりません。5年続けようと言っていますが、どうなるかわからないです。こういう組織のあり方というところに、もうちょっとちゃんとしないといけないなということと、お金のこともそうです。これからはどこの公園も一緒だと思います。お金のことを考えた組織のあり方というのも考えなきゃいけない。

あとの話に出てこないところで私が感じるものは、大阪の花博では、大阪市が地域を再生したいと言って実施され、確実にライフスタイルの提案、産業も変えていきました。そして緑が公のものから民になるということも、がらっと変わったことです。

淡路の花博は、私は公園島構想があってやっているものだと思います。公園島構想があるということと、施設を残したということで、15年経って何もできてないかもしれないですが、場所があることによって、まだ継続していけるチャンスはあると思います。

私は浜名湖花博の仕事もさせていただいて、国際交流館をプロデュースさせていただきました。浜名湖花博は花博としては結構内容はよかったです。花博が始まる前にも住民参加でボランティア組織ができていたのです。しかし、実を言いますと、「別に住民参加せんでもええ」と言われたのに、「住民参加をしましょう」と言ったコンサ

ルは、私だけだったのです。もう住民参加の用意ができていたのに、あの時代、コンサルはみんな住民参加を嫌がっていました。兵庫県では2000年のときには、この花博ではできてなかったですが、ある程度のボランティア組織づくりというのは震災のことでできていたのですけど、浜松は結構ちゃんとしていたのです。にもかかわらず、なぜか集まっていたコンサルたちは住民参加を嫌がって、結局住民参加をやったのは私のところだけで、それで私は松崎町へ行きました。あそこはいいものをいっぱい持っていて、伝統文化もあるんですが、結局しっかりしたものを残してない。そういうところがちょっと違うのかな。あとに残すものを持つか持たないか。

よその花博の話ですが、大阪の花博はすばらしいものを残してもいるのですが、やった人たちが継続して何かをしているのかというところに疑問があるのです。大きなお金を持っている、海外の人たちにお金も渡している、だけど、何を、あそこがかわったのか。はじめにちゃんとした大きな組織でつくられていっているけど、それ以上のものに展開していっているのかなというところはすごく疑問だなと思います。これはあとでの話し合いとして、これくらいで終わらせていただきます。ありがとうございます。(拍手)

(司会)

辻本さん、どうもありがとうございました。

講演④

「淡路花博と淡路夢舞台、淡路景観園芸学校等地域プロジェクト等について」

石原 憲一郎 氏（兵庫県参与、公益財団法人兵庫県園芸・公園協会
花と緑のまちづくりセンター長）

（司会）

最後に、淡路花博と淡路夢舞台、淡路景観園芸学校等地域プロジェクト等について、現在、兵庫県の参与であり、兵庫県園芸・公園協会の花と緑のまちづくりセンター長でいらっしゃいます石原さんにご講演をお願いしたいと思います。

（石原）

皆さん、こんにちは。辻本さんの熱意あふれるお話で、私の持ち時間があと10分しかないと思って内心、ひやひやしていましたが・・・(笑)。

淡路花博とその会場の斜面地緑化、そして、花博と密接関連で開設された淡路景観園芸学校についてお話したいと思います。私は平成5年3月末までは建設省（現国土交通省）都市局都市計画課に在職していましたが、在職中は、先ほど橘さんからお名前が出ました貝原前知事と中央官庁兵庫県人会のつながりで何回かお話する機会があり、その際、国営公園を誘致したい、さらに、その場所で国際園芸博覧会（花博）を開催したいという意向をお聞きしていました。

実は、昭和52年から53年頃、大阪にある建設省近畿地方建設局の建設専門官をしていましたが、国が計画していた管内3番目の国営公園の候補地は現在の場所ではなく、県立淡路島公園のあたりでした。しか

しながら、兵庫県知事からは、国営公園の候補地は、灘山の土砂採取跡地と明石海峡大橋を挟んだ神戸市北区の藍那に広がる里山里地、いわゆる明石海峡大橋を挟んだ二眼レフ構想にしたいという強い要望を受けて、その後、その方向で実現化の模索が始まりました。

そういう背景の中で、この国営公園の設置が決まったのです。国営公園の件は、後ほど橘さんから話題提供があると思いますので、私のほうからは広大な土砂採取地の自然再生の内容を中心にします。その前に、なぜ淡路島で淡路花博が行われたか、その糸口を探るため、少し歴史的に淡路島の花と緑の地域づくりを俯瞰してみたいと思います。

まず淡路島というのは、改めて言うまでもなく、「島」であるという事実、そして、国生み伝説のある神話の島、神々の島とか、他の島にはない非常に特徴のある島なので



石原氏の講演の様子

すね。

よく淡路島は島だから遠いとアクセスの不便さを指摘されるのですが、私は、淡路島を紹介するとき、必ず、淡路島は4空港から近い利便性の高い島であると伝えます。4空港というと、3空港は、すぐに分っても、もう一つはどこだと首を傾げられる方がおられるのですね。関空と伊丹と神戸空港、それ以外はどこだ。実は徳島空港からものすごく近いのですよ。4空港からのアクセスビリティが高い地域というのは、日本全国探しても、そんな恵まれた立地条件はないのです。残念ながらそのことを淡路島は生かし切っていないですね。さらに、気候が温暖でとにかく晴天日が多い。そして、歴史的に御食国の島と言われて、恵まれた農林水産業の産物があるわけです。つまり、国際博覧会を開催するうえでの好条件が揃っているということです。

これから少しですが、これまでの淡路島地域開発の歴史をスライドでたどってみたいと思います。ご覧のように残念ながら明治以降、人口が減り続けています。

1789年、江戸期には新田開発が積極的に行われ、淡路島の人口は約10万人でした。さらに明治時代になりますと、最盛期を迎え鐘紡とかダントーなど大企業による産業開発が活発化し、人口はピーク時には約23万人まで数えたことがあります。当時、鉄道も敷設されたようです。この時代から徐々に人口が減少していくわけで、1953年は、離島振興法に基づく離島として位置づけられていましたが、県としての地域開発計画により1961年には全島産業公園化構想。1962年には淡路島植物園化構想。1978年には全島産業文化公園化構想と続いてい

くわけです。これらの構想は、すべて貝原前知事の前の坂井知事時代に策定されたものです。これらの構想はご覧になっておわかりのとおり、すべて公園(植物園)という名称が付されています。兵庫県の県政に一貫して流れる全県全土公園化構想、淡路国際公園都市、三田国際公園都市などのプロジェクトのアイデンティティが、これで読み取れると思います。

私の想像で確認は取れていませんが、1962年に打ち出された淡路島植物園化構想のなかに、亜熱帯植物の植栽によりリゾート空間を目指すような記述が出てきますので、その当時植えられたヤシ類のワシントンニアが、淡路島の国道沿いに見られるのも、その名残かなと思います。このように淡路島の地域開発計画の歴史をたどることは、なぜ淡路島で花博が開催されたかを考える上で非常に重要かと思っております。

1985年に、総合保養基地法(いわゆるリゾート法)が国により制定され、全国各地が法指定を受けようと計画立案し国に提案した中で、確か淡路島は「世界に開かれた公園島」として4番目に承認された島です。もちろん、淡路島のリゾート構想は、国の方針もあり民間主導による開発でした。しかし、当時の経済情勢がそれを許さず、結果として1992年に淡路公園島構想として大幅見直しを行い、民間主導から行政主導に転換した開発計画でした。ファームパーク(現在、民営のイングランドの丘)、おのころパーク(現在、民営の淡路ワールドパークONOKORO)、淡路夢舞台などは、その代表的施設です。民間主導から公共主導に構想が変化したことによるものと言えと思っています。

兵庫県は、総合計画の策定や具体的施策を推進する上で、後ほどパネルディスカッションでコーディネーターしていただきますが、中瀬先生というランドスケープの専門家が、早くから県行政内部にいたことも非常に大きく、行政に対しランドスケープの考え方が浸透していました。1992年に、兵庫県がランドスケーププランニングという計画を発表していますが、「ランドスケープ」というキーワードを使った行政計画は他県に例を見ないものと評価しています。もちろん、淡路島もランドスケーププランニングがあります。そして、1993年の淡路島国際公園都市構想に発展していくわけですが、ここから先は少し橘さんの話題提供とダブりますので省略します。1999年に県立の淡路景観園芸学校が開設します。淡路景観園芸学校は、実は当初の淡路花博開催年次である1998年に合わせて開校する予定だったのですが、阪神・淡路大震災の関係で開設を1年延期し、結果として、2000年の淡路花博より1年前に開校しました。つまり、淡路花博と淡路景観園芸学校は密接な関係があり、淡路花博の理念継承のため専門家養成の高等教育研究機関を博覧会の成果の一つとして位置付けようとしたのです。世界で行われている国際園芸博覧会で、その成果の一つとして後世の人材育成のため教育研究機関を開設したという例を私は知りません。

さて、スライドに戻り、関連する施策を概観しますと、線引き対象都市以外の開発行為を適正に誘導するための緑豊かな地域の形成に関する条例(略称 緑条例)、これは、平成2年に大鳴門橋や明石海峡大橋等の開通で多くの開発行為が想定される淡路島に

限って適切な土地利用の推進と自然の保全を目的として制定された条例ですが、その後全県適用に拡大した条例です。

このスライドが、全県版のランドスケーププランニングです。きょうはご紹介していませんが、全県版のビオトーププランもあります。これも中瀬先生が主導的なお立場でご指導いただき策定されたプランで、そういう意味では、兵庫県は、いわゆる広域的なプランから地域的なプランまでランドスケープの視点が入っているということですね。

このような取り組みが、淡路花博に結び付いているということ認識することが重要と考えています。

さて、スライドに戻り「あわじ花回廊構想」というのを策定しました。基本方針は、6つの連係プレーによる緑花ということで、①家庭、地域社会からの緑花②島全体からの緑花③行政と住民の知恵と実践の連係プレー④量的展開の目標は風景レベル⑤質的展開の目標は感動レベル⑥あわせて淡路らしさの創出。このフレーズは私の好きなフレーズです。さらに、花や緑が美しく見えるための背景づくり、つまりいくら花壇が美しくても、その周りにある看板など屋外広告物、散乱するゴミが存在すれば地域全体としては美しいとは言えないので、花が美しく見えるような背景づくりが重要であるとか、緑花活動があくまでも楽しみながらの自発的参加で持続性が大事であるとか。こういうふうな考え方を島民の皆さんと課題や方向性を共有し、「あわじ花回廊構想・10年計画」を策定しました。

また、淡路花博の開催に合わせて、花博会場だけでなく広く淡路島全島が博覧会場の

ように花と緑あふれる美しい島になるよう島民の暮らし方の指針ともいべき淡路公園島憲章ができました。この当時はこの憲章を行政機関の庁舎、街角の公共掲示板、交通ターミナル、ホテル棟の観光拠点さらに家庭にも「貼ってください」とお願いして、ポスターをつくってだいぶん配りました。憲章の文章は、子どももお年寄りも理解できるように、非常に平易です。例えば「花を愛し、花いっぱい美しい淡路島をつくりまします」。でも、この文章に込められた意味は、このスライドで赤字で書いているような意味が含まれているわけです。憲章を作成するに当たり作成委員会では、こういう意味付けまで議論されて、これを平易な形で憲章という形でまとめたものです。

そして、淡路花博は、皆様ご承知の通り大成功のうちに終了したのです。その後、淡路島の長期ビジョンで、環境立島「公園島淡路」構想を打ち出し、環境を前面に打ち出し「自然産業特区」を設けたり、観光振興のため「くにうみツーリズム特区」を設けたり、さらに、2011年には、あわじ環境未来島構想を掲げ、「地域活性化総合特区」を設けたり、様々な施策を立てて現在に至っています。しかし、残念ながら、人口は、年々減り続けております。ここに淡路島の地域政策を考える場合、私は最大のポイントがあると思っています。これだけの歴史を歩み、これだけの特区など施策を打ち出しても、なおかつ人口流出が止まらないというあたりに、大きな課題と改善点があると考えています。今後、淡路花博20周年記念事業「花みどりフェア」を、平成32年に開催するとしたら、花や緑と健康福祉、医療、環境、観光、景観、農業など定住化促

進につながる連携プランを社会実験として行うなど地域活性化プランに結びつくようなダイナミックなイベントをやっていかないと、この流れは止まらないというふうに思います。

さて、斜面地緑化の話をししましょう。これも先ほど橘さんのスライドで出てきましたが、灘山を削った約1億立方メートル。1963年ぐらいから土砂採取を始めてますから、阪神臨海工業地帯とか大阪ベイエリア工業地帯の埋め立て用に使用しています。もちろん、一部、関西空港埋め立て用土砂としても使われましたが、主は、工業地帯の埋め立て用として用いられたのです。

このスライドが、淡路島国際公園都市という概念です。私はこの当時、なぜ都市と呼ぶのか、よく理解できなかつたです。そういう十分な議論もなしにそのまま進んできました。

さて、最大の課題は広大な土砂採取跡地の自然再生です。なにしろ、花博の会場となる場所です。平成6年、知事から淡路花博までの間に、森のような背景を創りだすことを命じられ、斜面地緑化の第一人者である京都大学農学部の吉田博宣教授にアドバイザーをお願いし、施工を専門とする造園や法面緑化の民間企業の実践者を集め、急こう配でアルカリ性強く、軟岩主体の地形地質を持つ長大斜面地（法長さ160M、面積約12ha）の緑化を早期に実現するための「緑化アクションプログラム」を短期間のうちにまとめて事業実施主体の兵庫県企業庁にバトンタッチしました。

緑化コンセプト、緑化目標、工法の経済性や施工性、維持管理の容易性などが緑化アクションプランの内容ですが、最終的には

ウバメガシ・ヤマモモ群落という地域の潜在植生を目指すということとしつつ、一方、淡路花博までの早期緑化を求められていましたので、落葉広葉樹も混ぜて早期に緑化しつつ最終的には安定した林相を目指していこうというプランを立てました。

これはお手元の資料の17ページに詳しく記載されていますので、また後ほどお読みいただきたいと思います。

また、施工方法ですが、現場の地形、地質に応じて人工土壌吹き付け工法と軽量法枠工法の2つの工法を採用し、しかも軽量法枠工法では㎡当たり4本の苗木という高密度植栽を採用しました。また、現場条件から、夏場の水の確保が極めて重要ということで、現場近くに、雨水を貯留する池を作り、そこから導水し、法面上にドリップ灌水用のパイプを網状に敷設し、いわゆる夏枯れを防止するというやり方をしました。もちろん植物が安定的に生育を始めた時、ドリップ灌水は中止し植物の自立を助長しました。極めて高コストの施工方法ですが、とても植物が生育できないような敷地で緑化し、さらに、淡路花博までに森のような背景を創るという前提条件下では、やむを得ない工法であると知事の前で力説し、「石原さん、こんな金かけんでも、クズを生やしときゃいいじゃない」という無責任な意見を言う県幹部もいましたが、最終的には、知事の英断でこういうことができました。

淡路花博から、15年経過し、今では、非常に大きな緑の塊となって周辺地域の自然林と見分けがつかないほど成長しています。しかし、緑化を始めて僅か20年弱。植物遷移状況、根茎の発育状態など、定期的なモニタリングはまだまだ必要です。最近、管

理者が定期的に行っているのか知りませんが、モニタリングは是非とも継続していただきたいです。

次に、淡路景観園芸学校です。会場にパンフレット等資料がありますし、当該学校の先生方もご出席ですので、ごく簡単に触れます。

兵庫県は、日本の縮図と言われるほど多様で地域固有の歴史と自然・文化を有する県土を有しています。美しい県土を守り、育て、そして創り後世に継承していくため、先ほど、説明しましたが、全国でも有数のランドスケープ系施策を実践していますのでやっていますが、問題はその人材育成をどうするのかという問題意識がありました。さらに、学校構想策定中に起こった阪神・淡路大震災において、花や緑が「生きる」「生命力」という面において被災者に対して大きな役割を果たしたということが園芸療法の専門家育成を確固たるものにししました。園芸療法、これもまだ緒に就いたばかりですけど、超高齢化社会の現在において最も重要である園芸療法専門家を育成する、全国の公的機関で唯一、淡路景観園芸学校だけが取り組んでいる課程です。

当時、造園学会においても職能教育の在り方について学会全体で取り組んでいました。特に、植物教育のあり方、デザイン教育のあり方について様々な議論がなされている時期でもありましたので、淡路景観園芸学校の設立構想では、その教育内容や育てるべき人材像など大議論がありました。当初は、できるだけ類似教育機関との差別化を図るため、学校教育に基づかない学校として開校いたしました。しかし、国が専門職大学院制度を創設し、淡路景観園芸学校

の教育システムがそのまま移行できるのではと考えて平成20年に従来の専門課程を移行させたということです。

今、専門職大学院の緑環境景観マネジメント研究科と、園芸療法課程、それと県民を対象に花と緑のまちづくり活動家を養成する生涯学習課程で構成されていると思いますが、詳しくは資料等をご覧ください。一つだけ言いたいのは、生涯学習課程というのは、実は学校開設の1年前から試行的に開講し、受講者の評価を聞きながら始めています。

この生涯学習課程の教育成果は、美しい県土づくりを進めるうえで非常に大きな意味を持っています。私が現在勤務している（公財）兵庫県園芸・公園協会花と緑のまちづくりセンターは、生涯学習課程を修了した述べ約6000人以上の皆さんとともに、県下各地で花と緑のまちづくり活動に通り組んでいます。

現在、兵庫県は、全国で最も「花と緑のまちづくり活動」が活発であると評価されている秘密の一つが、淡路景観園芸学校生涯学習課程の修了生の皆さんであることは言うまでもありません。

以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。（拍手）

（司会）

石原さん、どうもありがとうございました。

(2) 対談 / 総括

講演のまとめ / 話題提供

中瀬 勲（兵庫県立大学名誉教授、
兵庫県立人自然の博物館館長）

(司会)

後半のプログラム、パネルディスカッションに移らせていただきます。コーディネーターは、兵庫県立人と自然の博物館の館長、兵庫県立大学名誉教授でいらっしゃいます中瀬先生にお願いしております。

中瀬先生、進行をよろしくお願いいたします。

(中瀬)

よろしく申し上げます。前の方の席が空いていますね。先ほどから何度もお話に出ている貝原さんは、講演会の際に前から席を詰めないと怒られましたね。

今日のこのような会は初めてでして、以降一切シナリオがなくて、「好きにしてください」と言われておりますので、勝手に今シナリオ作りしました。5分ほどお話をさせてもらいます。私がお話している間に、会場の皆さんは質問を考えておいてください。先生方に対する質問でも、今日の問題点を最低5つぐらい出してくださいね。でないと、私のあとの進行が大変ですので。皆さん方からいただいた質問に対して、個別に答えるのではなくて、それを交えながら、この4人のパネラーの方々からご意見をいただき、各々のパネラーの皆さん方からもご提案いただきましたが、これまでのすばらしい博覧会からさらにそれ以上にすばらしい博覧会を目指して、どうしたらいいのだろうかというような話にまとめ

たらいいなと思っております。ぜひ、会場の皆さん方にもご協力いただいて、とても良い質問を出してください。その質問を考えていただいている間に、私からお話をさせていただきたいと思っております。

今日はかなり緊張しております。なぜかという、近藤先生がいらっしゃるからであります。近藤先生は学会の関西支部の発表会場に行くと、いつも不思議と私の後ろに座られるのです。そして、見えないようなスライドを出している学生がいると、「中瀬、あいつはだめだ」と、私の後ろで、いつも怒っておられたという方です。そのような先生がおられるので、ちょっとびびっております。そういうことで、近藤先生の20年後を、30年後かな、について、すごい勉強をさせていただきました。

今日、皆さん方が話されている半分以上の時間帯で、私は関西国際空港のりんくうタウンの計画をしていた時のことを思い出しております。当時はお金がたくさんあってよかったですね。半分は白い大理石、半分は黒い大理石で砂浜を、台湾と中国から半分ずつ買ったとか、好きなことをさせていただいたことを覚えております。



中瀬氏による話題提供

そのあと大阪府立大学の、私がお世話になっていた久保先生の研究室で、すごいことをしたのです。大阪万博の入場者予測をしたのです。そのときに対抗したのが有名な総研とか錚々たるシンクタンクでしたが、大阪府立大学の久保先生の研究室が一番正解の数字を出してしまったのです。それからいろいろな計画の話がきたのですね。「どうやって出したのですか」とお聞きしたら、「知らん」言われてね。そんな記憶が大阪万博でありました。

そのあと、私は大阪花博の際は呼んでもらえず、その頃は何をしていたかという、一応貢献していたんです。ミニ地下鉄がありましたが、あのミニ地下鉄のラインの色、何色にしようか、ということをしていました。赤とか黄とか全部あるので、あそこだけ2本線入れて、2本の色を組み合わせでいこう、といったことをやっていたことを覚えております。

その当時に淡路で花博をやるというので、またこのときも久保先生に呼ばれて、「中瀬君、本四公団に文句つけるんだ」とおっしゃって、何をおっしゃられたかと言いますと、本四公団の橋を渡ったところ、ちょっと掘り込み型になっていると思いますが、右側が全然緑化回復していない場所に「デッキを張るように、君、言うんだ」と。サービスエリアまでデッキをつける構想を提案するように言われ、本四公団に言いに行き、えらいばかにされたことを覚えています。私の学生時代、大阪府立大学時代は、そんな先生が言われるとおりに言いに行って、だいぶ怒られたりしたことを覚えております。

本格的に兵庫県の夢舞台との関係で何かをしたのは、もう辞められましたが、兵庫県に

辻井博という企画参事がいらっしやっただけです。私の大学の部屋へ来て、「中瀬さん、淡路に来て」と言われたのです。「はい、行きましょう」と行ったら、あの土取り跡地に連れて行かれて、「これを何とかせんと知事に怒られます」と言われたのです。「何でもいいから言うて」と。そんな偉い県の人がいらっしゃるんだなと思っていたのが、私の県とのつき合いです。その際は何も提案していません。

ちなみに、淡路島のもっと南のほう、洲本に太平洋セメントの土取場があるんですが、そこですごいものが出てきたんです。翼竜の化石、空を飛んでいた竜です。それのあごの化石が見つかりました。今、人と自然の博物館にあります。

お亡くなりになられましたが、高橋理喜男先生が大阪花博の際にすごい発言をされましたね。「入場者数、そんな議論しなくていい。そんなたくさんの、何十万、何百万いらん。少なくともよい質の博覧会を」とおっしゃったのを、助手時代のこととして覚えています。

もう一つ、今日、景観園芸学校の話とか植物園の温室の話が出てきたのですが、これも私の働いております博物館の前の館長が岩槻邦男さんという方で、この方がこの景観園芸学校にも植物園の温室にもすごく関与されていたのです。景観園芸学校の最初の構想委員会に、石原さんも辻本さんも私もいたんですよ。こんな3人、4人が集まって、絶対構想がまとまることはないですね。集まったら、かんかんがくがくの議論をやっていました。

石原さんが呼んでこられたのでしょうか。岩槻邦男さんといえば丹波の柏原出身のすごい植物学者を呼んでこられて、その先生がとても上手に景観園芸学校の構想まとめてくれたのです。淡路花博のときに、植物園の温室

に雲南省の植物をもってこよと言ったら、中国が止まってしまったんです。岩槻さんが頑張られて、中国の研究所の人に言ったら、その植物が来たということがありました。岩槻さんは、淡路花博が終わった後、人と自然の博物館の館長にまた来られたのです。そんなにもう滅多に来られないと思っていましたが、私の上司として来られました。結構いい人で、兵庫県のことが大好きな方です。

そのあと植物園の温室については、辻本さんが先程かっこよくおっしゃっていましたが、あの基本構想委員会の委員長は私がやっていたのですよ。それを、「こんなもんあかん」と言って、それを全部書きかえたのが辻本さんなのです。私はえらい目に遭いました。「中瀬さんの構想委員長、あんまり信用できませんね、貝原さん」とか言われたこともありました。辻本さんと一緒にやると、ときどきえらい目に遭わせられます。

今日、貝原前知事の話が出ておりましたが、この方はすごいですね。景観園芸学校をつくる時も、「ハーバード、パークレー以上のものをつくれ、だから世界一やれ」とおっしゃられていました。世界二と言うと怒られるのです。それは博物館もそうでした。「こんな前例があります」なんて言うと言われられました。前例とか横並びの話をしたら、とても怒る人だったという記憶があります。そういう意味では、今日の淡路花博の話なんかも、前例のない兵庫発のことをするようにということで、今日のような話になってきたのかなと思います。

話が長くなっておりますが、最後に一言。貝原さんがH A T神戸で研究所、「ひょうご震災記念21世紀研究機構」をつくられました。そのときに、私もメンバーとして入れてもら

ったのですが、そのとき言われたことに感動しました。東京にあるシンクタンクは銀行系とか政党系の色つきなので、平等な意味でのシンクタンクが日本にはない、と言われたのです。私はそういうどこの色もついていない、どこにも属していない、そういうシンクタンクをこの兵庫神戸の地からやりたいということと言われたので、「すごいなあ」と思い、当面それでお手伝いさせてもらったのです。そういう方がいらっしゃったので、この淡路花博でも結構リーダーシップをとってこられたのかな、という気がしていました。

勝手なことばかり言いました。質問してください。

質疑応答

(上甫木支部長)

ちょっと皮切りに質問したいと思うのですが。今日、お話をまとめて聞かせていただいて、非常によかったと思います。2000年のときに、コミュニケーションというキーワードの中で、皆さんに共通していたのが、そのときの人づくりとか、これからの人づくりをどうするかといったようなことだったかと思います。ただ、なかなか公園だけでは儲けられないから、地域活性化をどのようにしないといけないか、というようなことがあったかと思います。

一方で、近藤先生が言われたように、風景づくりみたいなものが基盤にあるということで、そのあたりを踏まえて、これからの話として、いろんな領域と連携しながら、そういうことを進めていかないといけないのではな

いかと。人づくりであるとか、地域活性化とか、公園の領域だけでなかなかできるものでもなさそうな気がします。そういうことについて少し、皆さんのご意見をお聞きしたいなと思います。

(中瀬)

ありがとうございます。

(美濃)

景観園芸学校の美濃です。人材養成について、うちの学校でやっているのですけれども、国営公園や夢舞台となかなか連携してできていないのです。連携のあり方や具体的な方向性みたいなことについて、アイデアありましたらお聞かせいただきたいと思いますと思っています。

(中瀬)

もう辻本さん、「得たり」という顔をしてらっしゃいますが、続いて質問の方お願いします。

(中橋)

鳥取から参りました中橋と申します。今日は貴重なお話、どうもありがとうございました。今回のシンポジウムは、実は造園学会とランドスケープコンサル協会の50周年記念事業の最後、3回目の催し物でございます。

話を聞いておりましたら、やはり大阪万博から大阪花博、そして淡路花博に流れが変化してきた中で、ランドスケープアーキテクトが果たした役割みたいなことを、多分、石原先生のほうからちょっとお話をお聞きしたいと思います。

そして、淡路花博において会場計画をランドスケープコンサルタント協会が大阪花博に続きまして、各事務所が全体的にチームを組んでやらせていただきました。そういったときの、初めてこういう会場計画をやらせてい

ただいたときのメリットとか、やっぱりどうも造園家では手に負えないこととか、そのような辛口の評価を橘先生からいただけたら幸いかと思います。どうぞよろしくお願ひします。

(中瀬)

ありがとうございます。他に、女性の方で質問はありませんか。

(糸谷)

糸谷と申します。女性ではありませんが。タイトルが花博開催に学ぶこととなっておりますので、今までの万博や鶴見の大阪花博というのは国主催で、それなりに意義が整理されてきたと思うのですが、A2でありB1といった新しいタイプのこの博覧会については、やはり地域との関係というか、兵庫県にとって、また淡路島にとって、どういう意味があったかということについては非常に総括されるべきことだと思います。そういったところで、少し問題提起もありましたが、これからの地域振興や造園花卉産業という意味合いなのか、もう少し広い意味で淡路にとってどういう意味を發揮させるべきか、ということについて少しご意見がいただければと思います。以上です。

(中瀬)

ありがとうございます。ほかにございませ



質疑応答の様子

んか。

(田中)

近藤先生が最後に、将来の課題の中で、ボランティアとかコミュニティの活躍ということが大事だとおっしゃって、そのあとで辻本さんが、ボランティアがあんまりうまいことやってないのではと、途中までお話しいただいたのですが、そのあたりの意義といますか、辻本さんから問題解決について、どういうふうにしたらいいかということについて、少しコメントいただきたいなと思っております。よろしくをお願いします。

(中瀬)

男性ばかりなので、女性の方、どなたかいらっしゃいませんか。

(大久保)

淡路景観園芸学校を卒業した大久保と申します。淡路花博についてですけれども、私も記憶にはないくらい、若い人にとっては遠い昔のことなのです。そのため、そういうすばらしい花博があったことをどのように継承していくのかというアイデアと、今後、そういった花博がある場合、学生ですとか若い世代がどうかかわっていけるのかというアイデアとヒントなどいただけたらなと思います。

また、学生の皆さんが今日はたくさんいらしていますので、景観園芸学校は本当にいい



参加者からの質問の様子

ところですので、ぜひパンフレットを持って帰って、入学検討してみてください。

(中瀬)

大久保さん、その質問をされるのであれば、若い世代のかかわり合いについて、自分ならどうしたいと、そういう提案をしてみてもどうですか。

(大久保)

今後、花博とかある場合ということですかね。私は景観園芸学校で、淡路のいろんな地域の方々と、ここにいらっしゃる林先生の授業などでかかわることがたくさんありまして、今でも地元の方の家に遊びに行ったり、農作業を手伝ったりすることが多いんです。そういったつながりを使って、住民参加という話もありましたけれども、一般の方々と一緒に地域を盛り上げるような参加ができればなと思います。

地元からの活動を、「ここにはこういういいものがありますよ」ということを、ブース等で体験学習してみるとか、そういったことができるのではないかな、と思います。

(中瀬)

さすがアメリカ行くだけあって、ちゃんとよう答えられて、ご苦労さまでした。

(参加者A)

花博について全然知らないという年代ではありませんので、過去のことについてずっと知っておりますけれども、私は旧の洲本市、五色町と合併する前の洲本市で生まれて洲本市で育った人間でございます。旧の洲本市といますのは、先ほど石原先生も、淡路にはたくさん県の施設があるとおっしゃっていただきましたけれども、洲本市内にはほんとに少ないのです。花博の度に、洲本市民としては何か指をくわえるような感じで見えておまして、

今回の「花みどりフェア」にしましても、洲本市は非常に規模の小さいイベントしか企画できないんですね。城下町のこの洲本市として、今後、花と一緒に盛り上げていけるようなまちづくりのヒントみたいなのをいただけたらと思います。

私たち旧の洲本市を憂いている年代の人間が集まったときにいつも出るのが、洲本は何やってもあかんなみみたいな愚痴しか出ないのですが、何か生き残っていける方法があるんじゃないかなと、その点をご指導いただけたらありがたいなと思います。よろしくお願ひします。

(中瀬)

ありがとうございます。最後女性のトリで林先生お願いします。

(林)

淡路のいろんなところで、学生さんたちと一緒にかかわらせていただいているんですが、先ほど石原さんが言われた、人口がずっと減少していくのが止められない。なぜかという、やはり雇用の問題が大きいと思うのです。ただ、90年の大阪花博のときに、ガーデニングを外に見せるということが、日本人にすごく大きなインパクトを与えて、ライフスタイルを変えると、そのインパクトはすごく多かったと思うし、もちろんそれは「ジャ

パンフローラ2000」でも大きなインパクトがあったと思うのです。だから、雇用ももちろんあるのですが、ライフスタイルとか、地域アイデンティティとか、観光とか、これらの課題の中で、これからいろんなフェアをやっていくときに、そういう宿題を必ずもつような、そういうテーマ性があればいいんじゃないかなと思います。いかがでしょうか。

(中瀬)

これくらいで、もうストーリーできましたか、各パネリストの皆さん。

あと、先日の花博の事務局長は、予算の配分から全部担当されておられましたが、何で淡路は小規模なのかと、ちょっと追求しようと思んですけど、いらっしやいませんね。

では、上甫木先生から順番に、これをまとめたら今日の結論になりそうな質問や示唆をいただきましたので、どなたからでも結構でございますので、パネリストの皆さん、よろしくおねがいします。

(石原)

質問が多すぎたので忘れてましたが(笑)、林先生が最後に、「テーマを決めて」と言われたのはまさにそのとおりだと思います。ベンチマークというか、マイルストーンというか、5年に一回やる限りは、その5年毎に、何をこ



参加者からの質問の様子



参加者からの質問の様子

のフェアで実現するのか、その目標設定が少し曖昧だったかなというのが気になりました。

私も中瀬先生も今回のフェアに構想段階から委員として入っていますので、あまり評論家的なことは言えませんが、やはり博覧会やフェアというのは、日常的な行政施策ではできないことを思い切ることができる、いわば、「社会実験」の場として最大の機会と思います。テーマを決めて、そのテーマを実証するため失敗してもいいから思い切ってチャレンジするという姿勢が、全般的に少ないと感じています。技術革新や制度設計を、一種の「特区」のように博覧会場を位置付けて、思い切った提案をしていくみたいだね。それが将来の我々のライフスタイルにどういった影響をもたらすかというモニタリングもしていく。造園も含めて、その踏み込み方が少ないなという感じがします。

それから、中橋先生がおっしゃったランドスケープアーキテクトの役割が重要ですね。実は、私、大阪国際花博協会に1年弱勤務しましたが、その間、初期の会場計画案づくりの調整を造園コンサルタント協会などやっていました。建設課長という立場ですが、協会内の職員が初期の頃少なかったものですから、会場計画案づくりとそれに伴う会場建設費総額のシミュレーション作業ばかりやっていました。また、鶴見緑地に鶴見大池という池があるのですが、その大改修の発注業務を行ったり、博覧会全体を担当する広告代理店の業者選定など、わずか1年弱の間に結構重要な業務をやりました。

その後の状況はよくわからないのですが、外部から見ると、大阪花博の場合、国際園芸博覧会ということもあり、全体の会場のレイアウトとか、ランドスケープという修景

計画はランドスケープアーキテクトがきっちりプランニングやマネジメントしているのですが、パビリオンなど建築物や工作物、さらに、その周辺区域も含めて重要な構成要素になるので、その担当である高名な建築家との調整が一番難しいのです。そういう博覧会の経験を通じて考えると、アメリカのようなランドスケープアーキテクトが、単体のパビリオンや工作物なども総括してしまうような能力、立場、権能が必要と考えます。そういう意味では造園系の教育の中でデザイン力（デザインというのは、小さな意味の、絵を描くというデザインじゃなくて、制度設計も含めたデザイン力）の能力向上をもっと重視して高めていくべきであると思いました。

また、淡路景観園芸学校を計画するとき、中瀬先生とも議論をしたのですが、最近の造園家は、植物のことをあまり知らない。ともかく造園が建築、土木と明らかに異なり、ある意味で優位性の部分だと思います。国民や他分野から見れば、植物のことや植物を含めたデザインのことはプロであると認識されています。植物教育とデザイン教育、この二つの教育が重要であると認識が一致しました。

もう一つ、今後のことに関係するかもわかりませんが、園芸学校を計画した時博覧会を担当した時もそうですが、造園と園芸というカテゴリーをどうとらえるかということに意識がいききましたね。造園と園芸は、大学でも同じ農学部でありながら別体系の教育カリキュラムで、授業も教員も交流が極めて少ないです。私たちは、淡路景観園芸学校において造園と園芸というのをインテグレートして、新しい分野である「景観園芸」というのを掲げたのですが、現実問題として、果たして現在インテグレートされているのかも疑

問です。他大学、例えば千葉大学なんかを見ても、私の独断と偏見かも知りませんが園芸学部のなかで造園と園芸の全く異なる教育プロセスのようで、教員間の教育研究における交流も少ないようです。しかし、生活者から見たら、造園も園芸も区別が分らない、一緒なのです。旧くて新しい問題ですが、今後の課題じゃないかなと思います。

それからご質問のあった洲本会場の件ですが、実は私、当初、2015花みどりフェアをやる時に、知事さんに「今回のフェア会場のメインは洲本がいいのではないかと思います」と要請したことがあります。「もう夢舞台地区のメイン会場はいいじゃないですか」と。辻本さんには悪いけど、いつも夢舞台地区で花みどりフェアのイベントをやるのではなく、地域活性化というフェアの目的もあるから、今回は、洲本を中心にとということです。知事さんは「おもしろいね」とは言われたのですが、最終的には、5年目と同じ夢舞台地区になってしまいました

今回、洲本会場をサブ会場として位置づけて、まち歩きとかいろいろ参加型のイベントを計画したのです。ある意味で意義深いと思っています。今後、今回実施したイベントをどう定着し、さらに拡大していくかということは、洲本市市民の課題だと思っています。淡路島内の自治体には兵庫県が企画を立てて、県のプロジェクトに乗るのではなく、それを地元のパワーに変えていくぐらいのしたたかさ、演出力というかな、企画力が欲しいんです。

先ほどのスライドで説明しましたが、淡路島は、常に県の主導でイベント実施が行われてきました。つまり、自治体の創意工夫ではなく県主導のイベントであるかぎり、与える

ことと与えられる関係が顕著になってしまって、究極、私はこれが人口減につながっていくことになるかと心配しています。やはり、淡路地域の自治体は、苦しくとも現在よりさらに、自立していく必要があると思います。歴史を振りかえり、今回のフェアを通して、そのような印象を持っています。

(中瀬)

少しだけよろしいですか。そうなのです、洲本についてですが、最初は夢舞台だけだったのです。事務局長らと議論して、洲本市と南あわじ市を参加市にしてもらいました。それでも足りないというので、各集落までやってもらおうということには事務局は大分反抗されましたが、無理やり押しつけました。これは最後のトリで言おうと思っていたんですけど、そういう意味ではけっこう回を重ねるごとに、会場が一極集中から島全体に広がっていったという進化を遂げたのではなからうかというような話が言えるかと思っています。

もう一つは、兵庫県は県庁が面倒を見すぎるんですよ。手取り足取り。どことは言いませんが、ほったらかしにしたところは、市町が自らものすごく頑張るところが出てくるじゃないですか。ところが兵庫県は面倒ばかり見るから、みんな平均レベルで、市町が共通テストの学生みたいですね。

(辻本)

言いたいことがいっぱいあるのですけど。

(中瀬)

質問に答えてほしいです。

(辻本)

あっ、質問に答えるのね。

花のことではないとか、いろんなものから考えないといけないとか言われますが、私たち日本人というのは、もともとどういう文化

をつくってきたかと考えると、季節ごとに花を愛でて、お酒を飲んで、きれいな着物を着て、ということは、自然との共生で生きてきたことで経済効果も起こしてきているのですね。

私は最近、大阪府立大学の経済学部で講義に行っているのです。そこで何を言っているのかというと、経済の人たちが、基本的にそのことをわかっていないということが問題なのです。だから、今日本が売れるのは、花文化というか、共生の文化についてなんですけど、私たちが失くしてしまいつつあるものを、海外の人たちが魅力だと思って、TRIADという形で、海外からお金出してまで研修制度をやろうと言いにきてくれていると思うんです。

淡路ですごくおもしろいのは、「今回は花やねんて」、「次は食べ物やねんて」、「今度は環境で」と、島民が言われることに、「それは全部一緒やで」ということなのですが、「一緒やで」ということを説明する人もいないんです。「花違います、食べ物です」と、事務局長もそんな感じでした(笑)。だから、私から見たら「日本の文化って何やのん」ということをみんながわかってないことが一番の問題だと思います。今の日本が問題なのは、それが「売れるもんや」ということがわかっていないということです。クールジャパンとか、インバウンドするなら、そこが一番大切なところですよ。

淡路島のことも、福島のまちづくりにも行っているのですが、福島のガーデンルネッサンスということの一つやりながら、一つ一つのまちがまちの人で輝いていく、1個ずつのまちに個性がある、それをつくっていくことが大切なんじゃないかなと思っています。

だから、まちづくりというところの中で花を飾りながら食もやる必要があります。

実は、「花のお助け隊ツーリズム」というものを起こそうと思っているのです。それは何かといたら、淡路の人に「花きれいにして」と言ったら、一人は上手な方ですが、あまり上手ではないのです。それなので、全国でお花をつくるのが上手な人にわざと来てもらって、一緒にやりながら批判されたりほめられたりして、その方々はその人たちのまちの特色の飾り方を見ていますが、淡路の特色の飾り方を見たら、おもしろいなと思われれます。そこで、福良なので楓そうめんが出てきて、楓さんがそうめんを開発したメニューがあるわけです。楓さんというのは、楓そうめんというとても美味しい淡路のおそうめんがあるんですが、その奥さんのことです。非常にユニークな人で、淡路の名物人間ですが、彼女がいろんなメニューをつくってくれるんです。今回も福良に来はった人の人数はすごかったと思いますよ。彼女自身が呼んだのもそうだし、私も3グループ呼んでいますから。そういう意味では、そういう特色のあるところとして「福良見にいこか」ということになったら、そんなにきれいではなくても、管理が悪いからあれですけど、そういうのがだんだんちょっとずつ増えていけば、それは一つのツーリズムを起こしてくると思います。

先程のお助け隊というのは、少し話を戻すと、淡路の花博の時に、私が春日井の緑化植物園のボランティアを育成していたのですが、造園屋さんではどうにもできないというので、私はボランティアさんを連れてきたのです。ボランティアさんが飾るのを手伝ったわけです。彼女たちにとっては、自分たちが生んだのをお手伝いしたという気持ちが今でもあっ

て、1年に2回は必ず来るし、奇跡の星の植物館のハンギングバスケットのコンテストには彼女たち絶対出るので。

浜松の花博の時にも、松崎町に行きました。松崎町のまちづくりをしたのですが、彼女たちは松崎町のことを今も思っていて…

(中瀬)

辻本さん、そろそろ質問に答えないと。

(辻本)

だから、ツーリズムですよ。花のお助け隊ツーリズムというような、ボランティアにもそういう形のものがある。その人だけのボランティアではなくてテーマを決めて、テーマを決めたことのボランティアがあれば、自分たちよりよくできる人に来てもらう、そんなツーリズムもあるということです。

まちづくりの話は、まちにそれぞれの個性をやれば、それぞれの生き生きしたのを見にツーリズムが起こってくる。だから、私は毎年秋にアルチザン・ツーリズムというのをやって、淡路全体にバスを走らせているのです。ほとんどの人は淡路全体を回ったことがないと思います。それで新しいところや若い子がやっているところに連れていくことによって、地域のことを知ってもらえる機会ができてくるということです。そういうことができるのではないかと思います。

でも、根本についていろんな人が間違えていると思うことは、花文化や共生の文化ということをちゃんととらえていないことです。それも、造園分野やそれに関係する方々もとらえられていないということが問題で、いくらでもあると思うのです。

(中瀬)

景観園芸学校との連携についてはどうですか。

(辻本)

景観園芸学校との連携は、やっとTRIADができて、いろんな意味でできると思うのですが、景観園芸学校と連携していこうとする時に一番の問題になるのは、植物館のところに研修に来ていただくレベルだったらいのですが、それ以上のものにしようと思う時に、指定管理という制度の中で変えられてしまいましたよね。指定管理という制度の中でやっていこうという時に、県からのお金で運営していますし、かなり低い費用しかありません。儲けなあかん時に、みんなとやっていく時に、私は貝原さんに、「ナイアガラは、その子たちにお金は払っているけど、けっこう優秀な子を安く使える」と言ったら、そこにピピッと来られたような気がするのです。だけど、景観園芸学校から送られてくるのがそうではないということと、もうひとつは、授業をするには結構なエネルギーがいるんです。だから今も海外の学生が来ていても、エネルギーを使うということに対する民間の立場、株式会社としての立場から言うと、そのことの保証はされていません。だから、そういうことの組織のあり方を整理しないといけないと思います。

(中瀬)

とりあえずそれぐらいにしておいてください。辻本さんが最初に言いたかったのは文化についてですね。日本の花文化は素晴らしい。それをもっと大事にして発信してほしいと。

(辻本)

というより、全部やっていることは花文化に関わるのに、そのことをバラバラに言っているから、誰も何もわかっていない。根本のところを教えなければいけないと思います。

(中瀬)

辻本さん、共生って英語でどのように言いますか。田中さん、共生は英語ではなんと言いますか。

(田中)

Symbiosis でしょうか。

(中瀬)

それは生態学者の言う共生でしょう。適切な英語がないんですよ。harmonifal co-existence between man and natureと言わんと、僕らが持っている共生という概念を英語で言えないのです。だから、環境省が必死になって苦労していたでしょう。名古屋のCOP10の時に。あの人らに共生をどのように英語で言うのだと言っておりました。日本人はそれを持っているではないか、ということを辻本さんは言いたかったのだと思います。

(辻本)

というより、やっていることがみんなそれなのに、言い方を違うようにしているということは、やっている人間がわかっていない。それが問題だと思えます。

(中瀬)

わかりました。では、橘さんお願いします。

(橘)

中橋さんが淡路花博の時に「コンサル協のほうで各社でやりました」とおっしゃったんですけど、最初は私、計画に関わっていましたが、震災の影響でまた県のほうに戻りましたので、実務のところはやっていないのですが、大阪花博ではコンサル協がかなりウエイトを置いてやったかなと思います。淡路の場合、半分は国営公園で既にできあがっていて、半分は仮設ということで、どちらかというところ、半分は仮設部分をコンサルの皆さんにということで、部分的もしくは個別に発注されたのかなという気はするんです。

何を言いたいかということ、そういう意味で、本来の園芸造園博に関わる園芸造園の専門のコンサルや施工の分野の人たちにとって、淡路花博ってあまりおいしい話ではなかったのかなという気はします。半分は国営公園で進んでいた。ある程度ランドスケープとかができあがっていたというところもあるでしょうし、もともとやはり兵庫県主導というところがかなりありまして、コンサルというか、ランドスケープデザイナーにこだわるといっても、兵庫県の行政のほう为主导的に会場作りから全部やるというのが、本質かどうかわかりませんが、強い意向があった。

それは、それ以前にも地方博をやってきた実績、それから先ほどから出ていましたが、10周年や15周年を見ても、淡路花博2010花みどりフェア、淡路花博2015花みどりフェアと言えは言うほど「花博から離れているね」という印象が実は私にはありまして、なんとなく「地方博」的な部分が強くなってきていると感じます。そういう意味で園芸造園産業の振興に資するというのをあげればあげるほど、実はこの淡路花博もそうですが、確かに花卉の類の生産供給はすごく一生懸命頑張ったわけで、日本全国そうですが、全体で見て2000年以降花卉生産の生産量は減っているわけですね。輸入がどんどん増えているという状況があって、10周年の花みどりフェアもそうだったのですが、「もっと兵庫県の花卉関係が頑張らないと」「淡路の花卉産業、生産の人が頑張らないと」と言えは言うほど、みんなシラーツとしているということで、「いや、それは県からちゃんと発注してもらわないと」と、先ほど受け身だというのが出ていましたが、まさに生産する側もそういう感じですね。

ということで、造園業界にとっても施工業界にとっても、プラスになっているとは言い難いかなという感じがありますというのが、答えになっているかどうかわからないんですけど、そういうところがちょっと感じられるというのがあったので、最後に私が園芸博の今後のあり方で、「本来の本当の国際園芸博は」と言った、その部分での関わりがもうちょっとある必要があるのかな。

A 2、B 1の話が出ましたが、A 1って10年に同一国で1回、フロリアードも I G A も、その当時ですよ、聞いたのは、それが終われば、その次の年から10年後のやつが始まっている。そのプランニング、デザイナーを大体決めて、一つの考え方のもとで会場計画なりというのが決まる。運営とかそういう部分は、その間対応にいろいろ議論はするんですけど、そういう意味での会場のデザイン性ですね。そういうのは統一感があって、きちんとしているなという感じがありました。A 1でしたら確かに10年かかるのでそういう準備期間で、A 2 B 1になると4～5年でできてしまうわけですよ。そういうことで国際博ができる。だから、その良し悪しはあるんですけど、そういう準備期間の違いみたいなものは、デザイン性のところでも出てくるのかなという感じはいたします。

それから、これからのあり方みたいなところで、ちょっと質問とは違うかもしれないのですが、今、国営明石海峡公園を管理運営させてもらっている立場で、今回の花みどりフェアに兵庫県園芸・公園協会として出展させていただきました。兵庫県園芸・公園協会の本部にも理解していただいて、それから企業協賛ですね。松井金網工業さんのように、「こういう分野は全然初めてだけど、やってみた

い」という形で協賛していただいて、一緒になって新しいデザインなり出展展示を国営公園の中で園芸・公園協会としてやらせていただいた。そういう試みをやったのですが、国営公園自体が15年経ってすごく樹木が成長していて、施設の老朽化とは別に、完全に緑は増えている。逆に手を入れなきゃいけない。そういう中で一緒になっての出展とあわせて手を入れた区域をやってみて、これはやはりもっともっと手を入れなきゃ、公園としても駄目だということを強く感じました。

ですから、次に何かやる時に、ダイナミックに緑の手入れみたいなものを行った会場作りということで、次の世代に見せていくというか、さらに後世に残していくものをつくるという実験場ということが言えるのかなと思います。

先ほど石原さんが斜面地緑化のあとのモニタリングの話もされましたし、プロムナードガーデンなり百段園、辻本さんのところでいろいろ手を入れられている。まわりにもいろいろ浸食してきているという状況はあるんですけど、例えばそういうのをひっくるめて、次の段階の夢舞台とか国営公園を提示する花博というのはあるのかなと、ちょっと感じているところです。

(中瀬)

あと一つ、糸谷さんがおっしゃっていた地域との関係についてはどうでしょうか。

(橘)

淡路島国際公園都市として感じているところは、結果的に、「貝原さん、やっぱり見通してたな」と。実は国営公園の隣は民間開発市区域とっていたのですが、さっき出しましたけど、結局、淡路市が主導的に、サステイナブルシティということで、まちづくりをや

っているわけです。今は企業誘致と病院と来ているのですが、住宅が張りついてこれから住まいができるなど、今そういう状況がまさにできつつある。これからできるんじゃないか。

ですから、まちづくりの意味でも、夢舞台なり国営公園というのはもっともっと意味が大きくなるのではと思っています。今は人に来てもらうというか、集客の面で言っているというか、それが目標の一つになっているのですが、そういうことではなくて、そういう地域づくりです。夢舞台、それから国営公園、北淡路はやはり大阪湾ベイエリアなり関西を見て、石原さんが飛行場では徳島もおっしゃっていて一瞬思ったのですが、今の関西広域連合では、加わることにちょっと躊躇している奈良県以外は、徳島県も鳥取県も入っています。そういう意味で淡路夢舞台、国営明石海峡公園というのは、核の一つになり得る。それは淡路全体の核になるかもしれませんし、淡路全体を引っ張っていく、そういう場所になるかなとちょっと思っています。

(中瀬)

橘さんは、公園の地域に及ぼす何とかという画期的なテーマの博士論文を書いておられます。中身は知りませんが。ありがとうございます。

今のお話の最後にちょっとだけ付け加えますと、テーマを決めていくということで林まゆみ先生が言われた、アイデンティティとか、観光とかまちづくり、地域づくりに博覧会は関わっていくべきというふうに、橘さんは言われたんですね。ありがとうございます。

そろそろ一回目のトリで、近藤先生何かお話いただけますか。

(近藤)

非常にたくさんのご質問が整理しきれないような形で出ていますので、つまみ食いさせていただこうと思うのですが、洲本のお話との関連でも、私なりに考えておりますし、ご発言もあったことなのですが、「市民自らが自覚して」ということの重要性ですよ。

実はこれは兵庫県全体に言えることだと思うのですが、県が何から何までやりすぎているということ。これは伊藤博文以来の伝統でしょうね(笑)。

ご存じのように伊藤博文の時に兵庫県が、実は東京に向かって西国が反乱を起こしたときのバリアだと、山陰道から山陽道までぶち抜いた県をつくったのです。南海道のほうにも淡路を入れておく。その初代知事が伊藤博文でありました。

これがそもそもでありまして、となりますと、やはり兵庫県のことはそれなりに中央政府もバックアップをしないことには、明治の早々は中央政府も存立が危ない。

それだけにお金をかけないといけない、県の補助をいわば総花的に出しすぎていないでしょうか。ということになりますと、「県から出すんやから、こっちが別に頭を絞らんでもええわ」となりますし、今度は自分で考えたことを「これが果たして県の予算におさまるのやろか。おさまらなんだら金がもらえへん」というふうな意識になってしまい、それがまた自立性を損なっているのではないのでしょうか。

それはそうとして、やはり県政レベルでも良いことを言ったところには、それなりのバックアップを考えるという姿勢があつてこそ、本当の県民の向上になるのではないかということをお話を伺いながら考えておりました。

まだたくさんのご質問の中のほんの一部も答

えていないと思いますが。

それから橘さんとの関連で、花と生産の問題、園芸の問題が出ておりました。先ほど私も触れたか触れなかったのか忘れましたが、実は生産するだけで園芸の勝負をつけようというのは間違いだと思うのです。

「こんなところでこんなすばらしいものができていますよ」ということをちゃんと見に来させて、「なるほど」ということで、向こうから買いにきてくれる。それであって初めて産業は伸びるんですよ。それが出来ていないのではないかなど、私なりに思っております。

先程、中国の方がずいぶん沖縄に来ているという話をしましたけれども、これは当時の、建設省の公園担当課長が京大出の山田君という男だったと記憶しますが、海洋博の当時、彼に「なんであんなところにあんなもんつくったのや」と言ってやったものです。それが今日になると、彼はまさに、結果的ではあると思いますが、目玉をうまいこと作ったのですね。

香港、台湾から、こんなにたくさんドルを懐に詰め込んで沖縄で爆買いをしてくれるなんてことは、先ほどの久保さんの予想が当たった、という話がありましたけれども、誰も予想できなくて、無論、彼も予想していなかったと思いますが、今日から見ればよい線をいっていたんだな、という気がします。

ということで、せっかく花博をやって、ツーリストをこれだけ淡路島に集めたわけです。そのときになぜ、「淡路ならでは」というものをもっとやって、印象に残る、長い息の続くPRをやっていなかったのか。夜の花博を演出する、サイトのランドスケープを考える、海の活用を図る、このあたりが課題だったろ

うと思います。

ということは、2020年に何かを考えるのであれば、そのようなものの見方もあるということですよ。これは私なりの、はっきり言えば遺言みたいなもので、2020年には多分、私はもうこの世の人でないと思いますから。

その時にはやはり若い世代が頑張ってくれないといけない。今日の主催は造園学会ですから、いかにしたら若い世代がこういうところにも目をつけて頑張れるようになるか。

夢を与えるようなことに学会が頑張らないといけないということで、2020年に、ここを舞台にしたら、いったい何がやれるのかということ、例えば造園学会の関西支部と兵庫県などが手を取り合って企画をして、アイデアの公募をやったらいいと思うんです。

先程、お話をした明石海峡公園群で言えば、構想、調査、計画、建設、そして運営ボランティア参加から国際的なツーリズムまで、テーマの20や30は考えられます。

そうなってきましたと、お金がいると思えますけれども、安藤忠雄さんの言った 2,500億円の 100万分の1でかなりのことができるのではないのでしょうか（笑）。

安藤忠雄はえらい建築家だと思いますけどね。あれだけのもの、いったい何ぼかかるといのは考えていて当たり前です。それが、「形だけで採りました。お金のことは知りません」と公言したのでありますから。

このサイトにできるプロジェクトのイメージを100万円予算で若い人に考えさせることなら、関西支部で何か考えられると思います。それを、2020年をターゲットにやる。これを今日の宿題、支部長への進言とします。学会のしかるべき諸君と語らいあいまして、その頃になりますと、今の学生諸君が社会人です

から、造園出身の学生が汎く受け入れられる、そのニーズをつくれるプロジェクトの種をちゃんとつくってください。

それは学会の責任であり、各大学から見えている先生方の責任でもあります。

米寿が近いOBですから非常に無責任に言っておりますが、このことについても、今日の課題としていかがでしょうか、ということで、中瀬さん、あとをよろしくお願いします。

(中瀬)

すべてよかったですね、最後はとびきりよかったですね。今の現役の教員の人々は、学生がこれからどこでどう活躍するのか、これをイメージした教育、研究をしないと、従来通りやっていて従来通りのコンサルに突っ込めばいいじゃないかということではいけないわけですね。新しいところを開拓すべき学生さんをどう教育するのか、先生方に託されたというのを近藤先生はおっしゃっておられます。本当にそのとおりですね。今日の結論の1個に必ずそれを入れましょう。

(辻本)

いろんな話はしたはずですけど、花文化のことしか言われていないのですが、北淡路植物園構想ということを書いています。いろんな洲本の問題もあるかもわからないのですが、淡路のすばらしさは、特に南のほうには断層もいろいろあって、地震も起こってくるけど、淡路の場合は持っている自然によって豊かなものや食べるもの、いろんなものをつくっていています。北淡路のほうにいっぱい公園があるのが、一つのネットワークをしていかなきゃいけないんじゃないかなと思います。

もう一つ、位置づけのところで、瀬戸内海の入り口にあるのに、海というものを語っていないような気がするの、淡路島をトータ

ルで語るのを入り口でやらなきゃいけないんじゃないかなというふうに思っています。入り口に瀬戸内海の入り口としての地域ミュージアムをつくってはどうか。今までは海のことをやっていませんが、海にも関わりながら、全体の話でやっていかなきゃいけないんじゃないでしょうか。先ほど言った一つ一つのまちづくりみたいなものを重ねていって、「淡路ガーデンルネッサンス」と私は名付けているのですが、そういうものでインバウンドになるぐらいまで、これは日本のプロトタイプになるというぐらいまでやるという形でやっていかなきゃいけないということと。また、私たち園芸分野からすると、その花文化というものを、アウトバウンドというか、T R I A Dなどをきっかけに海外に伝えて、その海外の人たちが来ることや彼らに売っていくということもしていかなければいけないと思います。

そのようなまちづくりをしていこうとしたら、いろんな分野をやっていこうと思ったら、丹波にいた時であれば、「人と自然の博物館」が「丹波の森研究所」とかをつくられていましたよね。淡路の場合は、そういうコンサルが入ったり、企業が入ったりする研究機関というものがないのです。

(中瀬)

景観園芸学校があるのでは。

(辻本)

今の景観園芸学校では、私はちょっともの足りないと思っています。もう少し大きなものに。先生たちは生徒を教えるのに忙しいでしょうから、そういう意味では、私、「つくってください」と言った人間なので、先生たちには失礼ですけど、必ずしも満足はしていません。それなので、やっぱりそういう施設

が必要ではないかと考えています。

それから丹波の場合は、お金のことをあまり考えなくてもいいんですけど、淡路の場合は、続けていくため、産業を起こしていくために、どうお金にしていくかということが必要です。そのために企業の入り方をどうしていくかという整理をしなきゃいけないとか、すごく難しいことです。これからの公園や緑の分野の人が、そのマネジメントを考えなければいけない時代に来ているので、それを先導するような施設や研究機関とかシンクタンクとか、そういうものの存在は必要だなと思います。

洲本のことを言われていたのですが、洲本は洲本で古民家ですごくいいところがある。それから1個ずつやっていくしかない。淡路の場合はなかなか、言われたようにいつもやってもらうことになっているので、一つずつやっていって見せて、「こうや」ということをやらない限りは。まちづくりってどこでも一緒なんですけど、見せてやらないといけない。そういうやり方をまちなかでやり、かつ、大きな目では、大阪ベイエリアも、徳島まで含めた概念の中で緑化をどう考えるか、海をどう考えるか。それも言えば新しい緑化の提案などができると思いますし、そういう組織づくりが必要だと思います。まちづくりも組織づくりも、緑分野の単に苗とかそういう話ではなくて、緑化手法ですよ。そういうことできる組織づくりという大きな面からのものと、ちっちゃな1個ずつのまちをつくっていくということをネットワークさせるとこの二つがなければと思います。

一番の問題は、私たちT R I A Dで海外と研修施設をやっても、その行った子が帰ってきてどこへ勤めるのかということがあります。

景観園芸学校をつくったのに、兵庫県がその子たちを採用していないというところが問題ですよ。はっきり言うと、そういう子たちをちゃんと送ってくれたらいいのに、というところがあります。私としては植物館は、私は永遠に生きる人じゃないので、いつまでも関わっているわけにはいかないので、そういう方々に後継者としてやってもらわないと、たぶん植物館もつぶれていきます。

夢舞台は、さっき何もされてないと言われていましたけども、安藤さんの空間の中で企業の方々に協力していただいて、今回も、金網さんともそうですけど、大和リースさんにもご協力いただいたりして、仕掛けをしています。はっきり言うと、このことに公務員の人が全然気づいてない。

もう一つ、私は百段園に環境循環型住宅をつくりたいという提案もしましたよね。でも、そういうことに関して、あそこは危ないからだめだとか、安藤さんに何か言われるから、ということで終わってしまう。そういうふうな、主導でやるのはいいですが、主導でやるのならもっと勉強していただきたいと、公務員の方々に言いたいところもありますよね。だから、それをちゃんと指導できるような組織をつくり、先導していくと良いと思います。

フロリアードは毎回場所が変わるから、ミッションが変わってもいいのですが、ここはやはり、時代とともに変わるかどうかはわからないけど、根本のミッションを曲げたらダメじゃないですか。しかし、その根本のミッションというものがありません。「お金がなくなったから人を集めないといけない」というのが公務員さんの言われることで、短絡的な、3年ぐらいで何かしようということばかりのものと考えでやられるから、私としては本当に

この仕事って一番今まででやりにくい仕事です。今までは好きなようにやらせてもらっていましたが、ここが長い間かかっているのは、そういうミッションをちゃんと守っていく人が明確にされていないということですよね。

それと、いわば私たちが力を持っていないというところで、建築家に負けている。建築家も「お願いね」とか「ありがとう」と言ってくれるように最近なったので、それはちょっと良くなったなと思いますけども、私たちの分野がもっと力を持ってやらなきゃいけないと思うんです。それはなぜかと言ったら、私たちの分野が、さっきの花文化に戻りますけど、花文化のことをしているにも関わらず、広い視野を持っていないところが問題だということになると思います。

(中瀬)

ということで、公務員のことをだいぶ言われましたが、石原さん、反発も兼ねながら、「それは思いすぎや」と思うところをお話ください。

(石原)

公務員生活を卒業して10年近くになりますけど、辻本さんのご指摘のとおりでございます(笑)。担当者が、約2年程度で異動するので、責任が曖昧になるなというのが実感。幸い淡路景観園芸学校の場合は、構想、計画、設計、用地買収、建設、運営といわばマスターアーキテクトのような立場でやらせていただいたので、そういう意味では、良かったかなと思っていますが、一般的には、行政の担当者は2年ぐらいで職場が変わるので、そこをやはり、公務員以外の方が、大きな意味での総合プロデューサーがやるべきでしょうね。

(辻本)

しろと言っていただければいくらでもしま

すよ。

(石原)

さっき近藤先生がおっしゃった沖縄の海洋博公園について補足させていただきたいと思います。公園には、熱帯ドリームセンターという、いわば、洋ランのディスプレイ温室があり、人気を博しています。近藤先生がおっしゃったように、この施設が果たした役割はものすごく大きくて、当時の沖縄の園芸の主力産品は電照菊栽培で有名な菊だったのですが、熱帯ドリームセンターの建設を契機に、沖縄でデンファレを中心とする洋ラン栽培が始まりました。正確には、デンドロビウム・ファレノプシスという名前で、よく結婚式などで使用するピンク色のランがよく知られています。熱帯ドリームセンターが地元の花弁栽培に大きなインパクトを与えてきたのは事実で、国営公園が沖縄の園芸界に大きなインパクトを与えてきたということは特筆すべきことかなと思っています。

(中瀬)

周辺に大分できましたね。

(石原)

できました。ただ、現在、新聞情報でしか分らないのですが、U S Jが海洋博公園を乗っ取ろうと(乗っ取ると言ったら怒られかも知れませんが)しているようで、私は非常に危惧しています。また、都市公園法の建蔽率制限が邪魔なので、特区をかけてU S Jのパビリオンを建設しようとする行為は、許されるものではありません。官邸主導の下、特命随契でU S Jを名指しということです。これまで、国営公園は、市場化テスト方式で公園管理運営者の選定は広く公募し、適正な競争の上、第三者機関の審査会が選定するルールがあるのです。この件を国土交通省に情報提

供を求めても、彼らにもわからないと言う。このような特区制度を使った経済振興対策は非常に乱暴だなという気がしております。

先ほど、スライドでミラノの博覧会の様子をお見せしましたが、この博覧会は一般博覧会で「食」をメインのテーマとして開催されていますが、会場を見ていくと、まるで、園芸博と言っても間違いのないぐらい、会場は緑に包まれ、各国パビリオン前には、野菜の壁面緑化や市民農園的野菜畑、水田などがランドスケープとして取り扱われているのが特徴です。

今回の花みどりフェアの場合、あまりにも園芸分野の展示が少なすぎたので今後の課題だと思っております。

(中瀬)

その話に関しては、私にも責任があるんですね。それを思っておっしゃっていたのでしょう。今回の淡路花博では、公園緑地課がある県土整備部と花に関する農政環境部とでやっておけばいいのに、企画県民部が入ってきて、3つの部が連携して実施されました。それを束ねると言われたのが私でありました。

(石原)

静岡県の川勝平太知事さんには、淡路景観園芸学校を非常に高く評価していただいているので、今でも書簡のやりとりをしているんですが、「石原さん、静岡県は農芸大国を目指す」と、知事が明確なコンセプトを持っています。農芸大国。静岡県浜名湖湖畔で行った浜名湖花博も、兵庫県同様、5年毎に記念事業を開催していますが、静岡県の担当課は農林部のみかん園芸課です。あくまでも、静岡県の園芸産業の振興という明確な目標があります。もちろん、ランドスケープ分野の参加もあり、園芸と造園が、うまくコラボレーシ

ョンしているなというのが感想です。だからその辺のやり方を少し考え直す時期なのかもしれないですね。

(中瀬)

ありがとうございます。もう近藤先生に振りましょうか。先生に最後のトリでお話いただき、私にも少しだけお話させてください。ほかの3人の方々はもうよろしいでしょうか。

(橘)

さっきの大久保さんの「若い人にどうつなげるか」というところについて、今ちょっと役所的、公務員的というのがありましたけど、私も元公務員ですが、要はイベントとしてとらえて、単発的に、通過型みたいにしてしまうと何も残らない。だから精神も入らないし、コンセプトって書いてあるけど、「コンセプトの議論ってどこまでしたの？」という感じがします。

ただし、やはり若い人に言いたいのは、造園家というかランドスケープアーキテクトとしては、歴史というものも全部あるわけですね。大体やっているところは公園のところなので、花みどりフェアなり何なりイベントをやっても、それは単発ではなくて、公園の歴史の中の一つのできごと、イベントとして公園の中に残るわけです。それはやはりしみつくわけです。そういう歴史性の中でとらえて学ばないと、ということだと思えます。それも一つのランドスケープアーキテクトの専門性の部分ではないかなと、ちょっと思います。

(中瀬)

ありがとうございます。では、近藤先生お願いします。

(近藤)

橘さんから歴史に関するお話がありまして、

若干、私なりに今まとめてみようと思っていることもあるのですが、ここでしゃべるには時間がかかりすぎまして、5千年前の三内丸山から話を始めるわけにはいきませんので(笑)、それはカットします。

何が言いたいかと言いますと、要するに我々の分野が何故建築にこれだけ差をつけられているのかということですよね。ハコモノが強いということで、例えば私はさっき安藤さんをめっちゃくちゃに言ったという印象だろうと思いますけれども、あそこに2,500億円かけるのであれば、それに伴いあの公園にまですべて250億円かけなさい。

大体建築に対して造園は1割の費用をかけないことにはランドスケープにはならない。それだけのハラが、我々の分野の一番の基礎になってくのではないのでしょうか。

そういう問題を言いますと、とんでもない話だと言われるのがオチですけども。

33歳の年に初めて海外での仕事をしました。その時に、ギリシャの学者でドキシアデイスという人がおまして、エキスティックスという一つの理論をつくった人ですが、彼は何を論じているかといいますと、我々が扱うのはヒューマン・セトルメントだ。その中にビルディングもあればガーデンもある。ネイチャーもある。その間のバランスをいかにつくっていくか。それが、我々の分野が社会的な発言をする一番基礎になるのではないのでしょうか、ということですよね。

奈良女子大の住居学科で25年教えておりましたが、それまでは、学科の英語名称をどうするかということで、housing science だと、特に建築系の人が言うておりましたが、そうではなくて、science of human settlement だ。

でなければ、社会のバランスが取れなけれ

ば、国土づくりも出来なければ、人間の生活も成り立たない。その一環として、別に建築を毛嫌いするわけでもなければ、安藤忠雄個人の攻撃をしているわけでもないのですけど。

お互いに一つのパイをいかにうまく取り合うか、取り合うじゃないですよ、分け合う、あるいはお互いにパイをふくらませて増やしていく。

そういうことがこれからの課題だということで、学会の方は若い世代をちゃんとリードして行ってほしい。そうであって初めて5年後の卒業生が希望をもてるであろうということで、私なりのトリにします。

(中瀬)

ありがとうございます。そうですね。パイを膨らまさない。しぼんだパイを取り合いしていても仕方が無いですもんね。どこの組織にもあると思います。千円、2千円を分けるのに、2時間ほど会議をする大学もあるみたいですね。

総括

(中瀬)

あと4分ありますので、4分だけしゃべらせていただきます。私も若い頃、今の近藤先生のドキシアデイスのヒューマン・セトウルメントについて、雑誌があったのですが、学生の頃ワクワクして読んだと思います。そういうのを今の先生、学生さんに教えてあげてください。「こんなおもしろい本があって、これを読んだらワクワクするで」と。「ランドスケープアーキテクチャー」のブックカバーにその絵を使わせてもらっているんです。

それは余談で、昔、私達が博覧会の勉強をした時は、何を教えてもらったかという、ヨーロッパの博覧会は、荒れ果てた土地に博覧会を開催して、そこに花とか緑を持ってきて公園化して地域活性化する。それで各地をまわっていくのが博覧会ですよ、これが基本ですね。今日は、それは当たり前のことなので皆さん言われなかったのですが、それが基本であるということを学んだことがあります。そういう意味では、大阪花博も、ゴミをいっぱいためたところでメタンガスを取りながらやっておられましたね。淡路も、土を取ってどうしようもないところで博覧会をされて今に至っている。そういう意味では博覧会という意味合いをきちんと、本日議論された場所ではまあまあ最低限はやっておられるんだな、という気がします。

最近流行りの言葉で、皆さんも読んでおられると思いますが、ブラウンフィールドという議論があるでしょう。今、都市計画で特集しているのがそれです。それを語ってよいかどうか知りませんが、宮城先生が原稿を書い

ていますね。今までデザイン論ばかりやっておられて、突然ブラウンフィールドとグリーンフィールドを書いておられますが、まさにそれなんです。その中に出てくるのが「尼崎21世紀の森」です。あそこは何かというと、我々が使い倒して工場地帯にして、それで全然駄目にしたところを、またみんなの力で緑に戻そうよと、そういう産業空間で疲弊したところを都市活性化の基本に持っていかうというのが、今、都市計画学会で特集しているブラウンフィールド、グリーンフィールドなんです。

そういう意味では、あのようによくかっこいいですが、「この博覧会の議論ですべてやってたんや」というぐらいの迫力で造園学会がもっと主張しないと、全部都市計画の人に持って行かれてしまう可能性があるかな、と、私は危惧しています。今日を契機に、この造園の人々、園芸の人々は、そういうことをどんどん最先端で、「この博覧会でやっていたのだ」ということをぜひ言っていただけたらありがたいなという気がしました。

今日の「テーマを決めて」と言われているので、4つぐらいの大きい議論があったと思います。まずテーマ性の話です。テーマを決めてからやらないといけない、ミッションが不明確である、要は社会実験のように、アイ



中瀬氏による総括

デンティティ、観光、まちづくり、地域づくり、ミラノは園芸博ではないでしょうか、要はしっかりとテーマ性をみんなで持たなければいけないという議論や、辻本さんが一生懸命言われていた文化、共生、こういったところをしっかりと議論しましょうということがありました、そういうことをやっていくと、若い世代の人たちがいかに頑張るか、学会が頑張る彼らにテーマ性を持っていけるのではないだろうか、という話があったと思います。

もう一つは国際化と地方化の話がありました。私自身は地方大好き人間です。国際的なグローバルなものをやるのか、ローカルでやるのか、この議論はちょっと議論し足りなかったですけども、けっこう行間には出ていたと思います。本当にこれから兵庫県とか地方でやる場合に、グローバルな話も大事ですが、ローカルな話をもっと詰めることも大事かなと思います。これ、両方しっかりやらないといけません。海洋博記念公園がラン栽培で成功とか、いろいろな話がありました。もう一方では、洲本をどうするのかという話も出ました。ローカルとグローバルな話をどうするのかという話があったと思います。まずそれが2つありました。

行政主導についての話もありました。これは行政の人が頑張られたら、住民の人も頑張る。ここら辺をどうバランスをとるのか、誰がそれをコーディネーションするのか。行政の方々は、配属されて、「おまえ、せえよ」で、それは一生懸命やられます。ところが市民の方々にとってはそれが自分の本分違いますもんね。そこら辺のバランスをこれからどう取っていくのかというのが、行政の方々、あるいは造園、生産者、住民、いろんな立場の方々にとっての問題となるでしょう。

あまり議論が出ませんでした。辻本さんがさっきのプレゼンの時に言われたことで気になっているのは、予算の話です。予算が減ったと言われておりましたが、私の働いている人と自然の博物館では、辻本さんの植物館どころではなくて、震災から数えたら今半分以下になっています。来年の冬は、1月2月は閉館しようよと。「なんで？」とたずねると、暖房する電気代がないのです。だから「1月2月、お客さんの少ない時は止めたほうがいい」というぐらいに、我々の組織は予算的にそうなっています。その問題を本当にこれからどうするのかという話で、予算の問題、直営制、管理、「どうしていくの？」という議論はこれから必ず出てきます。

今、博物館で調べてみたら、日本の上野にあります国立科学博物館、あそこは全体経費のうち運営交付金が7割です。3割外部資金を入れています。スミソニアンとかメトロポリタン、アメリカの大博物館は5割外部資金が入っています。ニュージーランドのテ・パパとかあそこら辺は、8割外部資金でやっています。それが可能な背景には、規制緩和とかいろいろあるのですね。

要は、日本でこういう組織運営で予算が増えるなんていうことは、僕は絶対にないと思います。そうすると、私たちは本当に自分たちの運営をするのに予算をどうするのか、これは造園の教育の中でやらなければいけないと思います。造園は、絵を描いて設計してというだけではなくて、マネジメントを勉強する必要があります。このマネジメントがわからなければ絶対やっていけないというぐらいまで迫力を持って、今日は現役の先生方もたくさんおられますので、やっていただけたら嬉しい。それが、先ほどからの議論されてい

る「造園家の役割はなにか」という最後のテーマに関するのですが、建築家との連携の必要性、造園と園芸のインテグレート、それから造園事務所間の連携、組織の継続性、人材の継続性をどうするのという議論がありましたが、そこら辺にかかってくるのかなという気がしました。

(司会)

中瀬先生、パネリストの先生方、どうもありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。(拍手)

閉会

(司会)

中瀬先生にまとめていただきました。それでは最後に上甫木先生、結びのことばをお願いしたいと思います。

(上甫木支部長)

今日は長時間皆さんありがとうございました。特に最後のディスカッションは予想以上に成果があったかなと思います。さすが中瀬先生だと思って拝見しておりました。

私なりにひと言だけ感想を述べさせていた



上甫木支部長による閉会の挨拶の様子

だきますと、造園学会で3つの博覧会をベースにして講演会をやったのですけれども、確実にその時代ごとに造園の取り組みが上がってきているということで、淡路花博というのは、5年とか10年継続してやっておられるわけですね。そこに非常に重要な意味があったのではないのでしょうか。

今日、新たに発見したのは、10年や15年という中で花博というものが、要するに地域の周辺で、先ほど淡路の話がありましたが、地域を育てている。それから一つの拠点ではなくて、それがどんどんまわりに染み込んでいっている。たぶんその過程で、例えば園芸学校とかそういうところが核になりながら、人材育成をやっている。じゃあ、次はどうやるのかということで、近藤先生から大変重要な宿題を頂いたのですが、それは私自身も非常に危惧していることでして、たぶんそういう中で、若い人らが活躍できる場をなんとか探していかないといけない。

中瀬先生がおっしゃったように、やっぱり我々は、経済のことがわからなかったらどうしようもないということで、そういうところとの連携も具体的に進めていかないといけないということで、いろんな課題が見えたなと思っています。

実はこの3回のシンポジウムを踏まえて、次の支部大会を企画しております、10月17日に実施するのですが、今度はいろんな具体的な取り組みをやっている若い人に来てもらおうと思っています。今日の話の延長上でいくと、「それがほんまに仕事になるんやろうか」とか、「それをどんどん広めていけるんやろうか」とか、そんなことをどんどん考えていって、「そういう人を育てるための大学の教育のあり方はどうなのだろうか」とか、「地域との

連携はどうやっていくのがいいんだろうか」
とか、そういうことを、できたら皆さんと一緒に考えたいと思いますので、ぜひまた参加をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、今日は、実はたくさんの方々から協賛を頂いています。関西支部は残念ながらお金がなくて、橘さんを中心に、非常に多くの協賛、後援をいただきまして、この場を借りて、たくさんありますのでそれぞれのお名前は申し上げられませんけれども、お礼を申し上げたいと思います。

もう一度パネリスト、コーディネーターの先生方に拍手で感謝を申し上げて、この会を締めたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(司会)

それでは本日のシンポジウムはこれにて終了させていただきます。皆さん長時間どうもありがとうございました。

5. 配布資料

【出典】『国際園芸・造園博覧「ジャパンフローラ 2000」公式記録』,国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000 日本委員会」,財団法人夢の架け橋記念事業協会 ほかから

(1) 開催概要等

1. 開催概要

【名 称】

国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000」

[The International Gardening and Landscaping Exhibition 'Japan Flora 2000']

【テーマ】

人と自然のコミュニケーション

【博覧会の性格】

国際園芸家協会（AIPH）が承認する国際参加のある長期間の国内園芸博（B類1）と国際園芸博（A類2）の組み合わせによる国際園芸・造園博覧会

【会 期】

平成12年3月18日（土）から9月17日（日）までの184日間

【会 場】

兵庫県・淡路島

（主会場）国営明石海峡公園（淡路地区）と淡路夢舞台ほか 約96ha

【主 催】

国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000日本委員会」

財団法人 夢の架け橋記念事業協会

【開催意義】

- 身近な緑から始まる「人と自然のコミュニケーション」の望ましいあり方を追求し、緑ゆたかな地球環境の保全と創造に寄与する。
- 阪神・淡路大震災の教訓に学び、花・緑・水を基調にした安全で快適な美しい街づくりを提案するとともに、21世紀のライフスタイルに応えうる新しい公園緑地を提案する。
- 花と緑を愛し育てることを通じて人々に喜びと感動を与え、多様な交流を生み出すとともに、人々が互いに参加・協力しあう心豊かな地域社会づくりに寄与する。
- これまでの園芸・造園の知識と技術を集大成し、その成果を展示するとともに新しい技術の提案等を意欲的に行い、園芸・造園産業の発展とその国際的な振興を図る。
- 阪神・淡路地域の震災復興を内外にアピールするとともに「国営明石海峡公園」、「淡路島国際公園都市」の建設や「世界に開かれた公園島づくり」を促進して、世界都市・関西の形成に貢献する。



基本理念

人類は、唯一“幸福を求める動物”であるといわれています。限りないその追求活動は、科学技術を発達させ経済の繁栄をもたらしましたが、一方で地球的規模にわたる環境破壊や資源の浪費となって人類の生存すら脅かし、私たちに反省を促しています。また、1995年に発生した阪神・淡路大震災で、私たちは自然の大きな力を痛感するとともに、自然への畏敬の念を持ち続ける大切さについて思いをあらたにしました。

私たちはいままさに歴史の大きな転換点に立っています。人類の豊かな未来を開くためには、人と自然との関わり方を新たに問い直し、地球環境を保全するとともに大量生産と大量消費の上に成立してきたライフスタイルをあらためていく必要があります。

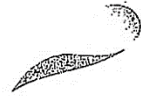
その中で問われる課題は、人と自然の真に優しい共生のありかたです。近年、こうした観点のもと、地球環境を守り失われた自然を回復するとともに、自然の恵みや美しさそして偉大さに共感し、自然とともに生きる新しい一歩を踏み出そうとする意識と行動が高まりつつあります。私たちはこうした気運を一層高揚し、人と自然の命を守り育み、人々が安心して暮らせるアメニティ豊かな環境を創出したいと考えています。

国際園芸・造園博「ジャパンプローラ2000」は、こうした新しい実践のスタートとして、人と自然のコミュニケーションのあり方を、豊かな自然環境の象徴である花と緑を通じて考えます。そこに集う世界の人々は、人と自然を結びつける花と緑についての思想と文化を学び、伝統に培われた園芸・造園技術のすばらしい発展を知り、そして多様な生物が互いに織りなす自然の生態こそが、地域の人々や世界の民族がともに手を携えて生きていく基盤であることを実感するでしょう。さらに私たちはそれを通じて、生きとし生けるものに共生の心を広げたいと願っています。

時あたかも大阪湾ベイエリアでは、世界との交流をうながす数々のプロジェクトが進み、世界都市関西の基盤が整いつつあります。そして開催地の淡路島は、大阪湾を西に画し、国うみの神話をいまでも息づかせ、世界に開かれた公園島をめざしています。

世紀があらたまるうとする2000年は、震災からの復興が後半にはいる年にあたり、このジャパンプローラこそが21世紀の街づくりへの夢を与え、地域の人々はその花や緑を世界の人々と共有して、勇気や希望、活力を生みだし、互いのきずなを深めて都市復興を更に前進させるでしょう。

新しい世紀に向かって開催される「ジャパンプローラ2000」は、「すべての家々の窓に花を、世界のすみずみにも花園を」をスローガンとし、淡路島から「新しい花と緑の文化」を世界に発信し、地球の緑をより豊かに我々の子孫に引き継ぐことを願うものです。



開催主体等

主 催 : 国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000日本委員会」
財団法人 夢の架け橋記念事業協会

特別協力 : 農林水産省、建設省

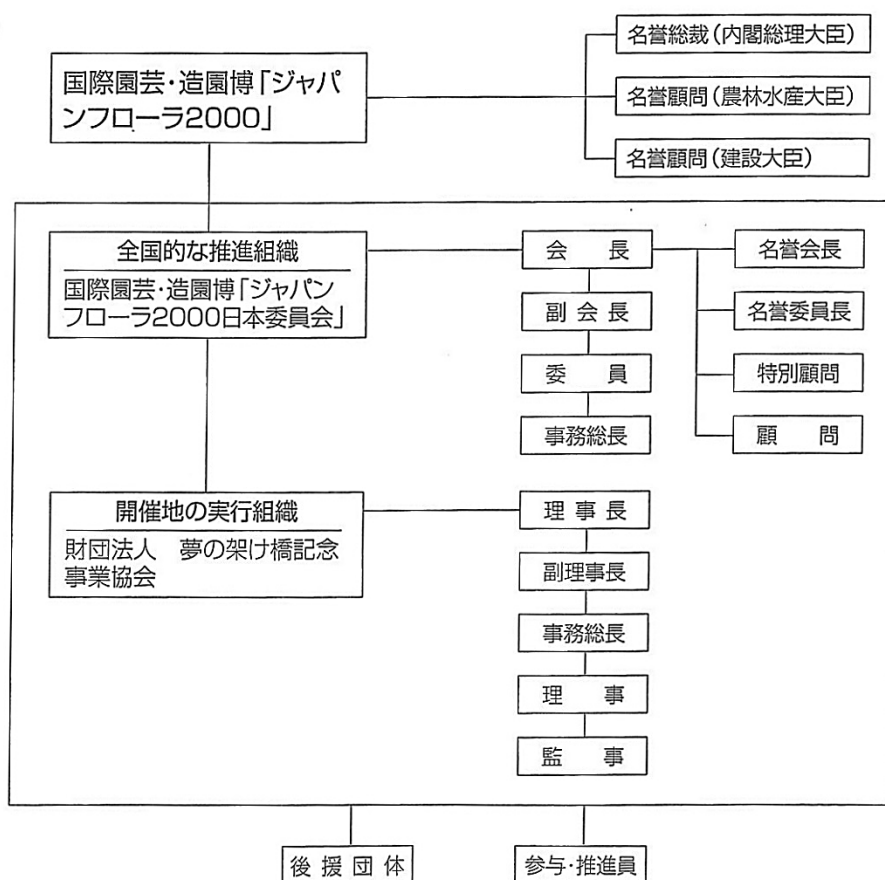
後 援 : 外務省、文部省、厚生省、通商産業省、運輸省、郵政省、自治省、環境庁、国土庁
全国知事会、全国市長会、全国町村会、全国都道府県議会議長会、全国市議会議長会、全国町村議会議長会
福井県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、奈良県、和歌山県、鳥取県、岡山県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県
(社)経済団体連合会、日本商工会議所、日本経営者団体連盟、(社)経済同友会、(社)関西経済連合会、(社)関西経済同友会、四国経済連合会、(財)大阪湾バイエリア開発推進機構、全国商工会連合会、全国中小企業団体中央会、(社)日本観光協会、(社)日本旅行業協会、(社)全国旅行業協会、国際観光振興会、日本放送協会、(社)日本民間放送連盟、(社)日本新聞協会、(財)国際花と緑の博覧会記念協会、農林中央金庫、(財)日本花普及センター、(財)日本花の会、(社)日本花き卸売市場協会、(社)日本花き生産協会、(社)日本フラワーデザイナー協会、園芸学会、(社)日本造園建設業協会、(財)公園緑地管理財団、(社)日本公園緑地協会、(財)都市緑化基金、(社)ランドスケープコンサルタンツ協会、(社)日本造園学会、本州四国連絡橋公団

推進・開催組織

開催準備の第一は、国際博覧会として成功を期す全国的な組織づくりを進めたことである。オリンピックの組織にならない、全日本的組織が企画・提唱と推進を行い、その傘下で開催地の実行組織が実務、事業を担当することとした。このため、国際園芸・造園博「ジャパンフローラ'98日本委員会」で決定した方針に沿って、実行組織である「(財) 夢の架け橋記念事業協会」が財政、運営、準備事務を推進することとした。開催組織は開催計画がまとまり、本格的な準備に取り組むことになった時点で、国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000日本委員会」が主催団体として博覧会全般にわたって推進することとした。

役割分担としては日本委員会の下部組織として、基本構想案を作成する専門委員会を設けたほか、会場建設や各展示の企画を検討するため「会場計画委員会」はじめ「人と花のコミュニケーション展企画委員会」、「人と緑のコミュニケーション展企画委員会」、「都市と都市のコミュニケーション展企画委員会」、「屋外展示企画委員会」、「ファームガーデン企画委員会」、「花の大広場企画委員会」を設けた。また、専門的立場からの指導、助言を得るため、会場建設、景観、花き修景、照明、花の館、緑と都市の館、生産技術展示園、国際出展、広報、催事の分野で順次、プロデューサーを委嘱し、事業の具体的展開を進めた。

■組織図



2. 入場者の状況について

入場者数は、目標の500万人を大幅に上回る約700万人を記録した。1日平均で約38千人であるが、花の季節となる4～5月には大勢の来場者を迎えた。特に、5月は50千人/日を超え、5月21日(日)は最大となる約8万人の来場があった。

(1) 総入場者数 6,945,336人
37,746人/日

月	入場者数	1日あたり
3月	599,996	42,857
4月	1,321,375	44,046
5月	1,583,504	51,081
6月	1,037,228	34,574
7月	782,609 (夜間: 93,126)	25,245 (夜間: 3,004)
8月	890,480 (夜間: 212,645)	28,725 (夜間: 6,860)
9月	730,144 (夜間: 31,865)	42,950 (夜間: 10,622)
計	6,945,336 (夜間: 337,636)	37,746 (夜間: 5,194)

最大入場者数 79,322人(5/21 日曜日:晴)

最小入場者数 13,868人(7/25 火曜日:雨)

日・祝日平均入場者数 53,486人

土曜日平均入場者数 48,066人

平日平均入場者数 31,267人

(2) 入場者の年代別

(単位:%)

区分	大人	シルバー	高校	小・中学生	幼児
割合	73.0	14.9	2.9	7.7	1.5

注) 入場者のチケット半券集計による。

(3) 入場者の方面別

(単位:%)

区分	県内	近畿	中国・四国	東海・中部	関東	北陸	東北・北海道	九州
割合	30.4	40.2	18.2	6.5	2.1	1.6	0.2	0.8

注) 場内駐車場における車の地域別プレートナンバーの調査による。

(2) 会場写真・会場基本計画図

■会場写真



■会場基本計画図



(3) 近藤公夫氏資料

1. 1990年「国際花と緑の博覧会」(大阪花博)の経験と反省

2. 淡路花博の立地と構想の視座

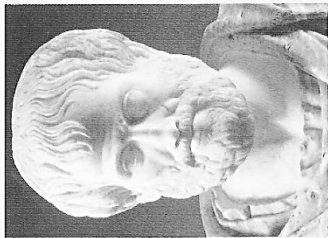
3. 淡路花博の展開、体験と学習

4. 将来への課題を考える

時代と共に進化する植物園

奇跡の星の植物館プロデューサー 辻本智子

- 1) 植物園の歴史とその役割・機能
人間が地球に誕生したその日から手にしたのは植物です。人間は植物に育まれ、植物を生かして文明・文化を創ってきました。植物園の歴史はまさしく時代における人間にとっての“植物の意味”を現しています。
古代から中世までの植物園は基本的に食糧、薬等の有用植物の遺伝子資源収集型でした。中世で大学の研究・教育型植物園が現れ、大航海時代以降はヨーロッパの国々に海外より珍しい植物が持ち込まれるのと同様に、技術の進展で大規模温室が創られたり、植物が産業と関わりを持つことで植物園の内容は急速に多様化しました。
1) 有用植物の情報収集保存機能を持つ古代の植物園
中国の神農 (B.C.3000) は多くの有用植物を中国に導入し、栽培方法を民に教え、育てたと言われています。花木を楽しむ庭園を作った最初はB.C.1500エジプト。科学的な対象として植物を栽培し、植物園を創ったのはアリストテレス (B.C.340年ごろ) で、彼の生徒で後輩者であるアレキサンダー大王が遠征地から生きた植物標本を集めたのです。



アリストテレス

- 2) 医学の薬草園から植物学研究型植物園へ
中世には、病気治療が薬草園の役割のひとつであり、修道院では薬用植物が育てられていました。13世紀には、薬草園は規模を拡大し、パチカンに大規模な薬草植物園が作られました。
16世紀になると、大学で植物学が医学から独立した学問として体系付けられ、最初の研究型植物園がイタリア、パドバにできました。ライデン植物園等、伝統的な研究型植物園は16世紀～18世紀にかけて作られていきました。

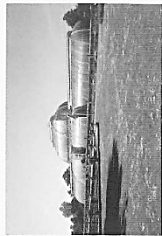


シドニー植物園
(遺伝資源収集型植物園)

- 3) 経済発展に大きな関わりを持つようになった遺伝資源保存型植物園
ヨーロッパの国々が植民地を持つようになった18世紀、19世紀には植民地から持ち帰ったスパイス、果物など、熱帯の有用植物の増殖・栽培をする場所として植物園が大発展しました。
イギリス、オランダ、ヨーロッパの国々は経済的観点から植物を求めて世界を駆け巡り、食用・薬用というだけでなくエネルギー資源などを将来の産業的展開までを考慮した「資源植物の収集・保存・増殖のための植物園」キュー植物園(イギリス)、ライデン植物園(オランダ)が大発展します。また、熱帯での増殖の方が効率が良いことから、オランダはボゴール植物園(インドネシア)のように植民地にも植物園をつくるようになっていきました。

(4) 辻本智子氏資料

【出典】『奇跡の星の植物館からのメッセージ』平成19(2007)年、株式会社グリーン情報



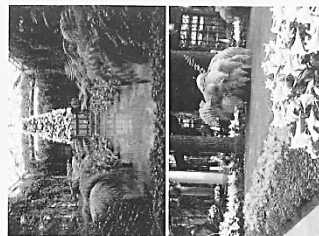
キュー植物園



シーボルト



クリスタルパレス



ロングウッドガーデン

- 4) 世界の園芸産業・文化を変えたブランチハンターと園芸振興型植物園

大航海時代以降、ヨーロッパは異常なまでの園芸ブームで、政府のみならず園芸協会、種苗会社、そして裕福な個人までが、植物学と栽培に精通した者を雇い中東、新大陸、東アジアなどに送り出した。

イギリスのキュー植物園は、多くのブランチハンターを世界各地に派遣し、世界中の植物を収集したことで有名です。江戸時代末期に来日したシーボルト、ケンペル、フォーチュンなども、さまざまな日本に関する情報とともに、多くの植物標本をヨーロッパに持ち帰りました。これらがライデン植物園等で収集保存され、オランダ、ベルギー等で品種改良され、ヨーロッパが世界の園芸産業をリードするようになります。一方、その頃人口の集中で悩むロンドン周辺では貴族の旧邸が公園やニュータウン、フラワーガーデン化し、庶民が花緑を楽しんだり、ガーデンングを営むウィズレズ植物園が生まれてきます。そしてイギリスのガーデンニングブームが巻き起こったのです。

- 5) 大温室が生み出した、花と緑の社交の場としての観賞交流植物園

産業革命が鉄とガラスで生んだと言われる大規模ガラス温室。1851年ロンドンのハイパークで開催された第一回万国博覧会のパビリオンとして建設された、鉄製フレームとガラスによる巨大なガラス温室「クリスタルパレス」は元庭師であるジョセフ・パクストンによって設計されました。海外の珍しい植物を大切に育てる養生温室から、大きなガラス温室の中、珍しい植物で彩られたガーデンで人々が楽しく語り合える、つまり人工環境下で、花と緑を楽しむ観賞交流の場としての植物園が生まれました。デザイン性に富み、社交の場を持つ、すばらしい観賞交流型植物園として華やかに登場するのが、19世紀にアメリカで生まれたロングウッドガーデンです。キュー植物園のような研究教育型植物園だけでなくロングウッドガーデン、ウィズレズガーデンなど観賞・交流型の植物園でもガーデンナーやキュレーターなど専門養成のための学校がつくられました。

これら19世紀までのヨーロッパの植物園をタイプ分けしてみると、有用植物を収集保存する「遺伝資源収集型」、薬草園で代表される「医薬・健康型」、大学・研究機関等の「研究・教育型」、香料や種苗など「産業振興型」と経済性を目的としたものの後に、やっとなしさと交流スペースを提供する「観賞・交流型」が生まれたのです。

6) 西欧の植物園と日本の植物園

日本で一番古い植物園といえ、18世紀に創られた“小石川御薬園（現在の東京大学付属植物園）”です。昔からの薬草園や薬品会社の薬草園など日本にも収集保存型の植物園は古くから存在していますが、一般的に「植物園」というと、明治以降日本に導入された西欧型の植物園をイメージします。日本に西欧型の植物園がつくられたのは大正13年の大正記念京都植物園（現在の京都府立植物園）をはじめ、東山植物園、天王寺植物園等、いずれもパーク&レクリエーション施設として導入されました。

西欧の植物園と明治以降の日本の植物園の違いを簡単にまとめると以下のようになります。

- ① 国家戦略として位置づける西欧の植物園
植物資源の乏しい西欧では、食・薬を制するものが世界を制するという意識の下で植物園が創られた歴史から、植物を収集することには国家戦略としての位置づけがありました。
- ② 研究・教育機能が乏しい日本の植物園
江戸時代、本草学が存在するように日本でも植物学が研究され、それらの教育施設として各藩の塾もありました。しかし明治以降のいわゆるパーク&レクリエーション型の植物園には研究機関もなければ植物学や園芸の専門家教育機能もありませんし、専門家を持たない植物園もあります。
- ③ マーケティング感覚
ニューヨーク植物園は有用植物のジーンバンクを持つ世界的な植物園ですが、植物園には結婚式ができるレストランもあれば、クリスマスディスプレイなど季節ごとのフラワーショーを開催するスペースもあります。研究だけでなく人々のニーズを把握し、集客力を高める工夫がなされています。

7) 多様な展開を見せる植物園

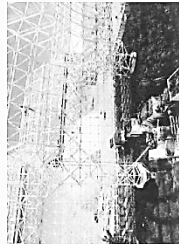
19世紀以降、地球環境の変化、社会環境の変化は新しいタイプの植物園を生み出していきました。遺伝資源収集型植物園の展開としては、アメリカでは宇宙にミニ地球を持ち込むための実験観賞施設バイオスフェアIIなど宇宙開発のための植物施設がつくられました。

高齢化、バリアフリー化といった社会環境の変化に伴い、園芸療法やセンサガーション等を持つ植物園が生まれました。大都市ニューヨークのブルックリン植物園では、庭の無い家で子育てのため、チルドレンズガーデンを作り、花壇、野菜作りを通して植物や自然について教育を行っています。

ニューヨークには大きなボランティア組織が主体的に運営を支えるブルックリン植物園と、食品、薬品会社との遺伝資源の研究で運営資金を生み出すニューヨーク植物園があります。ニューヨーク市が経済破綻した時も、この2つの植物園は独自のスタイルで切り抜きました。

日本でも70年代にはようやくジーンバンク機能を持つ“筑波実験植物園”が誕生しました。国土交通省が都市緑化の啓蒙のために作った“都市緑化植物園”、農林水産省が花卉振興のために作った“フラワーセンター”など様々な背景と制度から多くの植物関連施設が作られました。

カナダナイアガラ公園協会に留学し海外の植物園を見てきた私はこのような日本の植物園を変えたいと思います。私の最初の作品「花の植物園カーニバルショーケース」('88)は名前が示すように植物園と博物館とショースペースが1つになった施設でした。この植物園は従来の熱帯温室とは全く異なり、町並みにガラスをかぶせ、外部空間を内部空間化



バイオスフェアII

し季節毎のフラワーショーや花をモチーフとしたイベントを行いながら「花と緑のある暮らし」を提案しています。この植物園でおこなった日本で初めての試みは、①高いデザイン性…珍しい植物を単体で見せる従来の展示法ではなく花緑で演出された空間を楽しむディスプレイ法。花、樹木、葉を使い空間をデザインするmixed plantingも日本で最初に始めたこと。②運営のユニークさ…日本で最初の高齢者雇用会社“いきいき塾”が管理スタッフであったこと、緑化運動に力を入れる松下定電産産業労働組合がオーナーであったこと。③大学生の研修制度を設けたこと（多い時は年間30人を受け入れました）です。

この後に開催される大阪花の万博をきっかけに花のブームがスタートし、植物園の役割の一つに花の町づくり、ボランティア育成が加えられました。また、さらなる高齢化とユニバーサルデザインの推進により園芸療法園を持つ植物園も登場しました。

2. 本格的な植物園時代のはじまりと畜跡の星の植物園

近年、植物園運営に指定管理者制度が持ち込まれるようになり、植物園に独自性と経済性が求められるようになりました。多くの植物園は危機感を持ち、やと運営のあり方、社会貢献のあり方を真剣に検討し始めました。これからの植物園のあり方には以下の5タイプが考えられます。

- (1) 感動創造型
宇宙のリズム、地球の自然の巧みさ（科学性）、美しさを読み取れるように五感を惹くスペースとしての花緑施設。
- (2) 環境保全、植物収集保存研究型
地球環境に対し、人間の地球上での生存維持をかけた有用植物や地域固有の植物資源の収集保存研究を行う植物園。宇宙開発、製薬会社、食品会社とのコラボレーションが考えられます。
- (3) ライフスタイル提案型—カルチャーフロ—型
花と緑のある共生のライフスタイルを家庭から都市までのスケールで提案する植物園。園芸界とのネットワークが必要です。
- (4) 伝統文化継承型—カルチャーセントリック型
① 伝統園芸植物園
伝統園芸を研究・開発し、伝統を継承するスペースチャリストの教育機能を持つ植物園。
② 地域性や伝統を継承する花のまちづくり型植物園
地域性や伝統文化・工芸を庭づくりや暮らしに取り込むことで、個性あふれる地域づくりを行い、花文化を醸成するための情報発信、学習拠点となる植物園。

(5) 町づくりインキュベーター（孵化器）型植物園

住民参加の町づくりのため、住民が花緑についてデザイン、技術、町づくりについて体験的に学べる植物園。奇跡の星の植物園は特に(1)(3)(4)(5)を複合する植物園といえます。



“花の植物園”カーニバルショーケース

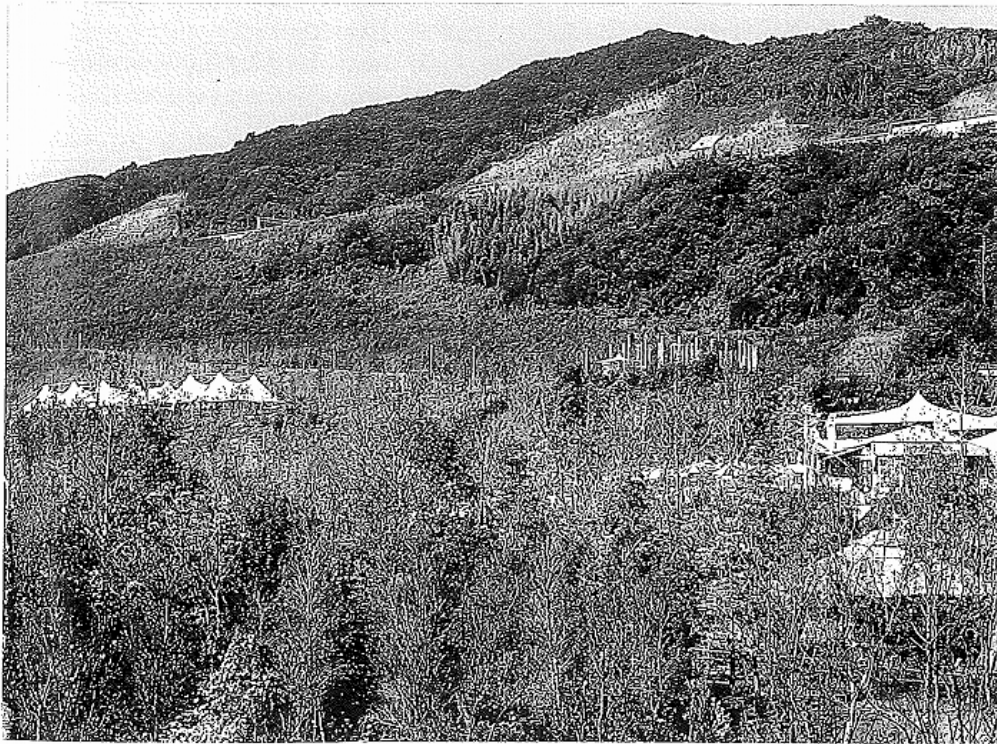


春日井市都市緑化植物園
(住民参加型植物園)

(5) 石原憲一郎氏資料

【出典】『国際園芸・造園博覧「ジャパンフローラ 2000」公式記録』,国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000 日本委員会」,財団法人夢の架け橋記念事業協会

緑の斜面



■テーマ

失われた自然の回復と創造

■施設概要

造園設計：(株)イーエス計画室

建設：兵庫県企業庁

全体面積：約120,000㎡

施工：淡路土建(株)、森土建(株)、向内造園(株)、(株)森長組、入谷緑化土木(株)、グリーンアワジ(株)、(株)山口造園、太田土建(株)、(株)中西総合ガーデン、石上電気商会、(株)吉田組神戸支店、阪神緑地(株)

■展示方針

淡路夢舞台の背景に広がる約12haもの斜面地を岩盤斜面地の緑化工事により、自然回復した。この自然回復へのプロセスと現状をテーマ「人と自然のコミュニケーション」を代表する博覧会の最大のアピールとして展示する。

会場のほぼ全域から見渡せるが、より具体的に

は斜面地へ来場者を誘導する園路を開き、斜面地の植栽、灌漑の様子をつぶさに、理解しやすい展示の工夫をする。

■展示計画

ジャパンフローラは、当初明石海峡大橋の開通を記念して、開通時の平成10年の開催としたため、広大な面積の会場を短期間に手際よく緑化する必要があった。このため、兵庫県は「緑化アクションプログラム策定検討会」(策定アドバイザー：吉田博宣・京都大学教授)を組織し4回にわたる委員会で専門的な検討を加え、淡路夢舞台の景観と調和した自然回復のモデルとなる緑化大作戦「緑化アクションプログラム」を作成した。

■緑化アクションプログラム策定検討会 策定アドバイザー 学識者

吉田博宣 京都大学教授

関係団体

中島清昭 日本植木協会関西ブロック長

若生友弥 日本植木協会
乾 高彰 日本造園建設業協会兵庫県支部
坂上 博 日本造園建設業協会兵庫県支部
高見真介 兵庫県造園建設業協会
花房彰雄 兵庫県造園建設業協会
佐々木康弘 淡路グリーン協同組合
入谷芳昭 淡路グリーン協同組合

その中で示された修景緑化の目標や方針、具体的な緑化計画とそれを実現する工法、工程に基づき25万本におよぶ大規模な緑化工事を進めることとした。

修景緑化の基本理念は、自然の再生はもとより、自然との対話のための自然豊かな舞台づくりを第一歩とする。そのため、淡路島固有の歴史風土の上に土、水、緑、光の織りなす淡路島国際公園都市のソフトなインフラを構成していくことにより、訪れた人がこの場での自然との対話を契機として自然との様々なコミュニケーションを深められるランドスケープをめざすこととした。

こうした観点に立って、兵庫県は斜面地緑化の基本方針を次のように定めた。

- 淡路公園島の玄関、世界からのレセプション空間、大阪湾ベイエリアの拠点となるレクリエーション空間にふさわしい修景緑化
- 国際公園都市に集う多様な価値観を持った人々が「感動を共にできる場と風景づくり」としての修景緑化
- 大阪花博の理念を継承し、実践・具体化する場としての修景緑化
- 大規模な自然改変の爪跡を意識させない新たな自然の再生と演出に裏付けられた修景緑化
- 淡路島や瀬戸内の風土や風景に調和した修景緑化
- 淡路島の地場産業である花き栽培を飛躍させる、活性化につながる修景緑化
- 明石海峡大橋開通時の修景緑化が恒久的な修景緑化のワンステップとして生かされる段階プログラムに基づいた修景緑化
- 平板、無機的な地形を解消するため微地形の変化を取り入れ、地球環境時代に応える生

物的多様性を確保するための修景緑化

その上で、博覧会場としての位置づけとテーマ性を明確化した。

第1は、時とともに成熟し続ける都市として、多彩な表情を見せる自然との対話を可能とし、時を越えて夢と感動を与え続ける環境を創出すること。

第2は、淡路島国際公園都市全体が一つのリゾートホテルのような空間として、利用者に温かいもてなしを提供するよう、自然、緑、花、水がリゾート空間を演出する重要なインフラとなること。

第3は、最新の緑化工法と技術や在来工法の新たな視点による応用技術など、緑化の成果が都市の緑化や訪れた人々の生活の場の緑化、さらには環境づくりの参考となるよう、緑の斜面そのものが生きたお手本として、新しい緑化工法での景観づくりと都市緑化を提案するモデル園となること。

第4は、淡路島国際公園都市は、公園や緑、花が主役であるべきであり、建物は都市の顔として豊かな表情を自然の隙間から見え隠れするよう修景緑化されること。

第5は、淡路島の自然と風土に根ざした郷土の緑と対比をなす淡路島国際公園都市をシンボライズする景観木による演出が必要であること。

第6は、都市の緑や花を維持していくため、花き産業と連携し、生産から美しく見せるための展示、技術の開発、管理までがトータルとして連鎖すること。

第7は、斜面都市の立体的な特性を生かし空や海などの多彩な視点から花や緑を楽しませる見せ方に配慮すること。

最後は処理水を利用した水の演出、維持管理用水システムなど土、水、緑、光のエコシティとして、都市の生態系の中に組み込まれることが必要としたことである。

こうして、計画地と緑化地区別における緑化の考え方、導入種、緑化工法、植栽基盤の整備、灌水システムのあり方を検討し、緑化大作戦のプログラムとして明らかにした。

■ゾーニング

博覧会場づくりのゾーニングのなかで斜面地は、その立地特殊性から、メインゲート西側から夢舞台国際会議場の背後地に至る延長約1,700m、海拔20mから展望台の同80m、さらには神戸淡路鳴門自動車道に至る同110mまで約12ha全域を有料区域外とした。その上で斜面地緑化全域を一つの展示として一人でも多くの来場者を誘う園路、動線を定めた。

■緑化・植栽

緑化作業は、樹種とその量の決定のもと、地区ごとに目標とする緑化、工法、樹種を確定した。

上部斜面地は、常緑の緑が目標とされた。ポット苗と種播きでウバメガシやヤマモモを、高木類のシラカシ、タブノキ、ヒメユズリハを、低木類のアベリア、ファイリアオキなどを植栽する。

下部斜面地は、常緑樹の緑を背景とした明るい疎生林およびウォールガーデンとしての地被類による修景とした。高中木類のケヤキ、シデ類、エゴノキ、サルスベリや地被類のオカメザサ、チゴザサ、ナツユキカズラなどを植える。

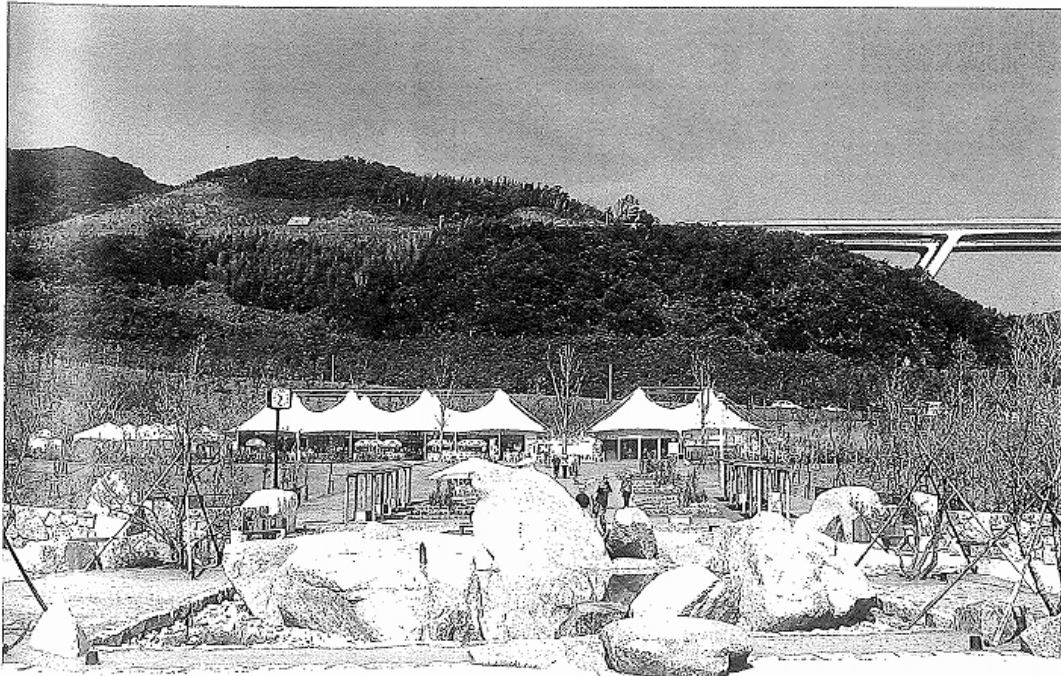
国際会議場の周囲は日本らしさのしっとり落ちついた緑の空間とした。中低木類のタギョウショウ、ツツジ類、サツキ類、アセビなどや地被類を植えることとした。

温室、野外劇場前は、巨大な建築群のスケールに対応した斜面スロープを演出するため、芝生を主とした散開林とし、落葉大木のケヤキ、エノキ、ムクノキ、トチノキや常緑広葉樹を植えることとした。

緑の復元により、小動物ではノウサギやキジ、鳥類ではトビやヒヨドリ、ウグイス、ホオジロ、キジバト、昆虫ではシオカラトンボ、コアオハナムグリ、マケコガネトウガネブイブイ、シロスジカミキリなどの生き物がすむようになり、元の里山の自然が戻ることとなった。

こうした植栽工事は平成6年2月から兵庫県が実施、約6年間で14種類25万本を順次植えた。

斜面地緑化の植栽で特筆的なことは、その工法（人工土壌土吹付工法、軽量法枠工法）の工夫もさることながら、全域に土地の湿度を測るセンサーを埋め、コンピューター制御によって湿度が不

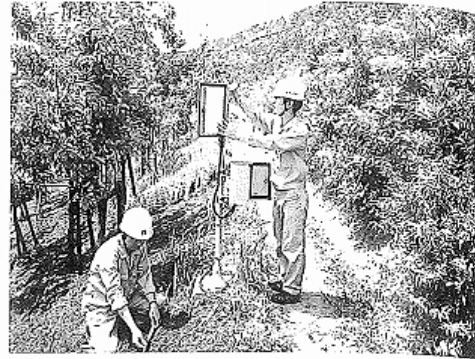


足した地域に自動的に撒水する灌漑システムを導入したことである。

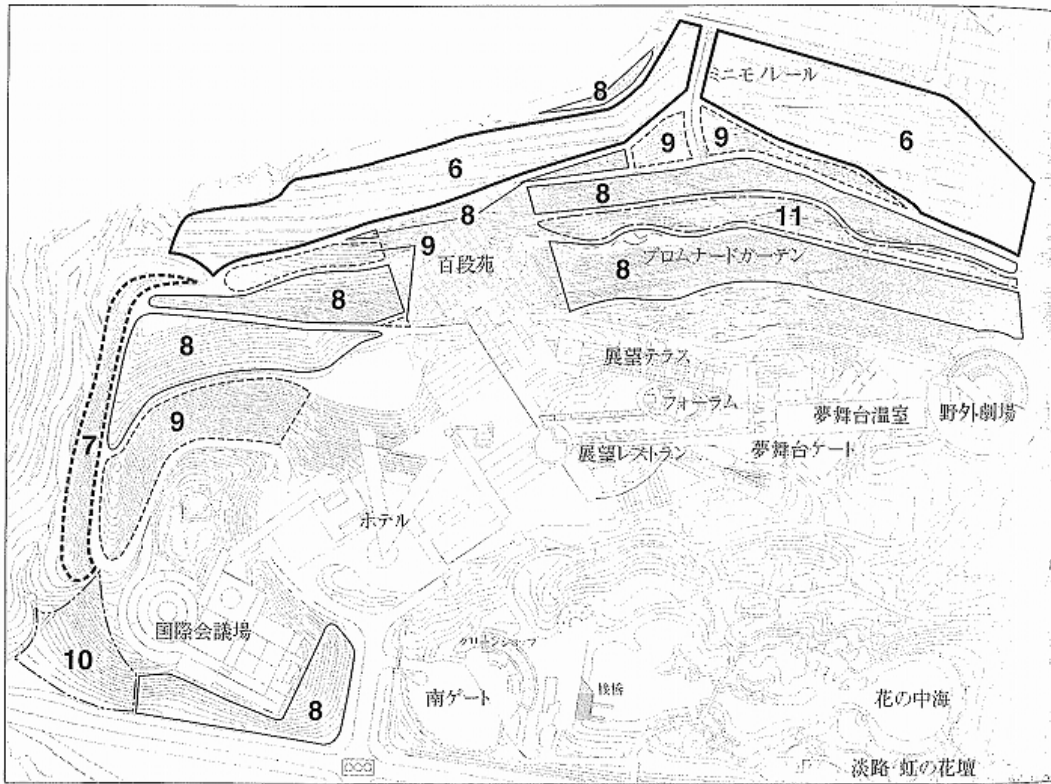
これらの技術的展示は、「緑と都市の館」内で行い、斜面地を歩く現地見学会「グリーンツアー」を会期中計6回、1回50人単位で行った。

■管理

斜面地全体の植栽管理は兵庫県が行い、その委託を受けて（財）兵庫県園芸・公園協会が日々の管理を行った。



■年度別工事範囲



凡例
 平成6年度 平成7年度 平成8年度 平成9年度 平成10年度 平成11年度

国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98 開催への取り組み

たかはな
橋 俊 光

はじめに

平成10年(1998)、淡路島と本土とを結ぶ「明石海峡大橋」が完成する。潮流の早い明石海峡を越える長大橋の実現は、かつては不可能とみられ、人々は長い間これを“夢の架け橋”と呼んでいた。しかし、土木技術の飛躍的革新がそれを可能にし、昭和63年(1988)の工事着手以来順調に工事が進み、平成9年度末(1998)、完成予定である。

明石海峡大橋の完成により兵庫県は、名神・中国道、舞鶴道、山陽道等の東西・南北国土幹線軸の結節点となり、平成6年(1994)開港の関西国際空港を通して、世界へつながることとなる。

また、明石海峡大橋周辺では、神戸・淡路の2地区で構成し、21世紀にふさわしい広域レクリエーション地域の形成をめざす「国営明石海峡公園」、21世紀の友好と交流をテーマとする「日仏友好のコミュニケーション・モニュメント」の建設、さらには、“コミュニケーション都市”の形成を理念とする「淡路島国際公園都市」の建設等々様々なプロジェクトが進められている。

明石海峡大橋をはじめ、関連地域のプロジェクトの着実な進展を図り、その効果を高め、地域の新しい発展と関西・瀬戸内世界都市圏の形成に寄与するため、兵庫県では、平成5年(1993)5月、「財団法人 夢の架け橋記念事業協会」を設立し、平成10年(1998)に“コミュニケーション文明

の創造”をテーマに「コミュニケーション文明の祭典」を開催することとなり、その中心的イベントとして「国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98」(以下、「ジャパンフローラ'98」という)を開催することとなった。

以下では、国際園芸博覧会のしくみ、内容、海外での国際園芸博覧会の開催及びジャパンフローラ'98開催決定の経緯、ジャパンフローラ'98の概要などについて述べることにする。

1 国際園芸家協会(AIPH)と国際園芸博覧会

(1) 国際園芸家協会(AIPH)
国際園芸博覧会は、国際園芸家協会(AIPH、以下「AIPH」という)によって承認される国際博覧会であり、AIPHは、国際園芸博覧会を承認できる唯一の国際機関である。

AIPHは、1948年に設立、オランダのハーグに事務局を置き、各国の商用園芸のあらゆる部門を代表する国家的な生産者組織の加盟により組織されている団体である。現在、24カ国が加盟し、会長はデンマークのオットー・コッホ(Otto Koch)、事務局長はオランダのJ.B.M.ロッセヴェール(J.B.M.Rotteveel)である。

日本は、昭和60年(1985)、我が国の代表として日本造園建設業協会が加盟し、また同時に、平成2年(1990)に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」の開催申請を行い、承認され、アジアで始めての大国際園芸博として成功裡に導き終えた。

AIPHの概要は、表-1のとおりである。

(2) 国際園芸博覧会の種類

AIPHでは、国際園芸博覧会の価値向上、過度開催の防止、成功保証などを目的として、「国際園芸博覧会開催規則」を定め、種類、開催頻度、開催期間、申請時期などを規定するとともに、面積規模、外国出展ス

(6) 橋俊光氏資料

【出典】国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98開催への取り組み(橋俊光、「都市問題研究」平成6(1994)年4月号、pp.110-130)

ペース規模などの基準も特別規定に定めている。同規則では特に外国出展者への平等条件の確保、優遇措置を総則で述べており、園芸分野拡大のための博覧会であることを明確にしている。

AIPH が定める国際園芸博覧会の分類と内容は、表-2のとおりである。

表-1 国際園芸家協会 (AIPH) の概要

1) 名称	Association International des Producteurs de l'Horticulture (仏語) International Association of Horticultural Producers (国際園芸家協会)
2) 設立	1948年に、欧州各国の多数の園芸協会の指導者たちが、スイス園芸家協会の50周年を祝してスイスのチューリッヒで会合し、その際に、フランス語の頭文字をとって創立することを決めた。
3) 目的	(1) A.I.P.H. は、専門業者であるその会員団体を通じ、国際的レベルにおいて、園芸業者の共通の利益を代表するものとする。 (2) 上述の目的は、会議、出版物、国内や海外の団体及び関係当局との協力、専門職業訓練の奨励、科学的開発や研究、宣伝及び展示、ならびに会員が随時合意するその他のすべての方法によって達成されるものとする。 (3) 本章の趣旨においては、商業的園芸生産とは、切り花、装飾用植物、種苗製品及び花き球根の商業生産、ならびに造園契約サービス及び造園事業における上述製品の商業的使用を意味するものと理解される。
4) 加盟国	24カ国 1. 現在のA.I.P.H. 加盟団体は下記の地域にグループ分けされる。 (1) 欧州 オーストリア スペイン ノルウェー ベルギー フランス オランダ スイス 英国 ポーランド チェコスロバキア イタリア スウェーデン ドイツ アイルランド フィンランド デンマーク ルクセンブルク (2) 北及び南アメリカ カナダ フロリダ (3) 中東及びアフリカ 象牙海岸 エジプト イスラエル (4) 極東及びオセアニア オーストラリア 日本

表-2 国際園芸博覧会の分類と内容

項目 分類	国際園芸博覧会		国際参加のある園芸博覧会	
	A 類 1	A 類 2	長期 B 類 1	短期 B 類 2
1. 開催頻度	・年1回以下 ・1カ国につき10年1回 ・BIEとの協議	・年間最高2回 ・向大陸では、最低3カ月の期間を置く。 ・異なる大陸では少なくとも3週間の期間を置く。	・暦年につき1回以下	・年2回以下 ・A類1及B類1の主要展示会 ・A類2と同時間確認せず
2. 開催期間	最低 3カ月 最高 6カ月	最低 8日間 最高 20日間	最低 3カ月 最高 6カ月	最低 8日間 最高 20日間
3. 申請	・開催初日の12～6年前	・開催初日の少なくとも4年前	・最低3年前から最高7年前	・少なくとも2年前
4. 特別規定	・園芸の全部門を対象 ・最低面積50ha ・展示スペースの最低5%は全期間参加の国際出展者向けに確保 ・少なくとも10カ国からの参加	・最低面積1.5ha うち外国参加者向け2000㎡ ・少なくとも6カ国からの参加 ・保証金1万スイスフラン	・最低面積25ha うち外国参加者向け3%を確保 ・保証金5,000スイスフラン	・最低面積6000㎡ うち外国参加者向け600㎡ ・保証金2,500スイスフラン
5. BIEによる承認	大国際園芸博覧会は、パリ博覧会国際事務局 (BIE) の承認を要する。			

る。

A類1の国際園芸博覧会は、同一国では10年に1回の開催となっており、また博覧会国際事務局（パリ）の承認が必要である。

大阪花博はこのA類1であり、後述するフロリアードやIGAも同様である。

(3) 造園建設業協会

AIPHの我が国を代表する会員である造園建設業協会は、造園技術の向上、造園事業の健全な発展をはかり、もって都市環境の整備促進、都市緑化の推進等に寄与することを目的とした団体で、昭和46年（1971）建設省の認可法人となり、建設業法による許可を受けて造園工業を営む全国の約1500社が会員となっている。

前述のとおり、大阪花博開催を機にAIPHに加盟し、大阪花博成功の一翼を担ったが、その後も引き続き造園技術の国際交流を重点活動の一つに掲げるなど国際交流の推進に積極的に取り組んでいる。

2 海外における国際園芸博覧会

ヨーロッパでは19世紀後半以降、庭園博覧会あるいは園芸博覧会が開催されるようになってきたが、特に、ドイツでは、第二次世界大戦後、1951年のハノーバー市での開催以来2年毎に、連邦造園博覧会（Bundesgartenschau, 略称：BÜGA）を、また10年に一度国際造園博覧会（Internationale Gartenbauausstellung, 略称：IGA）を開催してきている。

一方、オランダでは、1960年にロッテルダムで国際園芸博覧会が開催されて以来、ドイツ同様、10年に一度国際園芸博覧会が開催されるようになり、フロリアード（Floriade、「花のオリンピック」の意味）と呼ばれている。

これらの特徴は、単なる「お祭り」としてのイベントということではな

く、都市計画における公園緑地の計画・整備あるいは再整備、さらには、都市緑化、花の街づくりの推進などの契機としてとらえられていることであり、特にオランダでは花き類の生産、品質向上、消費拡大など花き園芸産業の振興を大きな目的としている。

IGAもフロリアードも、AIPHのA類1に位置づけられる国際園芸博覧会であり、フロリアードは1972年の開催以降西暦年の2のつく年に、IGAは3のつく年に開催されてきている。（表-3）

その他主としてヨーロッパ中心に、様々な園芸博、庭園博、園芸展示会などが開催されているが、今後多くの園芸博がAIPHに登録され、開催が予定されている。（表-4）

筆者は、1992年、オランダの行政の中心都市ハーグに隣接するズータマア市で開催された「フロリアード'92」、1998年、ドイツのシュトゥットガ

表-3 世界の国際園芸博覧会の開催一覧（BIE発足以来登録された園芸博覧会）

年	都 市 (国)	名 称
1960	ロッテルダム (オランダ)	フロリアード
1963	ハンブルグ (西ドイツ)	IGA '63
1964	ウィーン (オーストリア)	
1969	パリ (フランス)	
1972	アムステルダム (オランダ)	フロリアード'72
1973	ハンブルグ (ドイツ連邦共和国)	IGA '73
1974	ウィーン (オーストリア)	
1976	ケベック (カナダ)	
1980	モントリオール (カナダ)	
1982	アムステルダム (オランダ)	フロリアード'82
1983	ミュンヘン (ドイツ連邦共和国)	IGA '83
1984	リバプール (イギリス)	リバプール'84
1990	大阪 (日本)	大阪花博 (EXPO'90)
1992	ズータマア (オランダ)	フロリアード'92
1993	シュトゥットガルト (ドイツ連邦共和国)	IGA '93

表-5 フロリアード'92, IGA '93の概要

正式名称	フロリアード'92	IGA '93
国際園芸博覧会 ルメル 1992 World Horticultural Exhibition Floriade The Hague-Zoetermeer 1992	ハーグ・ズーテ イガ・シュトゥットガルト・エキ スポ'93 IGA STUTTGART EXPO'93	イガ・シュトゥットガルト・エキ スポ'93 IGA STUTTGART EXPO'93
会期	1992年4月10日～10月11日 (185日間)	1993年4月23日～10月17日 (178日間)
会場	オランダ, ズーテルメル市	ドイツ, シュトゥットガルト市
会場面積	68ha	100ha
主催者	フロリアード財団	IGA1993Stuttgart GmbH
入場者数	336万人	約700万人
参加国数	22ヶ国	40ヶ国
入場料金	大人 20ギルダー (約1,600円) 小人 12.5ギルダー (約1,000円)	大人 19マルク (約1,600円) 小人 12マルク (約1,000円)
予算規模	2億オランダギルダー (約160億円)	2億4,000万ドイツマルク (約202億円)
テーマ	7つのテーマ ①輸送, ②生産, ③消費者, ④環境, ⑤未来, ⑥世界, ⑦レクリエーション	自然の織りなすドラマ

ルト市で開催された「IGA '93」を視察、調査する機会に恵まれた。

概要を紹介すると以下のとおり。(表-5)

(1) フロリアード'92

フロリアード'92会場は、元々オランダ特有の干拓地(ポルダー)で、牧草地であったところであり、ハーグのベッドタウンとして発展してきたズータメア市が新たな住宅団地を整備しようとする地域である。

会場デザインは、当地のランドスケープ・アーキテクトの設計で、代表的なフランス式庭園のロンドン郊外のハンプトンコートヒルトンにしている。グースフットと言われる「あひるの水かき」をイメージした扇形で、会場計画の印象だけを印すと平坦な地形に池・水路、堤防(ダイク)を模した造成など非常にシンブルな感じだが、ダイクとそと上にモノレールを

表-4 1992年以降 AIPH に登録されている園芸博覧会

年	都 市 (国)	名 称	分類	開催期
1992	マルティニク島 (フランス領)	フロラー	A 2	2月
	ウェールズ (イギリス)	ガーデン・フェスティバル	B 2	4～10月
	ズータメア (オランダ)	フロリアード	A 1	4/10～10/11
	ロエンパス (アメリカ)	アメリカフロラー	A 2	4/20～5/3
	リエージュ (ベルギー)	フロラー・デ・リエージュ	B 2	5/1～5/10
1993	ポルドー (フランス)	フロラー・デ・ポルドー	A 2	4/17～4/27
	ディジョン (フランス)	フロリッシュ	B 2	3月
1994	シュトゥットガルト(ドイツ)	I.G.A.	A 1	4/23～10/17
	ナント (フランス)	フロラー	A 2	4月
1995	バレンシア (スペイン)	イペロフロラー	A 2	10月
	ベント (ベルギー)	フロラー	A 2	4月
	ベルリン (ドイツ)	ブンスガルテンショー	B 1	4～10月
1996	チュルン (オーストリア)	オーストライヒッシュ・ガルデンパウムッセ	未定	9月
	ジェノバ (イタリア)	ユーロフロラー	A 2	4/20～4/28
1997	クイーンズランド (オーストラリア)	インターナショナル・ホーティカルチュラル・イクジビション	A 1	未定
	ムラン・セナール (フランス)	フェスティバル・インターナショナル・ド・ジャルダン	A 1	4～10月
1998	淡路島 (日本)	ブンスガルテンショー	B 1	未定
	バレンシア (スペイン)	イペロフロラー	A 2	10月
1999	ナント (フランス)	ジャパンフロラー'98	A 2	3～8月
	ナント (フランス)	ブンスガルテンショー	B 2	未定
2000	ナント (フランス)	フロラー	A 2	未定
	ヘント (ベルギー)	フロラー	A 2	4月
2001	ジェノバ (イタリア)	ユーロフロラー	A 2	4/28～5/6
	カルスルーエ (ドイツ)	ブーガ	B 1	未定
2002	バレンシア (スペイン)	イペロフロラー	A 2	10月
	(オランダ)	フロリアード	A 1	未定
2003	(ドイツ)	I.G.A.	A 1	未定
2005	ヘント (ベルギー)	フロラー	A 2	未定
2006	ジェノバ (イタリア)	ユーロフロラー	A 2	4/28～5/6
	(イギリス)	ガーデン・フェスティバル	A 1	未定

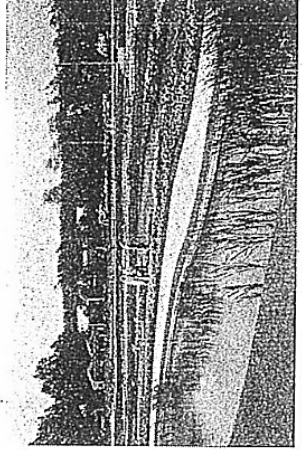


写真-1 フラワーテラス

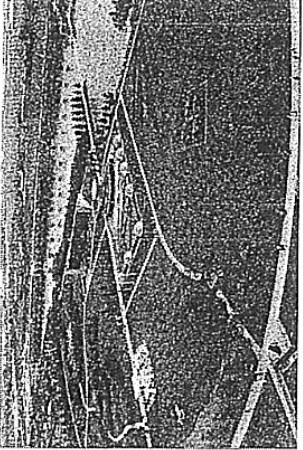


写真-2 タワーからみた会場風景
(未来・科学のゾーン)

配するなどヴィスタも強調していた。

主として直線で園路処理され、巡り易さや柔らかさの点で疑問はあるが、一つのコンセプトの明確な表現としては評価できると感じた。(図-1, 写真-1, 2)

会場は、輸送、生産、消費者、環境など7つのテーマエリアからなり、季節ごとの様々な展示やイベントが行われた。

(2) IGA '93

シュトゥットガルト市のほぼ中央に位置するローゼンシュタイン公園、キレスベルク公園など既設公園を会場として開催された。シュトゥットガルト市での造園展は、1939年以来すでに4回開催されたが、国際博ははじ

図-1 フロリアード'92会場図



図-2 IGA '98会場図

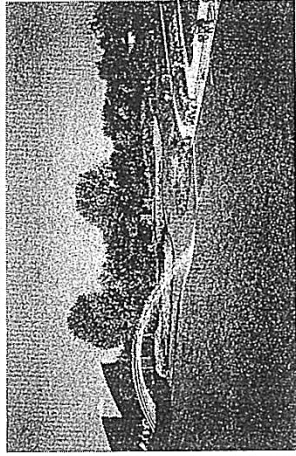
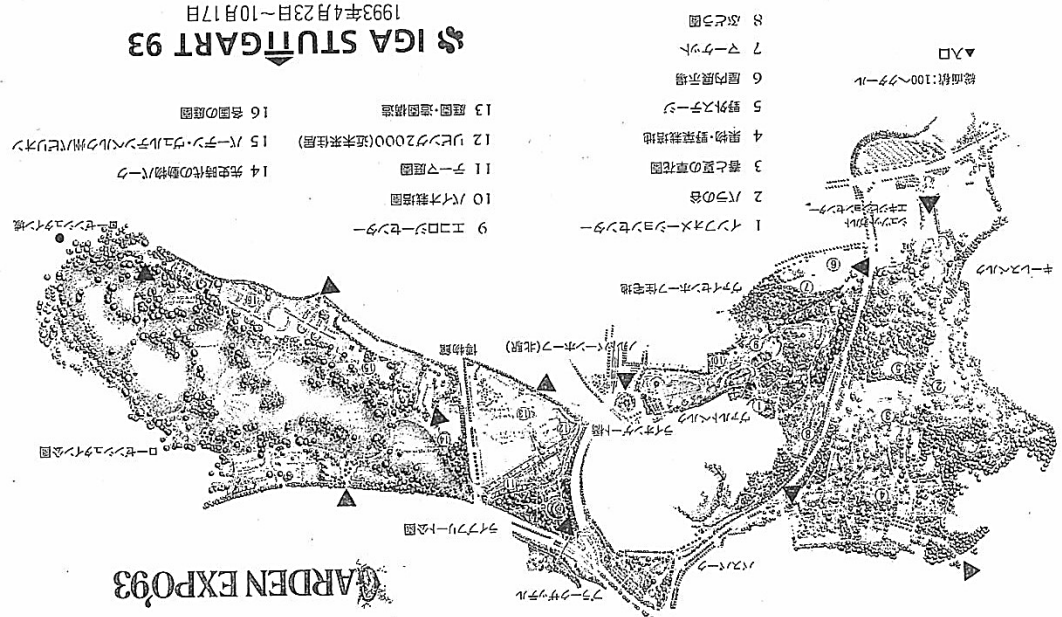


写真-3 IGA '93会場風景



写真-4 フクロウをイメージしたキャラクターの立体花壇

めてであった。

シュトゥットガルト市では、これらの公園をつないだ緑地帯整備構想“グリーンU”が、1920年代から都市計画上の課題だったが、分断されていた公園緑地が、今回のIGA '98を機会に、新たな区域の追加、歩道橋や遊歩道の整備により、長年の懸案解決に結びつけた。

IGA '98会場は、既存樹林、既存園路・施設を最大限生かしながら、芝生花壇や林床花壇など花き類と樹木類の調和を考慮した景観も創りだしていた。また、高低差100mにも及ぶ地形の特徴を生かし、噴水、流れ、池

などを配すなど変化を楽しめる会場計画になっていた。

さらに、一般市民が既に利用しているクラインガルテンを会場内に計画的に取り入れたり、省エネ、節エネを試みた新しい住宅団地「住宅2000」も会場の一つとし、実際に入居者を募集し、入居状況も展示として考えるなど新しい試みもしており、目をひいた。(図-2、写真-3、4)

3 国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98開催承認までの経緯

(1) 地元兵庫県での動きと経緯

兵庫県でははじめに述べた、1998年の「コミュニケーション文明の祭典」の主要イベントの検討が進められるとともに、平成5年(1993)にはフロリアード'92等の視察調査、AIPH事務局への国際園芸博覧会開催可能性打診などが行なわれた。その結果、大阪花博と同じA類1のタイプではなく、A類2とB類1との組み合わせで開催できることがわかり、さらに欧米ではA類1以外でも数多く開催されているが、アジアでは今まではないこと、A類2とB類1との組み合わせも実施例がないこともわかった。

また、明石海峡大橋周辺地域においては、兵庫県及び神戸市が中心となり国営明石海峡公園の誘致活動が行なわれていたが国際園芸博覧会開催予定地が淡路側の国営公園候補地でもあることから、所管の建設省との調整も進められた。さらに、農林水産省とも、園芸及び園芸博の点から調整、協議を行った。

そして、平成5年度政府予算案において、全国で16番目、近畿で3番目の国営公園、「国営明石海峡公園」の整備着手が決定したことを踏まえ、平成5年2月、(財)日本造園建設業協会に対し、兵庫県から1998年、淡路島で「国際園芸・造園博覧会」を開催したい旨の意向を表明した。

その後、(財)日本造園建設業協会と所管省庁である建設省が協議、調整され、AIPHへの開催申請が順調に進められた。

その後の経過は以下のとおりである。

- ・ 平成5年4月15日、日本造園建設業協会の理事会で同協会として1998年の「国際園芸・造園博覧会」の開催に賛同し、その推進を図る事を確認した。
- ・ 平成5年5月21日、日本造園建設業協会から「国際園芸・造園博覧会」の開催申請を国際園芸家協会(AIPH)へ提出した。
- ・ 平成5年5月26日、AIPH幹部委員会がロンドンで開催され、同委員会で日本からの開催申請書が正式に受理された。
- ・ 平成5年6月3日、AIPHマーケティング委員会から日本造園建設業協会に対し「国際園芸・造園博覧会」開催申請書に関する質問書が送付された。
- ・ 平成5年6月28日、AIPHマーケティング委員会に対し日本造園建設業協会会長と開催地の兵庫県知事名で同質問書に対する回答書を提出した。
- ・ 平成5年8月30日から9月4日まで、ドイツ・シュトゥットガルト市で開催された第45回AIPH総会で、日本から提案された「国際園芸・造園博覧会」開催が協議され、9月3日の総会において正式に決定された。

(2) 国際園芸家協会(AIPH)開催承認の経過

IGA'98開催中にシュトゥットガルト市で開催された第45回AIPH総会には日本からは、AIPH会員である(財)日本造園建設業協会の藤巻保之輔会長、横溝正昭副会長が出席したが、兵庫県からも貝原俊民知事をはじめ代表がデリゲートに加わった。また、建設省、農林水産省、関係各団体の代表も参加し、当地で昼食のレセプションを開催、プレゼンテーションを行い、貝原知事を先頭に積極的にPR、ロビー活動を行った。

AIPH総会では、第1日目のマーケティング委員会でもまず議論された。アメリカ代表からは、大阪花博のパビリオンの多さを例にとりパビリ

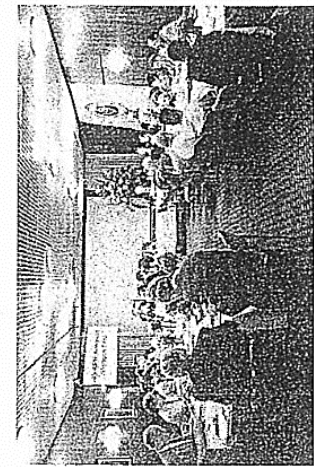


写真-5 AIPH 総会のようす

オンの建築面積がどの位になる予定かとの質問があったが、未定であり今後 AIPH の規定を遵守して計画にあたりたいと答え、了解された。そして、マーケティング委員会として承認することが決定された。

日本側の積極的アピールも好評で、9月3日に行なわれた総会ではマーケティング委員会からの報告を受け、正式決定された。日本側を代表して兵庫県の貝原知事が英語でお礼のスピーチを行い、各国の会員から暖かい拍手が送られた。

また、総会后、ドイツ、フランス、オランダなどの代表から日本デリゲートに対して、承認決定と成功を祈願するとの多くの祝福の握手もいただいた。(写真-5)

4 国際園芸・造園博ジャパンフロラ'98日本委員会

AIPH での開催承認決定を受け、平成5年(1998)10月、斎藤英四郎・(財)国際花と緑の博覧会記念協会会長、宇野収・(財)大阪湾ベイエリア開発推進機構会長や貝原俊民・兵庫県知事、藤巻保之輔・(財)日本造園建設業協会会長が呼び掛け人となり、この博覧会を国際的、全日本的な広がりの中で企画、準備を進め、開催していくため、基本構想や推進方向を検討する委員会への参画を呼び掛けた。

この趣旨に賛同した園芸、造園の全国的な団体並びに学識者、開催地関係団体で構成する「国際園芸・造園博ジャパンフロラ'98日本委員会」が平成5年(1998)12月7日に発足し、同日、第1回の委員会が開催され、基本構想づくりや推進方向の具体的検討がスタートした。(表-6、写真-6)

今後、専門委員会を設置し、園芸・造園等の学識者を中心により専門的な見地から議論を進め、平成6年(1994)春頃には基本構想や推進方向に

表-6 国際園芸・造園博「ジャパンフロラ'98」日本委員会の構成

名誉会長	斎藤英四郎	(財)国際花と緑の博覧会記念協会会長
会長	宇野収	(財)大阪湾ベイエリア開発推進機構会長
副会長	貝原俊民	兵庫県知事
副会長	藤巻保之輔	(財)日本造園建設業協会会長
副会長	三野重和	(財)日本花普及センター会長
	石野信一	(財)21世紀ひょうご創造協会理事長
	泉真也	環境プロデューサー
	井手久登	(財)日本造園学会会長(東京大学教授)
	兼高かおる	旅行評論家
	河合良一	(財)日本花の会会長
	川口幹夫	日本放送協会会長
	川名俊次	(財)日本公園緑地協会会長
	木村尚三郎	東京大学名誉教授
	小嶋恒	(財)日本花き生産協会会長
	小林治人	(財)日本造園コンサルタント協会会長
	近藤公夫	神戸芸術工科大学教授
	志村清一	(財)公園緑地管理財団理事長
	杉浦明	園芸学会会長(京都大学教授)
	中川和雄	近畿開発促進協議会会長
	永田萌	絵本作家
	三好正也	(財)経済団体連合会事務総長
	牧冬彦	兵庫県商工会議所連合会会長
	森祐造	(財)日本花き卸売市場協会会長
	八尋俊邦	(財)都市緑化基金会会長

(順不同・敬称略)

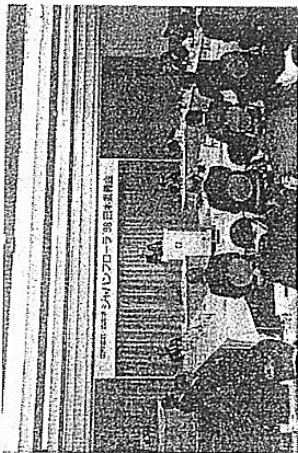


写真-6 第1回「国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98日本委員会」会議風景

ついてまとめられる予定である。

5 国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98の概要

(1) 開催予定地

ジャパンフローラ'98の会場は、淡路島北部、兵庫県が構想を進める「淡路島国際公園都市」内を予定している。

淡路島国際公園都市は、関西国際空港の土取跡地や計画中の国営明石海峡公園、日仏友好のコミュニケーション・モニュメントの建設が予定される県立淡路島公園などの丘陵からなり、明石海峡大橋や大阪湾が一大パノラマとして眼前に広がる大阪湾ベイエリアの中でも優れた景観を有する場所である。

ジャパンフローラ'98はこの国際公園都市の「花と水辺のゾーン」に位置づけられている土取跡地の平坦地、約50haの区域を予定している。

(図-3, 写真-7)

(2) ジャパンフローラ'98の概要

第1回の日本委員では、基本構想の概要について議論され、アウトラインが以下のように決められた。

図-3 ジャパンフローラ'98開催予定地

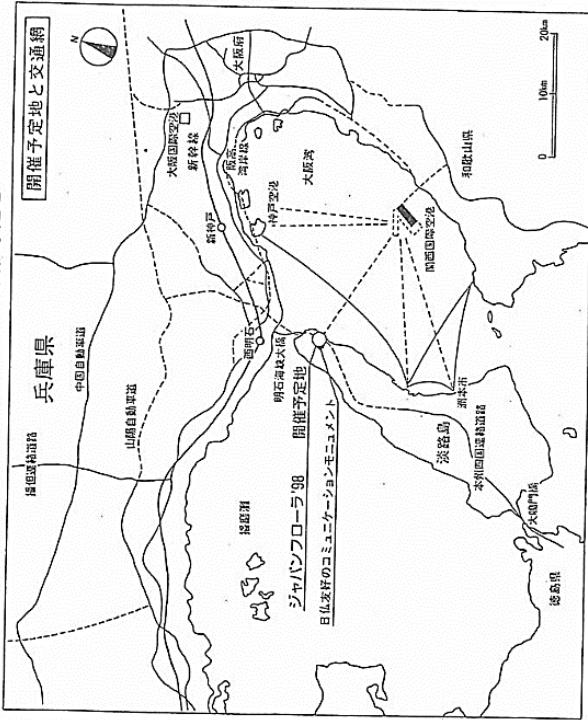


写真-7 開催予定地の現況

1. 開催の意義

- ・地球環境の保全と創造に望まれる「人と自然のコミュニケーション」のあり方を追求する。
- ・花と緑にあふれたヒューマンな街づくり、新しい公園づくりを世界に向けてアピールする。
- ・園芸や造園のこれまでの思想を紹介し、その技術とシステムを一箇に集めて展示する。
- ・園芸や造園の新しい技術の開発を進め、その国際的な振興をはかる。
- ・博覧会の開催を通じて、大阪湾ベイエリアの新しい発展や、世界都市・関西の形成に貢献し、あわせて花や緑あふれた国土づくりに寄与する。

2. 名称

- ・国際園芸・造園博「ジャパンフローラ'98」

3. テーマ

- ・「人と自然のコミュニケーション」

4. 博覧会の種類

- ・国際園芸協会 (AIPH) の規約による
 - A類2 国際園芸博覧会
 - B類1 国際参加のある国内園芸博覧会 (長期)

を同時に開催する。

5. 会期

- ・1998年の春から夏 (3月～8月) を検討し、A類2は4月から5月にかけての20日間とし、B類1は3月から8月で検討する。

6. 会場

- ・兵庫県の淡路島北部、津名郡淡路町及び東浦町にまたがる淡路島国際公園都市内とする。

7. 展開方針

- ・会場全体を、新しい都市環境を創造するモデル展示とした構成とする。
- ・展示は、屋内と屋外とで計画する。屋内展示は、園芸植物を中心とし、その技術をあわせ展示する。屋外は花や緑に加えて、国内外の庭園や造園技術を展示する。
- ・展示は、博覧会開催主体の計画するテーマ的展示に加え、AIPH加盟の各国はじめ広く海外に出展参加を呼びかける。あわせて国内の園芸・造園関係団体、自治体等に幅広く参加を要請する。
- ・花と緑の心を広げる多彩なイベントを計画する。
- ・園芸・造園の普及、花と緑に関する意識の高揚を願うさまざまな普及啓発活動を行う。また、花や園芸品などの販売も行う。

(3) 推進方向

ジャパンフローラ'98の推進方向についても日本委員会で議論され、以下のような方向が示された。

- ・国際園芸・造園博「ジャパンフローラ'98」の推進に際しては国際園芸協会 (AIPH) をはじめ、(財)日本造園建設業協会、(財)日本花普及センターなど国際的、全国的な園芸・造園関係団体の参加と協力を仰ぎ、建設、農林水産両省はじめ国土庁・外務省・通商産業省また自治省等関係各省庁の指導と助言のもとで進める。
- ・国内外の園芸・造園の学識者の知識を集め、これまでに海外各国や日本国内で開催された園芸・造園をテーマとした博覧会やイベントの経験と成果に学びつつ、国際園芸・造園博「ジャパンフローラ'98」の基本的な推進方向を立案し、その具体的な推進をはかる。
- ・国際園芸・造園博ジャパンフローラ'98日本委員会がまとめる基本構想や推進方向の作成事務とそれに続く具体的な計画と準備、

そして開催に際しての実務は兵庫県はじめ開催地の関係団体、とりわけ「朝夢の架け橋記念事業協会」の協力に大きく期待する。

6 今後の取り組み

ジャパンフローラ'98は、まだ基本構想策定の段階であるが、開催年まで残すところ4年である。会場の整備に向け、多くの課題も残されている。

土取跡地に生じた長大法面の修景緑化、アルカリ性の強い跡地、海に面しているための塩風対策等自然的な課題、計画が進んでいる国営明石海峡公園さらには博覧会場内をバイパスする予定の国道28号との調整、コミュニケーション文明の祭典として計画中の他の展示との計画性及び会場整備との整合性等社会的な課題、さらに、ジャパンフローラ'98としての展示企画、国際コンテスト企画、花や緑に関わる各種イベント企画、花き・樹木類の供給体制整備等々である。

今後、これらについては、建設省、兵庫県なども充分連絡調整を図りつつ、当協会の推進体制の確立を図るなどにより、順次課題を整理し、ジャパンフローラ'98の成功に向け対応していきたいと考えている。

おわりに

ジャパンフローラ'98は、大阪花博に次いでわが国で、そしてアジアで2番目の花博であり、大阪花博の成果に学びつつも、次世紀に向け新しい条件、環境の中での新しい形の園芸博として展開できないものかと模索しているところである。

今後、基本構想の早期策定を目指し、これに基づき会場計画、展開を進めていくこととなるが、関係各位の御指導、御助言を多いに期待するとともに御支援をお願いするものである。

(朝夢の架け橋記念事業協会祭典企画推進本部祭典企画部課長)

THE TOSHI-MONDAI KENKYU

JOURNAL OF MUNICIPAL PROBLEMS

Vol. 46, No.4 (520th Issue), April 1994
Cities and "Greenification"

— Contents —

- Cities and "Greenification"* (3)
: Motoo Yoshimura, Director, ENVIRONMENTAL PLANNING INSTITUTE
- The present condition and future prospects of parks and green areas* (15)
: Katsumi Yamada, Director, Parks Dept., MOC
- Citizen Participation in Urban "greenification" policy* (31)
: Fukashi Utsunomiya, Professor, Tokai University
- The Role and Significance of Urban Agriculture in the Urban Environment* (54)
: Masazumi Kashihara, Associate Professor, Kansai University
- The significance of "greenification" in urban disaster prevention and recent issues* (66)
: Tooru Suzuki, Chief, Maintenance Dept., Metropolitan Areas Development Bureau, National Land Agency
- Incorporation of Green Areas in Urban development projects* (81)
: Hiroshi Fueki, Director, Ryugasaki New Town Service Center
- Strategies of Urban "System Greening"* (97)
: Sumitaka Tashiro, Associate Professor, Chiba University
- Preparations for The International Gardening and Landscaping Exhibition "Japan Flora '98"* (110)
: Toshimitsu Tachibana, Chief Director for Planning, Planning Department of Hyogo Prefecture

TOSHIMONDAI KENKYUKAI
(ASSOCIATION ON MUNICIPAL PROBLEMS)

定価650円(本体631円) 雑誌コード・1669-4

【出典】兵庫県における淡路花博後の花緑イベント開催の成果と取り組み（橋俊光、「平成 21 年度日本造園学会関西支部大会研究・事例報告発表要旨集、pp.37-38）

『兵庫県における淡路花博後の花緑イベント開催の成果と今後の取り組み』

兵庫県県土整備部まちづくり局公園緑地課 橋 俊光

1. はじめに

兵庫県では、平成 12（2000）年、淡路島の大规模土取り跡地に緑を復元した淡路夢舞台および整備途中の国営明石海峡公園（淡路地区）を会場に、我が国では平成 2（1990）年開催の「国際花と緑の博覧会」に次ぐわが国で 2 回目となる国際園芸家協会（AIPH）承認の国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000」（以下「淡路花博」）が開催され、成功裡に終えた。兵庫県では、この成果等を踏まえ、県下各地域の緑化活動等を支援することを目的に「ひょうごフローラフェスタ」（以下「ひょうご FF」）を開催するなど取り組むとともに、平成 22（2010）年には、淡路花博から 10 年目を迎えることから、淡路夢舞台・国営明石海峡公園（淡路地区）をメイン会場に全島で「淡路花博 2010 花みどりフェア」（以下「花みどり F」）を開催することとしている。ここでは、ひょうご FF の開催結果及び成果と、花みどり F の概要について紹介する。

2. 国際園芸・造園博「ジャパンフローラ 2000」の成果とひょうごフローラフェスタ

淡路花博の開催に伴う成果としては、①失われた自然の回復～21 世紀型の環境博覧会として大规模土取り跡地の自然回復行為の展示、②当初予想の 1.4 倍、兵庫県人口の 1.25 倍に相当する 700 万人の来場者、70%が県外者、③阪神・淡路大震災から 5 年目の創造的復興の姿をアピール、④大きな経済波及効果、⑤会場運営、イベント等への多くの市民、ボランティア参加による開かれた参加型博覧会、⑥花卉生産、栽培技術向上等県内園芸産業への効果、などが挙げられる。

兵庫県では、淡路花博の成功を踏まえ開催理念、成果を引き継ぐとともに、これを契機に盛り上がった住民主体の緑化活動を支援し、花と緑のまちづくりを全県的に推進するため、ポスト淡路花博として、平成 13 年度から県下各地域持ち回りでひょうご FF を実施することとした。

3. 「ひょうごフローラフェスタ」等の開催概要と成果・課題

ひょうご FF は、平成 13（2001）年度から平成 20（2008）年度まで 8 年間にわたり県下 8 地域の都市公園等を会場に開催された。摂津（阪神）、播磨、丹波、但馬のいわゆる兵庫五国を一巡したことから当初の目的は達成した。開催結果は、表 1 のとおりである。

8 年間の総括では、延べ開催日数 36 日間、延べ展示期間日数 85 日間、来場者数は、約 69 万人、開催経費の総額は約 2 億 6 千万円であった。毎回ごとに実行委員会を立ち上げ議論、検討しテーマ等内容を決め、これらに沿ったテーマ展示とともに、花壇・コンテナガーデン・ハンギングバスケットなど一般参加ガーデン展示、県内農業高校参加のスクールガーデン、造園関係団体・住民団体等参加のモデルガーデンなどの展示、これらを対象とし顕彰するコンテストも実施した。また、団体・NPO 等の PR ブース、園芸・木工等教室の実施や、地域特性ではオープンガーデンツアー（三田、丹波、淡路）や巨木見学ツアー（但馬）などその地域での積極的な取り組みを生かした内容のプログラムや展示物も企画された。その結果、各地の多くの県民への花緑にふれあえる機会を提供できたこと、新たな花緑活動グループの誕生、既存グループの活発化などの成果とともに、より効

果的な実施手法・体制、地域団体等との連携や支援のあり方、経費確保方法等が課題として挙げられる。

4. 「淡路花博2010 花みどりフェア」の取り組み経緯と概要

花みどりFは、実質的には平成20年10月に検討がスタートし、平成21年4

月基本計画が策定された。開催趣旨を、淡路夢舞台の緑化再生・環境再生の成果の検証と取り組みの方向性を継続的に探ること、淡路島の地域振興に資することとし、開催理念として、①地域から取り組む新たな地球環境の創造、②人と自然の協働と豊かなところによる新たな共生空間の形成、継承・発展、③環境立島「公園島淡路」から新しい花みどり文化の発信、としている。同年6月、実行委員会が設置され、実施計画が議論されるとともに、出展者等参画者を募るなど準備を進めている。概要は表2のとおりである。メイン会場では、国営明石海峡公園での「フラワーアイランドパーティ」、奇跡の星の植物館の「フラワーショー」などの各種展示をはじめ、ノーベル賞受賞者による「自然と科学」フォーラム、「公園・花・こども国際フォーラム」などの催事等様々なプログラムが予定されるとともに、サテライト会場とのネットワーク化も含め全島展開で開催予定である。

今回の開催決定にひょうごFFとの政策的な継続性は特になく、また、規模等、体制等の相違があるものの、これまでのひょうごFF開催の実績等の延長線上にあるものと考えている。

4. おわりに

今回の花みどりFが人と自然の協働、継承・発展を理念としているところに、新しい視点と大きな意味があると思っており、これまでの花緑イベントの成果等を踏まえるとともに、今後の開催等につなげるためにも成功に導きたいと考えている。

回	年度	開催都市	開催場所	開催時期・期間	展示期間	来場者数(千人)	開催経費(百万円)
1	平成13(2001)	神戸市	ポートアイランド中央緑地特設会場	4/28~5/6(9日間)	同左	365	58
2	平成14(2002)	小野市	市立ひまわりの丘公園	9/14~9/23(10日間)	同左	259	54
3	平成15(2003)	姫路市	市立姫路公園	10/4~10/13(10日間)	同左	40	39
4	平成16(2004)	日高町	県立但馬ドーム	10/21~10/24(4日間) (台風のため中止)	同左	-	30
5	平成17(2005)	三田市	県立有馬宮土公園	10/22~10/23(2日間)	10/22~10/30(9日間)	10	24
6	平成18(2006)	尼崎市	県立尼崎の森中央緑地	9/17~9/18(2日間) (台風のため1日のみ実施)	9/17~ 10/16(30日間)	3	23
7	平成19(2007)	篠山市	県立丹波並木道中央公園	10/20~10/21(2日間)	10/14~ 10/28(15日間)	4	23
8	平成20(2008)	淡路市	県立淡路夢舞台公園	10/4~10/5(2日間)	10/4~10/5(2日間)	7	9
合計 8回				のべ36日	のべ85日	688	260

注1)ハッチの開催場所は、都市公園。
注2)第6回から、開催期間の延長等により展示期間(開催期間含む)を設けた。来場者数は、開催期間中の人数。

表2 「淡路花博2010 花みどりフェア」の概要

テーマ	「人と自然の新たなコラボレーション」	
会期	平成22(2010)3月20日(土)~5月30日(日) 72日間	
会場	メイン会場:淡路夢舞台、国営明石海峡公園	
	サテライト会場:	あわじ花さじき、県立淡路島公園・ハイウェイオアシス、淡路ワールドパークONOKOROほか12施設
主催	淡路花博10周年記念事業実行委員会 会長:井戸敏三 兵庫県知事 委員長:瀧川好美 (財)淡路島くうみ協会理事長 委員:国土交通省近畿地方整備局、兵庫県ほか47団体	
来場者数	(目標)メイン会場:約50万人、サテライト会場:約120万人	
入場料	無料(但し、国営明石海峡公園、奇跡の星の植物館は有料)	
開催経費	約150百万円(淡路花博事業基金からの取り崩し)	
事務局	(財)淡路島くうみ協会、兵庫県国土整備部まちづくり局公園緑地課	

注)(財)淡路花博記念事業協会は、H21.4.1から(財)淡路島くうみ協会へと発展的に解散した。